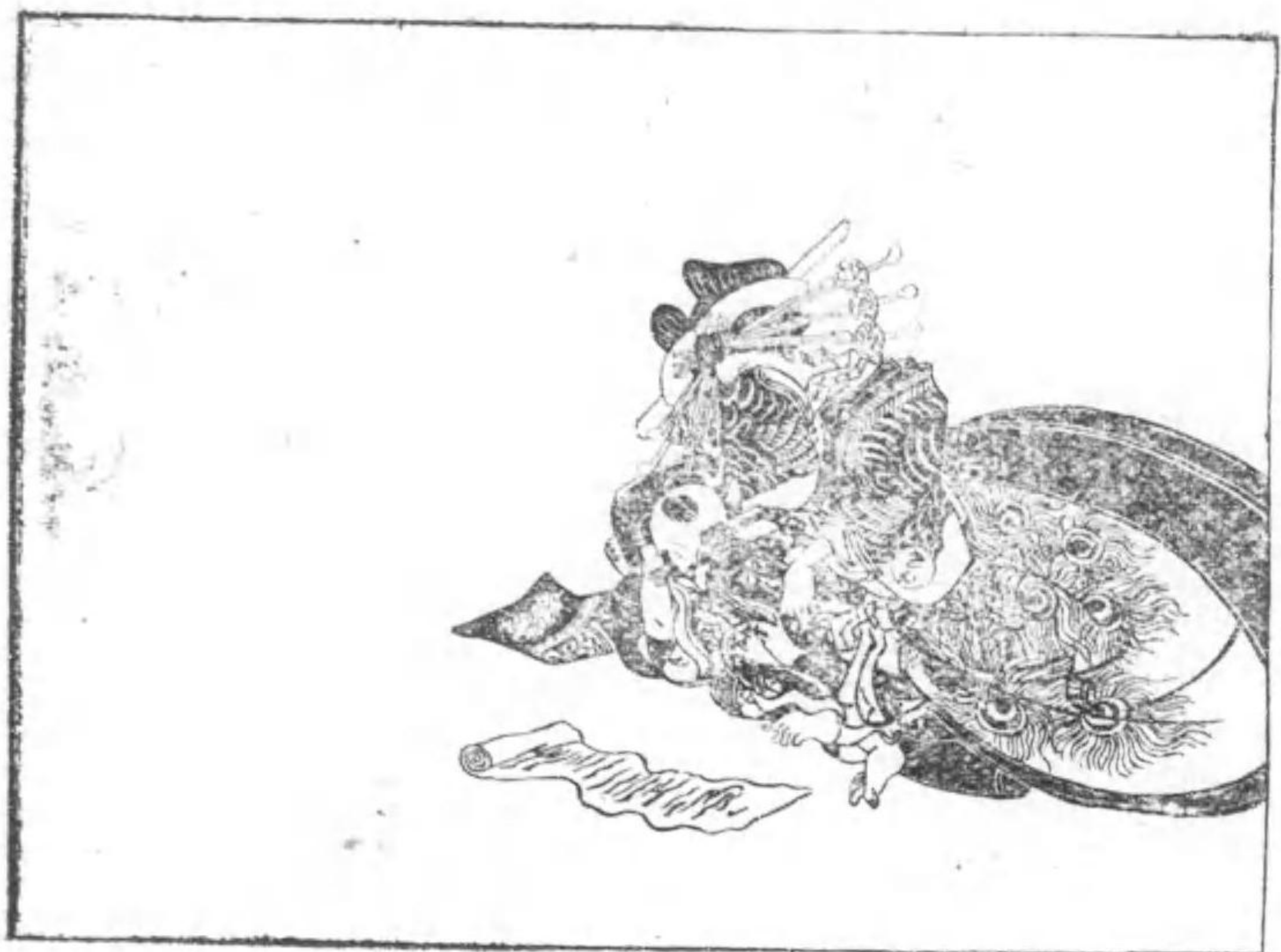


集ひ、珍しさに物見るは、世間見ぬ身の習ひぞと、餘外に見なして階子の段、おさめは既に上らんと、したる所へ新造漕船、

漕船「モウシく、お花魁え、一寸店迄お出でなんして、彼の子の言ふ事お聞きなんし、年は漸ろ六ツか七ツ、可愛らしい男の子が、順禮とやらの様な形で、花魁に逢ひたいと言ふを、皆は馬鹿にして、黽つて計り置きすが、可愛相でなりいせん。」と言ふにおさめは新松の、年恰好ぞと思ふより、何とやらん胸躍り、若しや尋ねて來はせぬか、夫れにしても只一人、遙々來よう筈もなし。殊に姿は順禮の、様ぢやと聞けば疑の、いとゞ重なる重ね袂、裾かい取つて足早に、到りて見れば我が子の新松、いと見すほらしき順禮姿、籬の方に背を付け、笑ひ慰む大勢の、顔を見遣りて居る様子、おさめははつと驚けど、さあらぬ體に差寄つて、物言ひ掛けんとしたりしに、新松は母の顔、見るよりはつと飛び立つ計り、母様、喃」と言はんとせしが、子心にも了簡して、ぢつと堪へて物言はぬを、母は尙更餘所々しく、態と扱ふ他人の前、

おさめ「オ、可愛らしい順禮さん、お前は何處から御座んした。私に逢ひたい用と云ふは、



大方お前他の人に、頼まれた言傳でも、定めしあるので御座んせう。用があるなら、まア此方へ。」と、手を取り上に上らすれば、新松賢く母の素振曉れば、始終物言はず、母の仕儘に手を引かれ、二階の一間に連れられて、人目なければ母の側、近く居寄りて小聲になり、新松「喃、母さん、逢ひたかつた。」と、言ふも涙の潤み聲。母は聞くより膝寄せて、掻き抱きつゝ、堪へ兼ね、わつと泣きたい處をも、聞えを憚り忍び音に、泣いて言葉もなかりしが、漸ろに目を押拭ひ、おさめ「逢ひたかつたは其方より、母は尙更十層倍、片時忘るゝ隙もなう、汝が身の事の

み思うて居たに、宜うまア、逢ひには来てくれた。併し年端もいかぬ身なれば、父様か叔父様の、連れて御座る筈なるに、何様して一人は来やつたのぢや。夫れに又順禮の様な、形とは合點が行かぬ。定めし様子があるであらう。氣に掛る、早う言や。」と、せかれて新松明返り、泣き入つて物言ひ兼ねるを、おさめは尙更胸たくく、

おさめ「泣いて居ては譯が知れぬ。變つた事でもあつたのか。」

新松「アイ、父様は。」

おさめ「さア、父様が何として。」

新松「父様は、死なしやツた。」

おさめ「やアくく、夫りや何と言ふ。父様は死なしやツたと、言ひやるのか。夫れは眞實か。よもやよも、其様な嘘も言ふまいが、何様云ふ譯で死なしやツた。様子を話して聞かすやい喃。譯を言うて。」と、抱き締め、振動かせば新松は、しやくり上げく、物も言ひえず袂より、件の文を取出し、母に見すれば狼狽へて、封じ押切り振開き、讀む度々に吃驚びくり、讀み終りては繰り返し、又繰り返し篤と見て、餘り呆れて涙も乾き、

おさめ「其様ならば父様は、お主の科を引受けての、切腹であつたのか。忠義の爲なら是非はなけれど、死なずと思案はなかつたか。味氣ない身の成行ぢや。此の事私に知らさうとて、態々此の子を只一人、寄越して下んす志、忝いが慘酷らしく、氣遣ひらしい幼子を、一人放して寄越された。」と、かき呟きく、正體涙に暮れたるが、又新松に打向ひ、末期の様子何や彼や、委しく聞きほし其の後に、用筆筒の小引出の中より出す紙包、小判で三兩ありけるを、手拭にてきりきり巻き、新松が懐へ確りと押入れて、

おさめ「其方は賢い者なれば、母が言ふ事能う覺え、家へ戻つて叔父さまに、此の金を渡さうぞや。此の三兩は勤めする、母がもつけの幸ひで、客から昨夜貰うた金、是れで父様新七様の、七日々々の問ひ弔ひ、萬事に遣うて下さりませと、能くく頼んで忘れやんなや。其の餘の委しい事やなど、文で後から言うてやる。斯様して長居する中に、若しや他人が見聞きもせば、勤めする身の障りになれば、早う行ぬのが私の爲、些も早く歸つてくれ。空腹じろはなかつたか。」と、神に備へしお備を、皆集めて六ツ七ツ、八ツには足らぬ幼子の、可憐しい餘りにいと白き、みす紙重ねて押包み、

おさめ『此處で食はせてやりたいが、斯様云ふ中も氣遣ひぢや。放しともない處なが、些も早
う歸つてたも。』と、餅を袂へ押込んで、

おさめ『呉々も懐の金は、無くさぬ様にしや。必ず人に見付かつて、道で取られて仕舞ふまい。
空腹じうなつたら此の餅を、食べながら行くが宜い。今までは道中で、物食べやんなと教
へたに、打つて變つて食べよとは、時とて親が子の賤。悪う思うてくれまい。』と言ふに、新松お
となしく、只アイ／＼と素直程、尙いぢらしく出で行くを、母は見るさへ胸迫り、獨りひれ
伏し泣き居たり。

新松は廓を出で、元來し如く我が家に、少しも早く歸らんと、八丁堤を急ぐ中、冬の日早く
黄昏れて、往き來稀なる折柄に、盜賊阿波の十郎兵衛は、此の頃續く不仕合、うめる手術の
ろろ／＼眼、何がな仕事あれかしと、來掛る向ふへ新松が、一人來たるに眼を着けて、

十郎兵衛『これ、順禮の子僧殿、貰ひ溜があるならば、何卒伯父に貸してくれ。日頃は此様な
吝なことを、言ふ己でもなければ、間の悪い處故、餓鬼の斷食する様で、餓えきつて、
居る所。』と、言ひつゝ見廻す恐しさ。返答もせず新松は、足早に行かんとするを、又呼び止

めて十郎兵衛、些と懐の膨れたは、確に錢と見て取れば、猫撫で聲になやしかけ、

六郎兵衛『これ程持つて居るものを、些の間貸してくれ。長くは借らぬ直返す。』と、懐へ手を
指し入れて、引出せば財布にあらで、手拭に包みし一品。新松周章て奪ひ返し、

新松『減相な事さツしやるな。是りや母様から言付つた、大事なもの。』と、取つた儘逃げんと
するに、十郎兵衛、帶際捕へ引戻し、大事な品と聞いて尙ほ、かゝり根性疑ひ起し、

十郎兵衛『隠す程尙ほ見たい、錢でなければ借りはせぬ。伯父に一寸見せてたも。』と、又引攪る
手拭攔み、中よりばらりと小判で三兩、

十郎兵衛『夫れこそ是れぢや、見たい筈。何卒些の間貸してくれ。』と、欺せど賺せど新松は、
一心に凝り固まる、母の言付け守りては、恐さも忘れてむしやぶり付き、

新松『何様言うても貸す事ならぬ。早う家へ持つて行き、叔父様に届ける金、返さにや己は喰
ひ付くぞや。』

十郎兵衛『ウム、言葉の優しい其の中に、納得すりや其の通り。未だもじや／＼張りや、斯様
して借る。』と、威嚇の白刃ひらりと抜き、

十郎兵衛「さア、是れでもかく」と、目前へ出されて幼子は、流石に怖さ恐しさ。さは云へ大事の金なるにと、今が其の身の絶體絶命、腹腸絞る泣き聲を、聞き咎めてや堤の下へ、折好く來かゝる一人の男、何事ならんと走り來て、ほの暗がりを通し見て、

長次郎「泣いて居やるは、新松か」と、言ふに驚く十郎兵衛、

十郎兵衛「借は由緒の人なりしか、仕事の邪魔よ。悪さも悪し」と、抜きまうけたるだんびら物、打込む處を早速の男、ひらりと代す身の捻り、夏の蝙蝠同前に、十郎兵衛が手許に付け入り、顔を跌りと足明り、

長次郎「やア、曲者は先頃も、瀬戸明神で覺えの面付。奴は噂の十郎兵衛と、推量に違ふまい。

重なる怨は此方に澤山。好い處で出會つたな」と、顔を知られし其の上に、早業早速に荒

肝取られ、流石の悪者敵はじと、引外して逃げ行くを、追はんとせしが踏み止り、

長次郎「何様で見抜いた袋の鼠、遠からず捕へる奴。併し證據のこつくいを」と、言ひつゝ落ち散る件の小判、取るより早く礫に打てば、逃げ行く者の耳の根へ、双物を以て切り込む如く、小判はがつきと立つたりける、目くるめくをも踏み止り、返さば尙も六ヶ敷と、其の

儘にして十郎兵衛、命拾ひし心地にて、何處ともなく逃げ失せたり。新松は打喜び、

新松「お前は、叔父様長次郎様、好い處へ來て下さつた。」

長次郎「此様な事でもあらうかと思つて、案じく迎へに來た。今日は如何なる悪日やら、弟めは死ぬ其の上に、夕霧様は盜賊の、汚名故に捕へられ、縣司へ引かれて行かるゝ。伊左衛門様は所へ御預け。中に無事なは己一人。まア、危かつた其方をば、救うたが吉左右故、何事も無事に濟まう。さア來い。伯父が、負うてやる。」と、新松背に長次郎、急ぎ足にぞ歸りける。

十一

斯くてあるべきにあらざれば、長次郎は縣司何某殿に、訴へ出でて藤屋の家の、一分始終を聞え上げ、千鳥の香爐は云々にて、盜賊十郎兵衛に奪ひ去られたる、事の始め終りを言ひ聞き、元彼は斯様々々の譯にて、夕霧が親の敵なる由。又斯様々々の譯にて、彼を捕ふる印には、耳元に疵を付け置きしなり。又弟新七が、自害の事を申述べ、其の書遺の一通を奉り

しに、司人某は、理非明断の人なる故、訴の趣明白にて、聊偽なきを察し、急ぎ組子を遣して、盜賊阿波の十郎兵衛を召捕するに、長次郎が言葉の如く、耳元に疵ありければ、之を證據に縛めたり。手下なりける船頭漕太馬士駄六諸共、獄屋にぞ繋がれける。然るに此の十郎兵衛は、彼の香爐を以て、小襖判官に奉り、高祿に有り付かん、結構にてありけるところ、多年の積悪酬い來て、忽ち天の網に掛れり。又藤屋の番頭曲六も、千鳥の香爐を目掛けければ、若き主人に酒色を勧めて、其の虚に乗りて彼の品を、手に入れんとしたりしは、不忠の罪直に酬いて、之も同じく召捕られ、様々吟味ありける所、夕霧に書せたる件の書付は、曲六が深き工みと云ふ事は、彼の漕太が白狀にて、其の外の悪事迄、事明白に分りしかば、夕霧が無實の罪に、落ちたるを憐れみ給ひ、直に細目を解き放し、伊左衛門に賜りたり。又伊左衛門が驕奢の沙汰は、新七が忠心によつて、其の罪を赦べられたり。是れ新七が忠義の精神一途にして、命を捨てたる處よりの事なりける。

斯かりければ十郎兵衛は、重科に行はるべかりしを、夕霧が母の敵なれば、讎討免許ありて、既に勝負に及びし所、豫てよりの心掛にて、何時の程にか夕霧は、長刀を使ひ覺え、念力

凝りたる女の精神、難なく敵を討ち課せ、年來の本意を遂げ、目出度伊左衛門と夫婦になりしも、萬事皆長次郎が、骨折厚き所なりとて、藤屋の別家となし、新松を養子にして、おさめをも身請なし、さるべき者に再縁を、勧められけれども聞き入れず、一生後家を立通し、新松に養はれぬ。彼の曲六漕太等は、追放になりければ、辛き命を助かりて、行方も知らずなりにけり。船頭九郎、馬方駄六等は、輕罪に行はる。悪事は消えて善報來り。目出度事のみ重なるも、偏に觀音の利益なりとて、猶ほ信心怠らず、愈々御影を仰ぎしは、いと稀なる物語と、伽草紙に書き綴りぬ。目出度し〜。目出度し〜。

伊左衛門

松

藤屋襦雛形

下之卷

大尾

(形雛襦屋藤に松) (170)

采女さま
参る菊方

兄弟丸蒔繪文箱

全六册

墨川亭雪麿作
香蝶楼國貞畫

采女様参る菊より
兄弟丸時繪文箱序

十二支の中兎の詞

玉兎書眠るは宰予を學べるか、臥したる木にも登り得ず、糞しの悪きを何ぞ責めん。汝劉備の徳を備へて、耳いと長かるや。汝子房が度量ありて、色いと白かるや。されど髭の無きにも非ず、如何なる謀をもて浪を走り、如何なる術をもて、月中に入る事を得たる。株に躓いて、愚者の爲に俟たるゝこと勿れ。脱兎の勢ひをもて、處女を過ること勿れ。惜しいかな、足は銀の簪に似て短く、目は珊瑚の玉に紛へど飾にもならず。譽とするはかち、山と、土舟の大勳。愛せらるゝは金太郎のお相手と、疱瘡守の蕪弄、或は雪燈籠に作られて、胸に嗔噓の焰を燃し、何に逆上せて熱くなるや、耳を嫉氣の角なりと、疑はるゝこと勿れ。必しも狗兎の三穴をもて、獵人の矢玉を防ぎ、裘に製せらるゝことを慎め。

天保十二辛丑年孟春發行

墨川亭雪麿

采女様參
る菊より

兄弟丸蒔繪文箱 上之卷

墨川亭雪麿作
香蝶樓國貞畫

○

戀せずば、人は情の無からまし、物の哀れも是れよりぞ、知るも知らぬも逢坂の、關とも云はず遊女の身、好かぬ客をも一夜は泊めき、香り移して後朝に、復の逢瀬をぶつ、つりと、百に約束手管の手練、艶な色香に迷はせて、嘘を商ふ商賣は、憂きが中なる憂き身なり。

肥前國濱崎の廓にて、分けて一番名打の全盛、雁字屋の玉菊とて、玉を欺く容貌に、星の數なる客の中、分きて實の色深く、勤を離れ眞實を、盡す情夫は近江國、佐々木高頼の家中にて、瀬川采女と云ふ若者、主君に従ひ此の國へ、長陣の徒然を、慰むるとて折節は、忍びて此處に通ふかみ、文の便は繁けれど、色戀ひてし互の仲、譯あり氣に見えにけり。

折しも今宵は裏二階、静けき一間に差向ひ、玉菊は慇懃に、

玉菊「お國元には歴とした、御新造様も御座んすを、何程勤番なればとて、繁々通うて下さんすを、風の便に聞かしゃんしたら、嘸かしお腹も立とけれど、嫌味はふつ、つり御座んせぬ。疑ひ晴らして下さりませ。」と、彼方に向ひ伏し拜み、詫ぶるを采女は打笑ひ、

采女「此處で誓言立てたとて、彼方へ届く譯でもなし。假令また之が女房へ、聞えてからが川向の、喧嘩とやらで埒明かず、怨み辛みの狀文を、寄越せばとても、國數多隔て、居れば、百日も掛らねば届きはせず、筆先での喧嘩の中、一年も経つたらば、歸國の事にならうも知れぬ。久し振りで歸つたもの、まさか顔見りや恨みも云へず、嫉氣の角も折れるであらう。案じ過しは捨て、措きや。」と、話の折柄表の方、物を咎むる犬の聲、

采女「あれは確に飼犬桃花、奇しく吠ゆるは怪しい。」と、采女は障子細目に開け、見下す庭に怪しき人影、忍足にて下に降り、物の陰より彼の曲者を、窺ひ見れば國元より、供に連れたる家僕四文太、夜も更ければ四邊には、見る人あらしと消え残る、石燈籠の火影に立寄り、懷中より取り出す、服紗包の一品を、刀の櫛に下緒を以て括り附けて、四邊を窺ひ堀越

に表の方、差出したる其の途端、フツと消えたる燈籠に、四邊の闇はもつけの幸、之を合圖に外面より、品を受取る人やある。再び吠ゆる犬の聲。采女は始終を篤と見濟し、獨り心に首肯きて、元の二階へ立戻り、玉菊が耳に口、私語く仔細を心得て、次の間へ起つ其の後にて灯吹き消し、平素の臥所に寝たりける。

尙ほ深々と更け渡れば、遠寺の鐘の音も、夜半の雲に埋もれて、四邊静寂と静まれば、瀬川が家僕一山四文太、欲に丸孤暗紛れ、一足抜きに忍び寄り、昇る二階の段梯子、一桁昇れば忠に缺け、二桁昇れば義に背き、三桁四桁五逆罪、六邪八卦十惡の、罪は纏てぞ己が身に、報ふも知らず悪人に、興して主を殺さんと、抜き設けたる太刀を、引倚めつゝ窺ひ寄り、采女が臥所を搔い探り、暗きながらも心に當度、頭微塵と打下す拳の際に、刃は櫛を走り抜けつゝ、彼方なる床に飾りし、魔利支天の尊像に立つたりけり。

此の物音に次の間より、手燭携へ玉菊が、周章で驚き立出づれば、仕損じたりと四文太は、狼狽へ逃げんとする處、臥所に寝たりと思ひの外、屏風の陰に身を潜め、豫て采女は窺ひけん、驚きもせず四文太が、逃げ行く後の帶際捕へ、引き戻せば暫時も堪らず、後に倒るゝ其



の處を、細頸捕へ聲振り立て、

『二女』狼の面被て顔押し隠し、其れと知らせぬ心でも、天罰通れぬ罪人奴。主人を殺害せんとする、非道を誰が赦さうぞ。』と、被りたる面かなぐり捨つれば、玉菊灯を差付くるに、采女は髻引掴み、無體に頭を押し仰向け、采女『案に違はぬ四文太奴、顔に被つた猿の面、其の畜生にも劣つた根性、逆磔にも逢ふ奴なれど、俺が油断をせぬ計りに、捕へられたがまだも仕合せ。憎い奴め。』と、言ひ乍ら疊に額を擦り付くれば、皮は破れて血は滲む、痛さに耐へかねひいゝ吠面、四文太『モウシ、旦那様、左様云ふ譯では

ござりませぬ。私めが全く粗忽。餘り暗さに途惑ひして、御寝なツて御座ると知らず、躓いて轉んだ拍子、脇差が靴走つた計りでのお腹立。主に双向ふなどと云ふ、勿體ないこと致しませうか。御免なされて下さりませ。」と、間に合ひ言うて詫ぶる中も、刃の櫛から抜けしを不審と、采女は尙も手を緩めず。

采女「え、抜かしたり拵へたり。陳じたとても眞實にしようか。殺さうとした其の證據、言うて聞かせる。よつく聞け。汝れ何者に頼まれて、某が秘藏して、少との間も側を離さぬ、李龍眠が畫龍の硯、彼の袋戸に入れ置いたを、宵に供して来た上で、人目忍んで盗んだ事、我が知るまいと思ふ愚さ。其の場に汝れが落したは、何時ぞや與つたる象牙の根付、眞向兎を刻みしは、生きた様な名作を、煙草入に附け置いたを、何時しか緒の切れたも知らず、落し置いたが運の盡、元の我が手に立戻る。扱は彼奴め此の一間へ、何しに來たぞと不思議立ち、袋戸見れば無くなる硯、汝れが所爲ぞと感付いたり。又た先刻奥庭にて、盗み置いた畫龍の硯、服紗包を其の儘に、刀の櫛に下緒を以て、きり、く、と括り附け、堀の外へ突き出すを、相擦奴が受取つて、其の場から逃げた様子、其の時の汝れが知つた、彼の相擦奴と言ひ合せ、

我を殺害せんとの謀み、其の時の様子を氣取つたも、我が生國は石見なれば、石篇に見と云ふ字をば、此の某が身に準へ、刀の櫛に硯石、下緒を以て括り附け、堀の外へ差出す、束にりは刺の文字、今宵某を害せんと、思ふ心を謎にて知らせ、物言はずして覺らせる、姦智に長けた合圖約束、家來の身にて主たる者を、刺客となつて害すべき、悪者共との言合せと、見抜いた眼は違ふまい。夫れ故我も汝れに知らせず、刀の目釘を抜き置くは、様々怪しい汝れが様子、斯うしたことのあるも知れずと、思ふに違はぬ此の振舞。今宵は亥の日頃から、信心申す魔利支天の、掛地に刃の立つたるは、即ち神の御身代り、勿體なや罰當り、八裂にしても飽き足らぬぞ。何と答へはあるまいか。」と、責むれば四文太言句も出でず、色青ざめて慄ひ居る。

玉菊は聞く度々、呆れに呆れて居たりしが、采女が側に近く寄り、玉菊「私が差出した事ながら、お前に双向ふ四文太殿、云ふまでもない不忠者。殺したとて咎は無けれど、お前とても此の廊へは、忍んで御座んす御身のこと、家來を手討にしたと云ふ、噂がお上へ聞えもせば、お首尾にかゝる譯もある。夫れに又親方様まで、迷惑の掛ること。

御身にお怪我の無いこそ幸ひ、生命ばかりは助きたい。左様すりやお前の奇特になり、悪うは報はぬ道理なれば、御勤番も恙なく、お家は益々榮える譯。」と、言ふに采女は打首肯き、采女「オ、サ、能くこそ氣が付いた。俺も左様思うて居れば、助け放すに仔細は無けれど、是れ程の悪者なれば、是れから心を切り換へて、正の人にならふと云ふ、誓言聞かば助けてやらを仇で返す様な、事を仕出すも計られねど、此の國にさへ居ぬと云ふ、誓言聞かば助けてやらう。」と、突き放されて四文太は、低頭たツ拜網の魚、再び水に入る喜び、二人の者を伏し拜み、四文太「段々の身の悪事、今更後悔限りもなく、生命をお助け下さりました、お禮の言葉も御座りませぬ。如何程お詫び申しても、もう此の上は召使はれて、下さることはなりません。いし、少しも早く此の國を、立ち去りは致しませうが、何處を何様との當もなく、扶持離れの袖乞同然。吁悪い事はせまいもの。主人の罰は當然、慙う成り果てるが天の懲戒、恥ぢ入りました。」と、鬼百合もほろりと零す一雫、安達が原の夜の露、濕つた顔さへ未だ怖者。采女は聽て面を正し、

采女「硯を盗ませ其の上に、殺させうとした當人の、名を有様に白狀せい。汝れ一人が所爲で

はあるまい。此の度主君高頼公、足利家の仰を受け、韃靼の夷を退治の爲、此の國に御長陣、數度の戦ひあるが中、我は武功數多なれども、さまでの功名無き者は、同役鼠山加次郎なり。彼奴性得偏執の心深き者なれば、我が軍功の多くして、お上の首尾好きを妬み、汝に言ひ付け人知れず、押片付けて其の身計り、出世を願ふものならん。又硯を盗ませしも、彼の名物は足利將軍、御懇望の品と聞けば、傳者を求めて室町へ、差上げなば其の功にて、直參にもならんかとの、陰謀と見て取つた。」と、問ひ詰められて争ふに、争ひ兼ねる天眼鏡、其の明察に驚き入り、四文太は頭を掻きく、

四文太「皆違ひは御座りませぬ。然り乍ら盗み取つた硯は、先から取り返し、従前に致しませう。併し此の人騒が世間へ擴ります時は、白狀致した私めも、矢張生命に拘る譯。加次郎様は尙以て、御身の破滅となりませう。幾重にも、其處等は何卒。」

采女「言ふ迄もない、荒立て、事を引き出す某ならねば、氣長に追々吟味する。」と、了簡廣き智慧の海、深き底ひは悪者も、量り兼ねつゝ怖氣立ち、徐々其の場を立去りけり。

○
叢時雨、兎に角物の邪魔をする、捻け心か奈良坂や、此の夜も既に曉方を、降り頻りたる袖笠の、雨は次第に急足、急げは廻る瀬田ならで、背から濡れたる露平、手鉾編笠一つさへ、持たでの俄か浪人や。四文太は悄然と、己が心の横しぶき、凌ぎ兼ねたる東風に、膚は鳥膚骨迄も、濡れて圓める骨團子、氣を煎鳥か山菽の粉、辛い目見るも主の罰。

四文太「あゝ、こりや未だ夜は明け切らねど、大分東は白んで来たが、雨宿しよう小家もなし、昨夜旦那に絞められて、七轉八倒騒いだ其の所爲か、悉皆と腹は空る、ちやんころきなか持つては來ず。吝忌々しい目に逢つたが、此の譯を鼠山様に内通したなら、約束の褒美の三分一にもならうが、大事な場所は失敗つたが、硯をゆがめた骨折代、些とはしてくれう。夫れさへあれば路用は澤山、何處へなりとも一旦隠遁らう。ウム、向ふから來る小提灯、濕つた乍らも一喫吹かう。」と、小橋の許に來る人を、待ち合せてぞ居たりけり。息もすたく、飛ぶ足の、文字に適うた飛脚の早助、小菅の笠に風合羽、狀箱首に引掛けし、天

目酒も鮫鞘を、小尻下りに打込んで、膝の色も紺限り、急ぎ來るを四文太呼び留め、四文太「申し兼ねたが、提灯の火を貸して貰ひませう。」と、言ふに早助立止り、早助「えゝ、其は貸さじで直せと云ふ所だが、物騒な街道でも無し、飛道具を持つ獵人でも無い様子。見れば何様やら此の雨に、笠さへ被らぬ濡れ佛の、顔も三度の此笠を、貸しても遣りたい程の事。嘸かし難儀さツしやらう。」と、近付きて四文太が顔、熱々と打眺め、早助「瀬川様の家僕四文太、奴には重なる怨みもあるに、扱て好い處で出會した。」四文太「然う云ふ奴は、前方の朋輩、岩堰水平だな。何の意恨でこの俺に、逢ひたいとは思つて居た。」

早助「えゝ、呆けまい。恨みの様子一々、其方に覺えがあらう。汝れ瀬川の家來で居乍ら、鼠山加次郎の悪意に興し、様々の悪謀、廣ぐを俺が氣取つた故、彼が口から露れてはならぬと、お役人に讒言構へ、惜しで御座る采女様も、暇を出さねばならぬ様に、仕掛けたは奴が所爲。お情深いお主の家、暇となつて詮方なく、仕付けもせぬ飛脚商賣。併し暗い事の無いことは、能う御存じの事なれば、忍んでお家へ出入を許され、此の頃お留守の御用を聞き、持つて

來た此の御狀、旦那様へ届けようと、大事に掛けて、是れ此處に。』

四文太「ナニ、己れが身の棚卸し、聞いては居ぬ。」と、四文太が、行かんとするを早助は、ぐつとせき上げ脇差の、こじりを取つて引き戻し、

早助「奴、逃ぐるるとて逃さうか。」

四文太「何の小癩な腕立。」と、雙方互に攫み合ひ、争ふ中に早助が、首に掛けたる狀箱を、屈む拍子に橋の上へ、ばつたり落すを四文太の、足の機に川中へ、蹴落されたも氣は付かぬ、命限りの大喧嘩。組んだる腕の振り解けて、二つに分れしが二人とも、抜き合せて切り結ぶ、一上一下の刃の光、紅ら引いたる横雲の、空に木魂の鐃音双音、鎗を削る折柄に、遠目に見付けし百姓ども、各々に大聲揚げ、

百姓「さア、村内の大騒ぎ、大騒動がはじまつた。皆が出合へ。」と罵るにぞ、各自に鋤鍬棒ちぎり木、得物揚げ近寄れば、四文太も早助も、取込められては六ヶしと、恐れて二人が相引に、刃を引いて西東、別れくに逃げ去りけり。

采女様參
る菊より

兄弟丸蒔繪文箱 上之卷 終

采女様參
る菊より

兄弟丸詩繪文箱 中之卷

墨川亭雪麿作
香蝶樓國貞畫

○

呼子の濱の眞砂路を、掃除しながら大勢の、奴共は仇口々、

□「野郎の寒山拾得か、高砂の姑姥見るやうに、一年中帚を持ち續けの、奉公にもほつと

した。此の折助には何がある。紺の臺無し天徳寺を、身の城廓と寒さの妨ぎ、獨りで膝を

抱き火鉢、團炭の頭をはる計り、人に頭の上らぬ勤、鬼殿よりも怖しい、お頭の來ぬ中が、

せめて此方が命の洗濯、思ふさま怠ける。」と、言ふに一人が顔振を打ち振り、

△「いや、これ臍内、其の様に怠けたら、お頭のお目玉を復食はう。今日は殿様判官様、此の

濱邊を御巡見。能く掃除して置くと、厳しい命令忘れたか。早く仕舞うて、上加減の湯豆

腐で、熱爛をきうと云はせた心持、大名になつたより氣樂で、言へたものではない。サア、

精出せ〜。」と、胡砂吹く夷にあらねども、砂の煙に照る日さへ、曇る計りに掃き立つる。

折柄此處へ鼠山加次郎、采女が飼犬桃花の、首筋捕へ引き摺り來り、

加次郎「こりや下僕共、掃除待て。此の加次郎が頼みがある。此畜生は瀬川が飼犬、何様した

譯やら某を、見ると何時でも吠え付いて、五月蠅うてならぬから、打てど撲せど、強情

い奴、齒を削いていがみ聲。昨夜もさる仔細ある、大事な場所で吠え廻る。もう堪忍がなら

ぬから、海の中へ大勢で、投げ込んで仕舞うてくれ。水を食らはば死ぬであらう。骨折代は

はづむぞ。」と、言ふに臍内小腰を屈め、

臍内「モウシ、お旦那、憚り乍ら此の斑めは逸物で、尾まできり、と左巻、言ひ分の無い強犬

を、水食らはせるは惜しいもの。」と、半ば言はせず眼を削き出し、

加次郎「汝れいらざる庇護ひ立て、坊主が憎けりや袈裟までと、云つたは飼主めが氣に食はぬ。

畜生ながら主に似て、小面の憎い奴なれば、彼の此の言はず投げ込め。褒美は之だ。」と、

加次郎が、紙に捻つて見知らず酒代、何より利き目は忽ちに、大勢の下僕共、桃花を引捕へ、

がんに縛に繩にて括し、小舟に打乗せ磯際を、三丁餘りも漕ぎ出し、潮の中へ伏し漬に、投り込みてぞ歸りける。心地よしとて鼠山が、喜ぶ折柄前拂はせ、近江の判官高頼が、瀬川采女其の他の、近習大勢引連れて徒歩路ながらに練り來れば、加次郎は遽に狼狽、彼の下僕等を逐ひ斥け、己れは砂に額を埋め、畏まりてぞ居たりけり。

濱邊に牀几直させて、判官高頼腰打掛け、采女加次郎兩人を、傍へ呼び近付け、

高頼「身は近江路に人と爲りて、筑紫路はまだ不知火の、此の度の在陣なかりせば、争で此處等を見ることあらん。取り分け今日は麗に、海の面も晴れ渡れば、見聞とは云ふもの、誠は半ば遊山のこと。打寛いで一献酌み、日頃の鬱を晴らさん。」と、割子竹筒を取り出させ、酒酌み交し興に入り、

高頼「采女は優に温順しき生れ、彼の見え渡る島山を、何とか呼ぶ答へて見よ。定めし辨へ居るであらう。」と、主の言葉は黙し兼ね、はつと采女は兩手を突へ、

采女「何辨へぬ私なれば、却々此處等の名所を、お答へ申すと云ふ程ならねど、承り及びしを、聊ながら。」と扇を持ち、

采女「右手の沖に遠く見ゆるは姫島、次は玄海島。陸は濱崎後の山は、名に聞えたる領巾振る山。真正面はおかう松島。左手の方は烏帽子島。遙の沖は壹岐の國、此處より幽に見えまする。」と、言ひ切らぬ中高頼は、海中をきつと見て、

高頼「アレ見よ。彼處へ一匹の大犬、何やらん口に銜へ、此方を指して泳いで來る。早出向つて様子を見よ。」と、下知致すれば傍廻りの、武士三四人汀に立寄り、

近習「彼は體に、其れなる采女が飼犬桃花と申すもの、何故潮に這入りましたか、高波を物とも致さぬ天晴の猛犬。」と、賞むるを鼠山むやくしく、己れが憎みて海中へ、打入れたりと言ひ兼ねて、手持無沙汰に眺め居る。

桃花は如何して、辛き命を助かりけん。水に屈せぬ強氣の逸物、勢ひ猛く駈け上るを、出向うたる武士立寄りて、銜へし物を能く見れば、油紙にて包みたる、旅状箱にてありければ、此は如何にして此の品を、海の中より銜へ來にけん、訝しさよと取り上げて、御前近く持ち行けば、高頼是れへと、手に取上げて、上に付けたる差札を熟々と打眺め、

高頼「世に訝しき事のあり。此は瀬川采女が宿の妻より、夫の許へ寄越したる文なるべし、夫



したてまつるに付け、御身に恙なく
 おはし候由を、風の便りに傳へ聞
 きおん目出たく、そののみいとく
 喜びまゐらせ候。此方にても妾を
 はじめ、悴友石ことも息才にて、片
 時も風邪の心地などとして、臥し候
 事すらこれなく、健に候まよ、
 御心安くおはし候様、存じまゐら
 せ候。去ぬる御別れのほどより、何
 時御歸陣にて候ぞと、一年近く待ち
 焦れ、一日も千秋の心地にて、永き

れを手飼の彼の犬が、如何にして知つたりけん、啗へ来るは誠に不思議。早く采女に取らせ
 よ。』と、仰せに従ひ近習の武士、采女に之を與ふれば、請取りて押戴き、表書を熟と眺め、
 采女「愚妻が方より寄越せし文、恐れ多くも御手に觸れ、誠に赤面仕る。』と、言ひながら懐
 中へ、押し入れんとなしけるを、高頼は打笑み給ひ、
 高頼「海山隔てし故郷の、妻の許より深切に、安否を問ひに寄越せし文、供先とて遠慮はない。
 早く見るのがせめての深切。斯く長々の在陣中、數多家來もあるが中、遙々文を送りし者、
 其の方が妻唯一人、其の志を無足にせず、早く讀め。身も聞かん。』と、仰せに愈々采女は愧
 ぢ入り、唯有難しと計りにて、頭を下げ居たりしを、高頼が尙催促あるに、已むことを得
 ず取り出し、讀み上ぐる其の文言。

おん懐しさ限りなければ、思召の程もかへりみず、空行く雁の翼に寄せ、一
 筆たてまつりまゐらせ候。春は早うかり我が君の、御馬に従ひお在して、
 見も知らぬ火の筑紫路に、山鳥の尾の長くしき御在陣、嘸御艱難の御事と察

冬の夜を明かしかね、襖もる風の冷かなるには、鎧の袖を片敷き給ふ、君の御上を思ひやれば、空怖しく勿體なく。

と、半ば聞くより判官高頼、野羽織の袖を濡し給ひ、

高頼「最早其の後聞くに及ばず、忠臣無二の瀬川采女、貞操節義の菊とやらん、此の夫にして此の妻あり、揃ひに揃ふ一双の比翼に似たり夫婦の上、感ずるに餘りあり。軍功も他に異なれば、是れより采女に暇を遣す。故郷に歸國して、妻子に早く對面し、其の心を安めよかし。我も程なく將軍の、仰せ降らば凱陣せん。恩賞は追つての沙汰。疾く急げ。」と、有り難き主君の仰せ、畏まる野袴の砂打拂ひ、早御暇と夕告げの、鳥無き島の蝙蝠と、喜ぶはたゞ鼠山加次郎。采女は主君を三拜し、明日は未明に出で立てば、舟で用意を今よりと、喜び勇み桃花を、引いて宿所に歸りけり。

○

ほのくくと、明石の浦に似たるかな。朝霧深き松浦瀉、濱崎の港より、瀬川采女は出舟の

用意、舟をしぞ思ふ雁字屋の、玉菊は此の日頃、馴染み重ねし其の仲を、今日別れては又何日と、逢瀬定めぬ悲しさや、涙の淵に打沈み、浮かぬ處を曳舟に、引き立てられて踉蹌と、寢亂髪に泣き腫す、眼瞼重げは姫百合の、朝の露に俯く姿、打柩の袂ひき上げながら、暇乞とて漸うに來りしを、采女は見るより聲を掛け、

采女「昨夜文で知らせた通り、急に歸る事になり、今朝早くより出舟の仕度、かねて約束した通り、妹の玉蟲をも、愈々一緒に連れて行く。其方は随分息才で、煩はぬやうにしゃ。」と、言ふに玉菊わつと泣き伏し、

玉菊「常々お情深い上、まア、其の様に優しいお言葉、之が泣かずに居られうか。昨夜のお文を見るよりも、嬉しいと悲しいで、私や半分氣違ひぢや。日頃杖とも柱とも、頼みに思う貴方に別れ、是れから何様して勤めませう。憂い辛い其の中にも、貴方に逢ふは力となり、妹に逢ふが樂みで、苦界渡つて居たものが、二人に離れて何とまア、命が續くものかいな。然りながら首尾よく、お暇が出て歸らんす、目出度い舟出に泣顔見せて、不吉と叱つて下さるすな。」と、顔も上げ得ず伏し沈む。

豫てより玉蟲は、采女が故郷へ歸る時、伴はれて近江に至る。約束にてありければ、今朝早くより濱邊に來り、姉にも逢うて暇乞ひなし、舟に乘らんと待ちたりしが、今玉蟲が別れを惜しみ、果てしなれば、采女は殆ど持て餘し、催す涙を咳に紛らし、わざ／＼聲を勵まして、

采女「悲しいは尤もなれど、遅かれ早かれ姉妹、離れねばならぬ約束。其れも手段の一つぞと、言ひ聞かせて置いたでないか。また言ひ出すに及ばねど。」と、四邊を見返り小聲になり、采女「元二人の父親は、父上の隼人様御存生の折、お出入の町人で、年波屋寄兵衛と云はれた者。父上とは懇意であつたが、貸金の紛紜から、家中の者に憎まれて、讀人知れず討ち果たされ、果敢ない最期を遂げし後、敵の手掛り求むれど、一年餘りも知れぬ中、母は其の事苦に病んで、續いて是れも死に失せる。後に残るは其方衆二人。此の肥前の伊萬里と云ふは、元父母の故郷故、聊かの好誼があつて、二人ながら引取られ、此處へ來たは三年前。不幸の續けば續くと、掛つて居た親類も、重なる不幸で皆死に失せ、到頭他人の手に渡り、姉玉蟲は川竹の、苦界に沈み妹の、玉蟲ばかりは漸うに、さる處に腰元奉公。親の敵を討ちたいと、



思ひながら姉妹とも、奉公の身は籠の鳥。其の身が其の身の心に任せず、其れのみ嘆いて居た處、不思議な縁で此の己は、春から此の地に長逗留。折々の憂さ晴らし、此の濱崎の廓にて、玉菊にふと馴れ初め、何事も互に打明け話して見れば、親しみある者の事なり。殊に又親の討たれた其の地と云ふは、もと近江での事なれば、我が歸國の時内々で、せめて妹玉蟲一人、伴うて歸つた上、力を添へて敵の手掛り、尋ね出して討たしてやらうと、堅い約束したところ、昨日圖らずお暇賜はり、急に歸國となつた故、玉蟲には奉公先を、遽に暇願はせて、連れて戻る目出度い門出、別

れは辛い筈なれど、泣いて居る處でない。』と、勵まされるれば玉蟲が、漸う涙押し止め、玉蟲『何時まで別れを惜しんだとて、盡きる譯ではあるまいし、思ひ切つて舟に乗る。其れに是れが一生の、別れになると云ふでもなし、聽て吉左右聞かせます。姉様、もう泣かしやんすな。私や泣かぬ。』と、言ふ顔に、かひを作るがなほ哀れ。玉蟲も目を押し拭ひ、玉菊『其様なら最早其方は行くか。永の道中煩はず、早う吉左右聞かせて給も。私も此の上神様や、佛様を信心して、其方が早う本望遂げ、無事で歸るを祈つたり、此の身も随分油断なく、此處に居乍ら聊かでも、手掛りを聞く様に、願ふより外はない。嗚う言ふではなけれど、猶此の上とも妹に、お力添へて。』と、言ひさして、采女に向ひ手を合せば、今が名残と顔眺め、ほろりと零す一雫、

采女『玉蟲、來や。』と、言ひ捨て、采女は行かんとする折柄、一人の下僕馳せ來り、下僕『お旦那へ申上げます。追風も好う御座ります。出舟の時刻が後れてはと、船頭共が催促。』と、言ふに瀬川が打首肯き、玉蟲伴ひ、飼犬桃花曳いて乗り移る。舟には見返る妹の顔、磯には見送る姉の顔、互に聲を掛けまくも、彼處と此處は早遙か、

行くは慰む方もあり、止まる辛さ俊寛が、歸洛に洩れし姿もあり。領巾振る山に佐保姫が、夫を慕ひし容に其の儘、哀れと云ふも愚にて、泣き焦れ伏し轉び、見ぬ間に舟は疾く沖へ、漕ぎ出しつゝ眞帆片帆、走る追風や朝風に、忽ち見えなくなりけり。

采女
玉蟲
玉菊
より

兄弟丸蒔繪文箱 中之卷 終

采女様参
る菊より

兄弟丸蒔繪文箱 下之卷

墨川亭雪麿作
香蝶樓國貞書

○

垣厳しければ犬入らずの、警を守る賢さや。夫采女が留守の間を、預る妻のお菊が貞節、行儀正しくきつとして、親類縁者雄猫でも、男たる者近寄せず、召使の下女下男も、四角四面に仕へけり。

勝手口かたてぐちに小腰ここしを屈かめ、歸かり來きりし家來わかつし四文太しもんた。お菊きくは見るより打喜うちきび、

お菊きく「オ、四文太しもんた、歸かつてか。やれく、久しや、随分健全ずいぶんけんぜんで。定めし旦那だんなももう其處そこへ、押つけお歸かりなさんせう。殿様とんさまも御歸陣ごきげんか。根ねツから沙汰さたは來こなんだに、ようまア、早はやうて嬉うれしいく。さア、草鞋わらぢ解ときや。足濯あしすぎや。夢ゆめではないか。」と、先潜まきくりして喜きぶお菊きく。水仕みづしし

掛かけて下女げぢよお春はる、足あしの濯湯すいどう汲くんで出だす、下盥しもはらにも奥底おくそこの、有あり氣けな顔かほに四文太しもんたが、物ものをも言いはず打萎うちしなれ、上櫃あがりがまに腰打こしうち掛かけ、

四文太しもんた「まアく、奥様おくさま、其その様ようにお喜よろこびなされましたは、お話はなが出來でませぬ。」と、言いふにお菊きくは不思議ふしぎ立ち、

お菊きく「然さう言いやれば何なにとやら、譯わけありさうに思おもはるゝが、其その様ようなら旦那だんなは、まだお歸かりなされぬと云いふことか。話はながあるなら早はやう聞ききたい。澁しぶくせずと言いひやれ。」と、せがむ程ほどなほ四文太しもんたは、空澁そらしぶ面めんを作り聲こゑ、

四文太しもんた「ア、お氣きの毒どくな事ことばかり。」と、言いひつゝ足あしを濯すすぎ終はり、端折はしより下くだして座ざに直ただり、四文太しもんた「先ま以もて御機嫌ごきげん好よい、貴女あなたのお顔かほを見みて安堵あんど。トキニ旦那采女だんなうねめさま様さまにも、御安體ごあんたいには御座ござりますれど、いやはや、頓とんと何なにともはや、申ま上げるも胸むねに詰つままる。と云いうてからが、言いはねばならず。」と、長ながい前置まへおきもどかしがり、

お菊きく「何言なにいやるのやら焦燥じれつい。きりく話はなすが宜よいわい喃なん。」
四文太しもんた「へイ、左様さやうなら申ましませうが。」と、側わきに寄よりく聲こゑを密ひそめ、

四文太「今度彼の地の御在陣に、數度の戰ある中に、御家中の諸武士、功名勳を現はすところ、采女様お一人は、微塵動も功も無く、殿様の御前も散々、朋輩中の笑種、側で見聞御家來の、無念さ悔しさ口惜しさ。其れと申すも濱崎と、云ふ處の色町に、玉菊と云ふお馴染の、美しい女郎があつて、其の色香に迷はされ、忙しい其の中でも、人目を忍んで通ひ詰め、其の眞實さ懇さ、舌緩い程お仲が好く、寐言にまで女郎の事ばかり、言うて御座るか、お役目は其方除け。其れ故何も身に染みねば、人目に立つ働きの、有らう筈がござりませぬ。奥様のお前様や、若旦那の友石様の事等は、ついぞく、言ひ出しもなさりませぬ。餘り見兼ねて私が、少しばかり御意見を、致したがお腹立ち、遽に暇やる暇出すと、裁人の詫びるのもお聞き入れなく、ぼんでんこく詮方なさに、御同役の鼠山様へ、駆け込んで路用の始末、途方に暮れて居ります。」と、嘘のありたけ並べ立て、廊にての意趣返し、御主の妻に焚き付けて、事あらせんとの悪謀、憎むに餘る悪者なり。

お菊は固より貞節の、女なれば色さへ變へず、

お菊「長々の御在陣、御不自由勝ちの事なれば、折節はお氣晴し、色里で柔かな手に、酌とらせて御酒なりと、飲りもせずばつくまい。色戀に性根を奪はれ、お役目を疎に、なさる常の氣性でない。其れにまた戦ぢやとて、何時でも勳をせねばならぬと、固めたことにも行かぬもの。勝負は時の運とやら、功も勳も拍子もの。必ず無ければ武士が廢ると云ふ譯でもあるまいに、其れ故お上の御不首尾に、なるとは何と合點が行かぬ。殊に妻子に心を惹かれ、毎度私や友石の、噂なさるゝ未練の氣で、長陣のお供がならうか。餘り話が大きうて、實とは思はれぬ。些と慎みや。」と、愧しめて、笑ひを含み居たりけり。

四文太は案の外、お菊が物に驚かず、言葉に乗らぬを早く見てとり、また手を代へたる悪謀、

四文太「然うをさめてお居でなされば、憚りながら此の身も安堵。兎角波風立たぬが結構。とは云ふものゝお痛はしや、あの御様子で御歸りなら、押付け御苦勞なされませう。其れは然様と奥様に、折入つての願ひは、先程も申す通り、お暇となり遽の浪人、差當つて身の片付、困り果てゝ居りますれば、有附きの出來まするまで、住み馴れた此のお家に、差置か

れては下さりませぬか。初めに變らず何事も、骨折つて務めませう。若しまた其れがかなひませすば、聊か金子のお恵を、願ひたう存じます。是れまでお務め申しました、好誼に願ひをお叶へ。」と、言葉巧みに言ひ廻す、押付けがましい訴訟を聞き、暫し思案の首傾け、お菊「成程、困るは尤もなれど、旦那様からお暇の出た其方を、私が一夜でも泊めて寝させ、道でも無し。何程お留守の中ぢやとて、世間も済ます氣も済まぬ。是れ計りは叶はぬこと、其方の言葉を疑ふでは無けれども、何の様な始末があつて、暇の出たことやら、茲で片口を聞いては、捌き難い譯。今此の様に來て居るさへ、本意とは思はぬに、却々置ことは言はれぬ。」と、お菊がすツかり言ひ放す、言葉に流石の痴漢も、頭を掻き掻き揉手して、四文太「然様被仰れば是非は無けれども、併し其處が今迄の好誼に、何卒無理を通して、お聞き入れ下さりませ。其れがならずば片々の、願ひを叶へて些とでも。」と、やつてみづく行掛の、駄賃と云ふ氣で悪執拗く、強請るが五月蠅さ傍の用筆筒より小判一枚、紙に包みて差出し、お菊は臆て面を正し、お菊「是れ取つて早う歸りや。一通りに暇やる、奉公人なら仕様もあれど、此方の人の豫ての氣

質、在勤先から遽の暇遣らしやんしたは能くくの、事が無ければ叶はぬ譯。斯様して遣るさへ内々ぢや。些も早う。」と、柔かな言葉の中にも針のある、氣色に何とも言ひ兼ねつ、侮り難くて押戴き、心の中には舌を出す、鼻紙入に押込みて、禮も匆々立つて行く。後に落せし一通を、お菊は取上げ表書讀み、

四文太殿へ、
加次郎 内用。

お菊「はてな。」と、不審に繰り開き、お菊「豫て内々頼み入れ候、年波屋寄兵衛事、彌々助け置き難く候へば、謀し合せし通り、人知れず御片付け給はるべく候。褒美として日ならず、直勤に取り立て候事、疑ひ無之候。」と、讀み上ぐるを聞き付けて、南無三大事を仕出來したりと、遽に四文太土氣色。四文太「ヤア、其れ見られては一大事。」と、立戻り駈け寄つて、奪ひ返さんとする一通。お菊も豫て心の中、思ふ旨やあつたりけん、好き物得しと喜ぶ顔付、後の方に押隠し、手を差

延べて四文太が、立寄るを押し隔て、

お菊「何故其方は狼狽へやる。此の手紙見たとて、何の大事があるものぢや。但し其方の身に取つて、障になる事でもあるか。」

四文太「イヤ、左様では御座らねど、些と他人には見せ難い、内用の大事な手紙。さア、お戻り下さりませ。愈々ならぬと被仰れば、奥様とて用捨は無い。手酷う致さぬ其の中に、きり、返して戻して。」と、狼狽へ騒いで取らんと争ふ、奴頭を長羅宇の、煙管でこつちり張子の虎、首を延ばして周章てる四文太、踏み潰したる玩具に、其の儘似たるぞ可笑しけれ。女ながらも尙武のお菊、

お菊「夫が留守と侮りやれば、爲にならぬが覺悟しや。欲しがる程なほ遣られぬ一通、何様やら何ぞの證據になり、迷惑をする者が二人ほど、出来さうな大切の此の手紙、其方に遣つて宜いものか。」

四文太「いえ、證據にも何にもならぬ。わけも無い手紙なれど、他人に見せてはならぬもの。」と、ぐツと急き上げ力に任せ、お菊が小腕片手に捻ち上げ、片手には件の一通奪ひ取り、

押し揉みて友石が、翫弄に庭に飼ひ置く、羊の檻にあは好くも、投げ込んだり。お菊も急き上げ走り行き、拾ひ取らんとする處を、然様はさせぬと追ひ引捕へ、止むる間に一通を、羊は早くも食らひけり。此の體を見て落着く四文太。此方のお菊は好い物を、手に入れたが口惜しやと、思へど態と然あらぬ顔。

お菊「假令證據の一通が、羊の餌食になるとても、勘文を読み取れば、争ふ事ももうならぬ。疾うから其様な事でかな。」と、言ひ掛くるを、四文太押へて、

四文太「否何が其様な事。彼の手紙は女から、寄越した大事の痴話文故、其れで他人に見せられぬ。證據の何のと言ふ様な、小六かしいものではない。たとへ又勘文を読まれたとて、萬一の時眼前、確な證據が無ければ、争ひも出来ぬ譯。眞に好い事してくれた、野暮でない羊奴だぞ。」と、もう大丈夫を見て取れば、四文太は嘲笑ひ、

四文太「併し、何だか嫌らしい、疑ひの掛つた彼の文。羊の腹に火が燃えて、焼け失せる事もあるまい。一字残れば證據の種、咽喉斬り裂いて紙を取り出し、見せるのが此の身の面晴。どれ、額を斬り裂かん。」と、庭に飛び降り取つて押へ、脇差の小刀抜き取り、羊の咽喉へ突

き立つれば、羊は悶え鳴き苦しむ。お菊は見るより腹立聲、

お菊「友石が大切の翫弄、罪ない羊に傷を付け、畜生に怨みもあるものぢや。憎い仕方。」と、罵る聲。友石は玄關に、雀に弓を射などして、遊び居たるが駈け來り、

友石「俺が大切の彼の羊、何で汝れは殺しをる。」と、言ふより早く小弓に矢番へ、きつて放せば誤たず、額にカツキと立つたるにぞ、眼眩みて倒るる四文太。其の間にお菊は用意の脇差、ひらりと抜いて差し翳し、起きば斬らんと身構へたり。

四文太は漸う這ひ起き、眼を押し開けば白刃の光り、母子が勢ひ見るよりも、是りや堪らぬと外面へ飛び出で、後も見ずして逃げ去りしは、心地よくこそ見えにけり。

○

故郷は花ぞ昔の香に匂ふ、寒紅梅の庭の梅、ありしに變らぬ我家かな。鶯はまだ訪ひ來ねど、我は古巢へ歸り來て、妻の待つらん初音をば、聞けて喜ぶ顔見んと、瀬川采女は供人を、先へ走らせ歸國の事、告ぐれば早くも妻お菊、伴友石伴ひて、門口まで出で迎へ、夫が様子

見るよりも、莞爾に會釋なし、

お菊「まあ、御機嫌好うお歸りで、嬉しいやら目出度いやら、夢ではないかと思はるゝ。友石お辭儀しやらぬか。是れはしたり父様のお顔を、暫く見やらぬ故か、臆面して何にも言はぬかな。ア、モシ此方の人、一年近う見やしやんせぬが、何と大さうならうがな。」と、言ふに采女は莞爾打笑み、

采女「御身も伴も健全な様子、見てから俺も安堵した。まだ殿様には御歸陣の、御沙汰無ければ、ど俺計り、早うお暇下されて、戻つたは外でもない。其方が遙々寄越した文が、不思議な事で殿様の、御覽に入つて貞節なを、恐れ多くも御感心遊ばした上、我が身にも軍功の有ることなれば、早く故郷に歸國して、妻子にも對面し、其の心を休めよと、身に餘る程有難い、仰せに依つて今日の對面、嘸かし其方も嬉しからう。」

お菊「嬉しい段では御座んせぬ。冥加ない勿體ない。眞に粹な御主人様、出陣の其の折は、水盃までした者が、親子夫婦恙なう、再び逢ふは優曇華の、花の故郷へ返り咲、皆殿様のお恵み故、眞に目出度い有難い。」と、善い事許りきく重ね、花の笑顔を作り枝、ためつすがめつ

妻の顔、久し振りに見る喜び、手の舞ひ足も亂菊の、思ひ亂れて様々に、案じ過しを今宵こそ、さぞ打解けて語るらん。

采女「これ友石、おとなしう、能う留守をして居やツた。土産は澤山買うて来たぞ。母様に世話やかしはせぬか。悪戯した事告げられたら、土産は皆他の子に、與つて仕舞ふが、何様ぢや何様ぢや」と、襟の後毛搔い撫でられ、友石はおとなしく、

友石「父様、御無事でお歸りか。私や母様とおとなしう留守して居ました。土産には肥前とやら云ふ處で、お前が持つて戦した、大きい弓を早く下され。私のは小うて、射中も利きませぬ。」と、遊びに離さぬ雀小弓、出して見すれば父は首肯き、

采女「お、小うても其れが良い。ものに射中て、利くやうでは、危うて未だ早い。」
友石「否々、先度も此の弓で、憎い奴を射たれども、利かぬ故逃げて行つたが、是れからは大弓で、彼奴が來ると射てやる。」と、力めば采女は押し止め、

采女「其の様な危いこと、爲ぬものぢや。」と、言ふをお菊は傍より、
お菊「其れには段々様子のある事、後で緩々。まア、内へお這入りなさツて御休息。嘸お草臥

で御座りませう。」と、打連れ内に入る後へ、人足共の擔ぎ込む、明荷葛籠や後附や、垂駕籠の中よりは、十七八のぼつとり娘、旅疲れやら面糞れ、見ゆれど何處か艶かで、鄙めきたれど育好く、執成さへもしとやかに、會釋し乍ら座に直れば、采女は娘を指して、女房お菊に打向ひ、

采女「不思議な縁もあるものぢや。豫て其方も知る通り、親父様の懇意になさツた、年波屋寄兵衛が横死の後、二人の娘は肥前へ引込み、人に掛つて居るとの噂。さて其娘の一人は此の娘、玉蟲と云うて妹の方、姉の名は玉菊とて、不幸で女郎となり、濱崎の廓に居たを、或時酔うた元氣に任せ、其れとは知らず、酒の相手に揚げて話して見れば、昔の親みある女。殊に姉妹二人共、親の敵を討つ存念。此は天晴の孝心と、思へば何卒力を添へ、討たしてやらうと様々に、心を盡して手掛りを、求むるも我が内心に、少し臭いと感付いた者のある故の事。併し其れは些の推量。もと親の討たれたは、此の地での事なれば、歸國の時は玉蟲を、内々で連れて戻り、心徐かに手掛りを、尋ね出して討たせる約束。其方も心を添へて給も。」と、大略聞くより手を拍つて、お菊は暫し呆れしが、傍近く身を摺り寄せ、

お菊「様子は今委しく聞いた。其様なら其方が、寄兵衛の乙娘で居やツたか。親御は當家へ出入をして、至極懇意であつたれど、其方衆には初めて逢ひます。是れから遠慮せず、何時までも逗留しや。」と、最と深切に慰むれば、玉蟲は嬉しげに、

玉蟲「お初にお目もじ致します。遠國者の不調法、お目掛けられて下さりませ。旦那様には姉妹が、深いお恵み受けました。」と、禮を陳ぶれば、お菊は會釋し、遽に下女に言ひ付けて、調へさせし酒肴、取り出して夫に勧め、無事で戻りし喜びを、述べつゝ其の身が酌に立ち、お菊「眞に何から話さうやら、言ひたい事の數々で、心もとぎまぎするわいな。此の玉蟲の事に就き、私の方にも話がある。十日ばかりも前の事、肥前へお供して行つた、四文太がふと戻つて来て、嘘か真か知らねども、貴方は今被仰ツた、濱崎の女郎玉菊が、色香に耽溺んで正體なく、戦にお動ない故に、御前の首尾も散々なれば、四文太が御意見を申したが、お腹立でお暇が出た故に、歸つては來たれども、遽に身體のしががが付かねば、使うてくれと頼んだれど、「暇やらしやんした者の事、私が何様まア使はれう」と、斷り言へば合力を、頼むと言ふ故僅ばかり、金遣つて追ひ歸す時、狼狽へて懷中から、落した手紙を拾ひ上げ、讀んで



見れば加次郎から、四文太へ遣つた手紙、寄兵衛を殺せとある、恐ろしい頼みの一通。扱ては敵は之で明白。豫て貴方が何卒して、寄兵衛が仇敵、取つてやりたいものとお噂、良い物が手に入つたを、四文太奴が奪ひ返し、羊の檻へ投げ込んで、羊に食はせて仕舞つた後、其の文體の争ひから、羊の咽喉を切り裂いて、彼の手紙を取り出して、見するが其の身の面晴と、可愛や羊を殺した處、坊が見付けて腹立て、小弓で額を射た處、眼を眩まして倒れたが、何處を何様逃げました。手紙は無けれど讀み取る文面、確に彼奴等が敵に極る。些とも早う討たしたい。」と、話すに采女は小膝を

打ち、

采女「其れで先刻友石が、大弓を土産にくれと、強請つたが今解めた。扱は俺が豫てより、臭い奴等と思ふに違はぬ、返すくも憎い四文太、今度暇を遣つたのも、豫て俺が大切にす、龍眼が晝龍の硯、鼠山に頼まれて、盗み取つた其の上に、殺さうとまでした處、廓にての事なれば、場所柄故と助けたを、まだ飽き足らいで不敵の働き。假令玉蟲姉妹が、敵でなくとも生け置かれぬ、主に双向ふ極重悪人。今思へば彼れが朋輩、岩壘水平に暇を遣つたも、皆彼奴めが役人へ、讒言構へて暇を出させ、實銘者に傷付けたは、我が一生の過失ぢや。今に思ひ知らせるぞ。」と、無念の様子に見えけるを、玉蟲は賢氣に、

玉蟲「是れぞと思ふ宛も無けれど、お供して来た甲斐あつて、馬降りの其の日から、耳寄のお話を、聞くと申すもお二人様の、皆お蔭と有難う、最早落着く心持。旦那様は嘸お疲れ。早うお休みなさつたなら。」と、言ふにお菊も傍より、

お菊「成程、其れが宜う御座んす。もう日も丁度暮れて来た。も一杯過して御寢なされませ。玉蟲も彼の離座敷へ、早う休むが宜いわい喃。」と、配る心の奥底も、涙出る程嬉しさの、

外へは心の十分一、言はぬ色なる山吹の、花の露添ふ玉川を、晝く襖を押開けて、下女が案内に玉蟲は、引かれて其方へ寢にぞ行く。

采女も旅の疲れの上、一杯過して好機嫌、奥の一間に床取らせ、踞踏く足にて入りにけり。お菊は後に取り散らす、仇野めきし残りの香に、下女や下男を呼び集へ、酒を勧めて喜ばせ、笑ひどよめく賑かさ。上和げば下睦ぶ、人の家こそ富貴なれ。稍時移りて十分に、皆々酔ひを盡せしかば、心任せに退かせ、いと睡げなる友石を、側近く應き、

お菊「今日は圖らず父様の、歸國なされた喜びに、紛れて平素の鼓の稽古、はつたりと外にしました。お留守の間に習うた鼓、明日父様にお聞かせ申し、宜う覺えたと賞められて、褒美に良い物下されうに、一遍復習つて見やらぬか。」と、言はれて睡さ打忘れ、

友石「そんなら昨日習うた處、調べてお前に聞かせませう。」と、小鼓執つて打鳴らし、
論曲「熊坂言ふやう、此の者共を手の下に、討つは如何様鬼神か、人間にてはよもあらじ。盗みも命のありてこそ、あらしやうや引かんとて、薙刀杖に突き、後めたくも引きけるが。」

と、鼓に合せ聲張り上げ、可愛らしくも諺ひけり。

離座敷に玉蟲は、寝ねもやられず來し方を、思ひ出せば悲しくて、父の位牌を取り出し、顔に當てつ抱きしめつ、涙に暮れてはく置の、表面も剝げる計りにて、回向の文を繚言に、我を忘れて聲を立て、

玉蟲「神佛は見通し故、敵は誰と御存じにて、草葉の陰で私等が、敵討たぬを御無念とも、切齒いとも思はんせうが、何様やら少し手掛りの、出來た事ゆゑ、今にもう討ち取るも、近うなつた。待つて居て下さんせ。返すくも憎い奴、思ひ知らせる恨みの刃、やがて受けよ。」と、用意の懐劍取り出しつゝ、打ち振る影の障子に、其のまゝ映りける。

玉蟲「あれ彼の座敷に、諺曲の聲、

諺曲へ此の者共を手の下に、討つは如何様鬼神か。人間にてはよもあらじ。

と、諺ふ文句は身に知らるゝ、此の父様を手の下に、討つは如何様鬼神か。憎い敵が無慚

の働き、人間にてはよもあらじ。」と、咳く聲も切れぐに、此方の座敷に聞こえけり。

座敷の方には女房お菊、離座敷に玉蟲が、獨言言ふ聲の切れぐに、折々聞え障子に映る、影坊子を見れば、何やら怪しき姿。扱てはと不審の小首を傾け、

お菊「よもやくと思へども、萬一したらば四文太の、言うた通りに此方の人が、馴染んで御座る玉菊といふ、傾城はあの娘で、夫れとは言はれず妹と名を付け、連れて戻りはなされぬか。玉菊と玉蟲と、姉妹とはほんの出鱈目、菊を蟲に呼び變へて、世間を欺める心ぢやないか。女の果敢ない廻り氣は、愚痴な事ぢやと思へども、今障子に娘の姿、映るを見れば懐劍を、取り差して居る様子、所々聞ゆるには、「何様やら少し手掛りの、出來た事故今にもう、討ち取るも近うなつた、待つて居て下さんせ。返すくも憎い奴、思ひ知らせる恨みの刃」と、言うたが仄に耳に入る。討ち取るも近うなつたと、言うたは妬みの心から、此の身を殺すと云ふ事か。待つて居て下さんせと言うたは、大方此方の人と言ひ合せてする業である。返す返すも憎い奴、思ひ知らせる恨みの刃と言うたが、幽に聞えたやうぢや。顔に似合ぬ怖しい女で、身の毛が立つわい喃。今友石が鼓に合せ、此の者共を手の下に、討つは如何様鬼神か、人

間にてはよもあらじと、諺うた通り彼の女も、鬼か鬼人か但しは蛇身か、人間にてはよもあらじ。心の恐い娘ぢや喃。女は女と思ひもせうが、聞えませぬは此方の人、成人の子もある仲で、浮氣らしい傾城狂ひ、女房の手前は扱て置いて、世間もあるに遙々と、連れて來るとは何事ぢや。その心ぢやもの四文太が、言うた通りに御前の御首尾、悪うて早く一先へ、歸らしたのでござんせう。」と、是れまでに無き迷ひの心、睚引き上げ恨みの面色、嫉妬激しき瞋恚の焰、之も全く四文太が、邪惡なる心より、さもなきお菊に疑ひの、心を起させ前日の、仇を返すと知られたり。

友石は小賢しくも、奥の間指して行かんとする、母の様子を見るよりも、手に持つ鼓で遮り止め、

友石「モン母様何故に、氣負ひかゝつて奥の間へ、お前は行かうとさツしやるや。それ、その顔はあれ見やしやれ、あの鴨居に掛けてある、夜泣きおどしの鬼女の面、私がつと小さい時、呪禁にさしやんした、槃若とやらに其のまゝぢや。懲んだが宜いわい喃。」と、さもいたいけなる子心に、懲まされて我身を顧み、心に作る鬼の角、脆くも折れし迷ひの念、顔とけ

て友石を、さも可愛氣に掻き抱き、

お菊「負ぶた子に教へられ、淺間しくも淋しくも、夫を恨んだ迷ひの雲霧、さツぱりともう晴らした。父様に科は無い。皆此の身の疑ひから、其方には氣を揉ませ、夫を恨んだ罪作り、暫しの間とて勿體ない。」と、悔む折柄間の唐紙、采女はさらりと開けて立ち出で、

采女「鳴けばこそ別れを急げ鳥が音の聞えぬ里の曉もがな。」これくお菊、此の歌は菅家の御詠、御身は心を知つてゐるか。」と、接穂も無く問ひ掛けられ、何と答へも納戸にて、様子子を夫に聞かれしか、面目無やと赧らむ顔、采女は脇差抜き持ちて、傍に立て置きし、屏風に張る鶏の繪をば、目掛けて裏搔くまでに、ぐツと突き込む鋒は、後の障子を打越して、有り合ふ明荷の葛籠を刺せば、中にて玉切る聲諸共、葛籠は自然と躍りけり。

采女「扱てこそ案に違はぬ。」と、罵る夫に驚く女房、玉蟲は走り出で、懐劍逆手に身構へなし、呼吸を詰めて控へたり。采女は莞爾と打笑みて、

采女「驚くまい女房共、宵に聞けば友石が、百日咳の呪禁に、鶏の繪を貼つたと云ふ、元より此の呪禁には、目玉へ針を刺して置き、逆に張るのが入用。其れを此處には本當に、張つ



討つたとは、其方そなたによう覺おぼえがあらう。其そのの寄兵衛よりのべゑが娘玉蟲むすめたまむし、親おやの敵たてちや覺悟かくごしや。」と、詰つめよりて一討ひとうちに、なさんとするを押し止め、四文太しもんた「因果いんぐわは車の輪わの如ごとく、惡あくの報はらいは忽たちち廻めぐる、此このの四文太しもんたが惡心あくしんは、言いはいでも好よう御存ごぞんじ。お主しゆうの罰ばちか知らねども、する事こと成なす事ことみなまづ惡わるく、終つひには此處ここで此このの死し様さま。物ものの道理だうりは押おされぬもの、是れ迄までの不忠ふちゆうの段々だんぐ、今漸いまゆるう目めが明あいて、後悔こうかい致いたせど甲斐かひもなし。さア、首くび討うつて玉蟲殿たまむしどの、父御ちちごの位牌ゐはいに手向たむけたく。今宵こんや此處ここへ忍しのんだも、誠まことは古主こしゆうのお菊きくさまに、先度せんだの仇あだを返かへさん心こころ、旦那様だんなさまに見み付けられ、到頭たうとうお手に掛かかつたは、此このの身みの

て置いて針はりも刺ささねば、針はりほどの事ことを棒ぼうと云いふ譬たとへに似にたれど、大だいは小せうを兼かねると云いふ故ゆゑ、此このの脇差わきざしを刺さしたばかり。鶏にせうを刺さすに何なんくんぞ牛うしの刀やいばを用もちひんやと、古こ人の言ことば葉はは此處ここながら、大だい切せきに掛かける友石ともいしが、謡曲うたひの障さばりになる咳せきを、早はやく止とめてと思おもうた處ところ、誰たが畫かいたか知らねども、此このの繪ゑに性根せうこんが入いつたと見みえて、あれく血ち汐しほのしたる事こと、名書めいしょの奇特きとくか但ただしは計けいか。」と言いひつゝ、葛つらの蓋ふたはね除のければ、轉まび出いでたる一山ひとやま四文太しもんた、脇腹わきはらしたゝか刺さし貫つかれ、苦痛くつうに耐たへぬ顔色かほいろなり。お菊きくは之これになほ驚おどき、お菊おきく「思おもひも依よらぬ事こと計けいり、何時いつの間まに四文太しもんたが、忍しのび入いつたか知らなんだに、貴方あなたは何様どうらうして好よう御存ごぞんじ。」

采女さいにょ「さア、其方そなたは知るまいが、先刻さつきちらりと庭口にわぐちから、忍しのび入いつたを見て置おいた。性せう懲こりも無ない此このの惡者わるもの、飛とんで火ひに入る蟲むし同然どうぜん。態々わざく討うたれに彼方あちらから。」

お菊おきく「成程なるほど、ホンニ此このの間まの、文ふみが證據しやうこで名乗ならずとも、敵たてに極ごくる此このの四文太しもんた。玉蟲たまむし、早はやう本望ほんまうを。」

玉蟲たまむし「娘むすめしう御座ござんす御夫婦ごふうふ様さま、お蔭かげで敵たてを討うちまする。是これまで顔かほは見み知らねど、寄兵衛よりのべゑを

業を果たすのなれば、お恨みとは申しませぬ。せめてもの置土産は、玉蟲殿に言ふ事あり。父御を討つたは此の俺で、頼手は鼠山加次郎、貸金の意恨の闇討ち。此の白状を證據にして、些とも早く本望を。」と、殊勝にも覺悟の體、合掌觀念なしけるを、采女は見やりて涙を浮かめ、

采女「鶏の將に死なんとする時に、其の鳴くこと悲し。人の將に死なんとする時に、其の言ふこと善し。大悪不忠の者ながら、末期に残す誠の言葉、善心に立ち返れば、些とも早く苦痛を助けよう。先刻俺が口吟んだ、菅公の御詠にも、鳴けばこそ別れを急げ鳥が音と、言うたは丁度四文太が、鶏の繪貼つた屏風の彼方の葛籠へ忍ぶは、死を急ぎ此世の別れを急ぐに同じと、附會けながら當座の謎々。それと知らねば女房は、其の身の疑ひ深いより、俺に愛相を盡かされて、別れるるかと思つてやら、面目無氣に赭らめた、顔容の其の可笑しさ。妬氣嫉妬も夫をば、大切に思ふ眞實から。何しにそれを咎めよう。殊に僅の間の疑心、友石に諫められ、其の疑ひの念を断ち、本心になつたで無いか。何は兎もあれ、さア、玉蟲、本人ならねど手を下して、父を殺した仇敵、ちつとも早く討ち取れ。」と、指圖に玉蟲甲斐々々しく、四

文太が背後に立ち廻り、刃を上ぐると見えたりしが、首は前にぞ落ちにける。

○

驛路の鈴の音冴えて、門より曳き込む乗掛馬、兩荷の上に厚蒲團、後附脇掛け蠅拂、打扮美々しく鼠山加次郎、ふらん野袴大小も、小尻上りのせかいらぎ、馬よりヒラリと降り立つて、供のおとなに言ひ付けて、上使なりと呼ばすれば、主人采女はまだ曉明、寢耳に其れと聞きつけて、遽に一間に取り繕ひ、其の身も周章で袴引掛け、女關の白洲に出で向ひ、采女「何は兎もあれ先づ奥へ。」と、加次郎を案内し、設の席の正座に直し、頭を下げ手を突へ、采女「存知も依らぬ上使のお出で、何事かは存せねど、先づ以て御苦勞千萬。して、貴殿にもおし續いて、定めし御發足なされつらん。拙者が昨日の到着に、今朝未明の貴公は御着。何やら急の殿の御意。」

加次郎「あア、仰せを聞かれればつべこべと、追従口も利かれまい、朝飯も咽喉に通るまい、吠面乾くを見るやうな。此の加次郎が御意を蒙り、御上使に立つた略儀は、今度彼の地の戦

ひに、寸分の功も無く、其れのみならず様々と、法度厳しい陣中へ、鼻毛らしい女房が文、寄越したばかりか御前に於て、読み上げたも腹の皮。其の貞節を思召し、お暇を下さるとは表向。誠はうッそり腰抜けと、蕙まれて歸されたり。さア、此の御書取、拜見あれ。身持情弱の咎めにより、永のお暇下さる間、其の旨お受けし召され。』と、權柄顔に差し出す、御書付を恭しく、采女は受取り押し頂き、封じを開き繰り展げ、読み終りて笑みを含み、

采女『御上使には御粗勿千萬。此の御書を下さるゝは、人違ひで御座らうがや。其の證據は文體を讀み上げてお聞かせ申さん。其處で篤り聞かれよ。』と、言ひ乍ら又繰り開き、

采女『屹度申渡し候。其の方事、日頃墨公等閑に存じ、其の上偏執の心深く、他人を訴致し候事、まゝ之有り、殊に此度長陣の中に、様々の悪行を振舞ひ、人を損ひ候事、以ての外的事に候。』

加次郎『いや何、采女殿、御身に一々覺えが御座らう。』

采女『兎も角も終りまで、讀み仕舞ふをお聞きなされ。』

采女『國に罷在り候頃、用達の町人年波屋寄兵衛に、意趣之有る旨にて、

人に討たしめ候由、略相聞え候。此の段は改めて、瀬川采女に吟味申しつけ候。覺えあるべき事に候間、疾くく白狀致し、彼の者が縁の者の手に掛かり、討たるべく候。若し違背致すに於ては、縛首に申し付くべく候。依つて申渡し件の如し。家長雨崎澁内承る。

鼠山加次郎殿。

采女『何と名宛を聞かれたら、滅す口も利かれまい。朝飯も咽喉に通るまい。』と、言はれて加次郎がちく／＼慄へ、色青ざめて物言はず、すんど起たんとする處を、采女は袴の裾を引止め、采女『仰せを受けて悪人の、吟味をするが采女の役目、逃ぐるとて逃がさうか。』

加次郎『いや、逃げも隠れも致さぬ。鳥渡用達に罷越すのぢや。爲ること成すこと左前、封じ厳しいお書付、他人の上よと思ひの外、我が身の上に降り變る、蜜甘酒甘口にも、持つて来たとは宜い面の皮。是れと知つたら道中から、隨徳寺とやつたもの。痴漢にされたか忌しい。』と、悔む顔にて隙間を狙ひ、裾振り拂つて逃げ出す、向ふへ人手押し廣げ、立ち塞がりて捕らゆるは、供して來りし一人の男、

早助「此様な事もあらうかと、荷廻しに雇はれて、長の道中氣遣うたも、御恩を受けた采女様へ、一つの功が立つならば、歸參の叶ふ事もあらうと、思ひ込んだ飛脚の早助、此方と一山四文太は、共謀で可怪な奴と、始めから見取つたに、推量に違はぬ此の始末、行くを支へる岩堰水平、割れても末に逢ふ主従。お旦那、繩を掛けませうか。」と、加次郎を下に引据ゆれば、

采女「出来した。水平共の方が、忠義は今に始めぬを、讒者の舌に乗せられて、理を非に某聞き歪め、暇をやりしは暗しとも、盲目とも蔑まん。過を改めて、今より直に歸參を許すぞ。何は兎もあれ玉蟲は、早く来て父の仇を討ち、本望遂ぐるが肝腎。」と、言ふに一間を駈け出づる、玉蟲は甲斐々々しく、用意の一腰抜き傍め、

玉蟲「様子は奥にて残らず聞いた。もう改めて問ふに及ばぬ。父の敵鼠山加次郎、さア、尋常に勝負しや。」と、斬つて蒐るを加次郎が、

加次郎「斯うなつては百年目、返り討にしてくれる。」と、大刀ひらりと抜き合せ、二討三討斬り合ふに、玉蟲が懐中より、尺に餘りし蛇の、閃き出で、加次郎が、双持つ手に絡まれば、

腕先自由に働かず、玉虫に斬り立てられ、足元しどろにタヂくく。采女は側に後見し、玉菊より預りし、日頃彼が信心なす、五大尊の尊像を畫きたる、一軸を捧げ持ちて、心の中に姉玉菊は不憫やな、仇討ちにすら立たねば、信心の奇特を以て、明王たちの力を添へ、妹に仇を討たしめ給へ、即ち其れが姉の功と、念じたるに不思議やな、牛に乗り弓引き給ふ、憤怒の御姿現はれ給ひぬ。是れ五大尊明王の中、大威徳明王なりしが、彌々力が加はる玉虫、物の見事に加次郎を、肩先より空竹割り、二つになつて倒るゝを、のし掛つて首を上げ、喜び勇めば采女夫婦、水平も大きに喜び、歎賞する事限りなし。

玉虫は懐中より、父の位牌を取出し、敵の首を手向けんと、見れど探せど位牌は無し。如何しけんと思廻す中、加次郎が利腕に、絡み居たりし蛇の、其の儘位牌と變ずれば、人々奇異の思ひをなし、扱ては寄兵衛が亡き魂の、なせる業よと云ひ合へり。

斯くて主君高頼も、足利家の命に依り、日ならず歸國ありければ、采女はありし事どもを、悉く言上せしに、よくこそ力を添へつるとて、御感の上肥前に於ても、軍功勘からずとて、祿數多加増あり。役儀も重くなりければ、やがて玉菊を身請なし、玉虫と二人をば、家中に

て然るべき若者の方へ、縁付け遣はしければ、其の莫大の高恩を、喜ぶ事限りなく、末長く
 好誼を結び、何れもく富み榮え、日出度き事のみ重なりける。日出度し〜〜〜。

采女様参る菊より

兄弟丸蒔繪文箱

下之卷 大尾

全六册

三勝半七 陸月深仲町
 小勝平三

鶴屋南北作
 歌川國貞畫



三勝半七
小勝平三

睦月深仲町序

然る大奥より藤間を召して、慰菅原傳授

作は出雲のお國とは、似寄の名をば當仕舞、同じ世渡の女舞、三勝も羽織唄女、浮名辰巳に半七は、刀差す身が鞆町河岸の送舟、初會の客に相方の女郎は、云號が狂言の八幡鐘、飲み明しても、鐘旭の半兵衛が買論、船宿の美濃屋平三が濟み濟まし、圓く納めて床の中、御最貞さまより仰せ下され候は、然るお方にて菅原の狂言を、藤間門弟打寄り致し候處、殊の外綺麗候まゝ、其の畫面を國貞に畫かせ候が、宜敷と御差圖。右口繪仕る南北が、愚作の世話狂言を取入れ奉り、御覽に入れ候。尤も客年の草稿ゆる、流行に後れ候ことも有之可申候へ共、不相變御用向、偏に奉希候以上。

版元 甘泉堂

三勝半七
小勝平三

陸月深仲町 上之卷

鶴屋南北作
歌川國貞畫

(町仲深月陸) (226)

幕引き付けると、雷鳴へ御節をかむせ、向ふより今市善右衛門、侍の形、遊蛇の目の傘を差し、後より長九郎町人にて、梅本の傘を差し出でて来り、花道にて、

善右衛門「ナント長九郎、時ならぬ雷鳴ではないか。」

長九郎「然様で御座ります。何程土用の中、大福餅を賣ると云つて、初春早々雷鳴とは、餘り手廻しで御座ります。」と、舞臺へ来る。幕の引付より喜太郎、木綿やつし淺黄の股引にて、芝居の綿を附けたる傘を差し、種々の狂言道具を持ち出で来る。兩人之を見て、

●▲「ヤア、雪が降つて来た〜。」

善右衛門「夫れにしては、身共の傘へは積らぬ。」

長九郎「モン〜、其の筈で御座ります。是れは綿さ。然るお屋敷にお狂言が御座りますで、

其の小道具の傘。然も二口村の孫右衛門ので御座ります。」と、

是れにて長九郎、喜太郎を見て、

長九郎「然様言ふは、幕引の喜太郎ぢやアねえか。」

喜太郎「ホンニ、お前さんは、道具屋の長九郎さんだね。」

長九郎「お主の様に稼いぢやア、金の置き所があるめえ。」

喜太郎「夫れや違えなしさ、お前さん、一寸出るにも、小判で五十兩持つて出やす。」と、財布入の五十兩を見せる。

長九郎「夫りやア何様したのだ。」

喜太郎「是りやア早野勘平から、鹽治判官の石碑料。大星由良之助さまへ持つて行くのさ。」

長九郎「措きやアがれ。ドレ、見せろ。」と、取つて見る。

喜太郎「モン、小道具も、素的に好らなりやした。」

(227) (町仲深月陸)

長九郎『是りやア延喜が宜い。ナント之を俺に貸さねえか。』

善右衛門『夫れをお身借りて、何にする。』

長九郎『之を見せびらかして、ぐつと惚れさせる意さ。』

善右衛門『小勝に凝りをつたと見えて、計略を廻らせをるな。』

喜太郎『モシ、小勝さんと云ふのは、今船宿の美濃屋の内儀さんのことかえ。』

長九郎『然様よ。彼にやア素的な目に遭つたが、未だに未練がのこつてゐる。』

喜太郎『其の筈だ。大和屋の太夫さん全向だ。』

長九郎『違えねえ。トキニ、善右衛門さん、彼の一件を喜太郎に頼んでは、何様で御座りませう。』

善右衛門『商賣柄と云ひ、夫れは一段と宜からう。お身に折入つて、頼みがある。』

喜太郎『エ、素人狂言でも御座りますか。秩父屋の律さんも、何處ぞあるなら出てえと言ひなすツた。』

長九郎『イヤ、具様なことぢやヤねえが、立ちながら相談も出来めえ。抜裏の、キンフラへで

も行きやせう。』

喜太郎『彼りや素的と、評判が宜う御座ります。』

善右衛門『夫れが宜い。然らば喜太郎とやら、一緒に参りやれ。』

喜太郎『お供致しませう。』

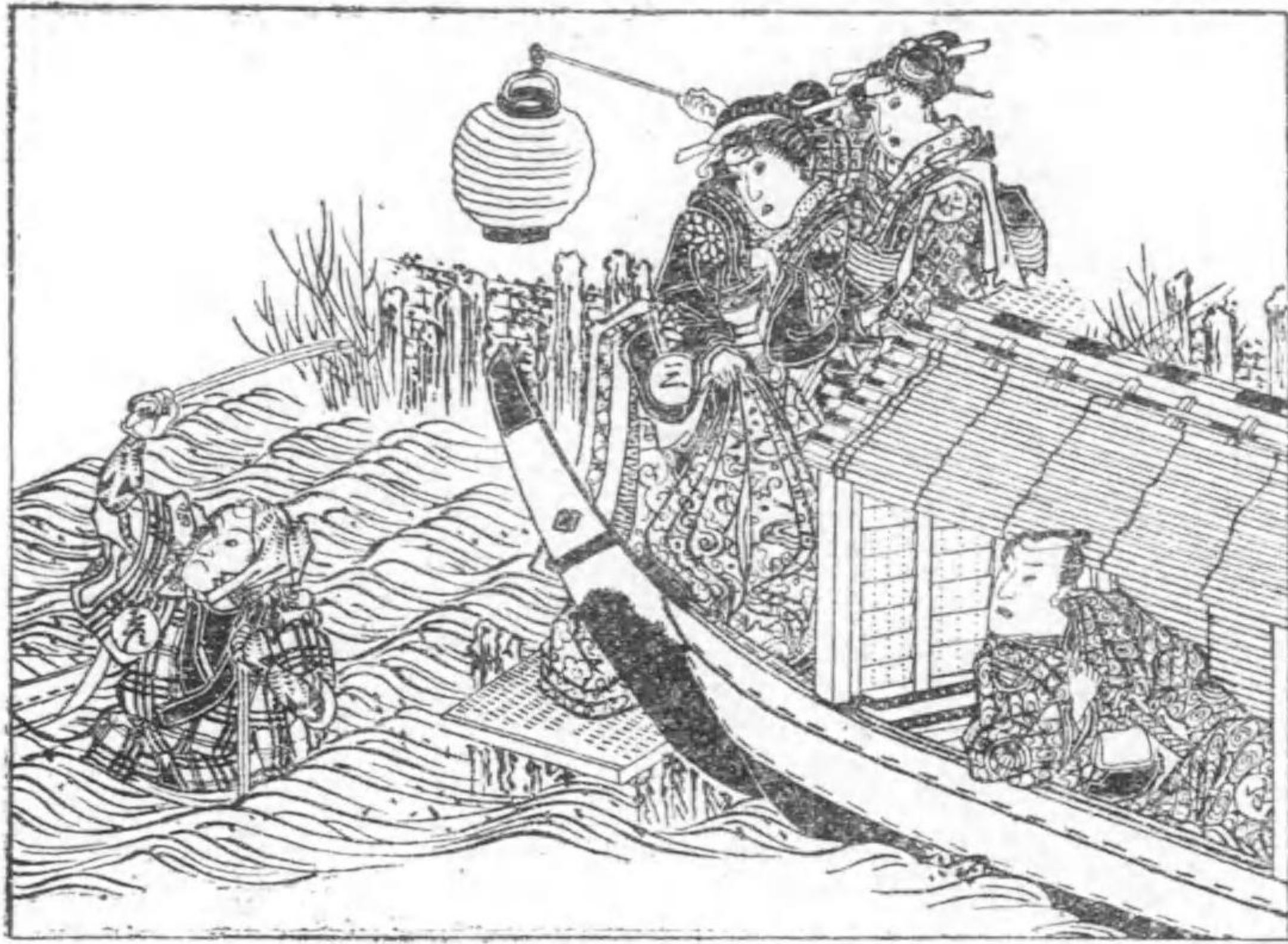
長九郎『さア、行きませう。』と、やはり伺にて、幕の引付へ入る。

○

本舞臺一面の黒幕、石崖を見せ、舞臺前波、板下の方、小舟に着物をすつぽり被り、寝てゐる上の方に、屋根船船頭伊之介、船を舫つてゐる。棧橋の上に、鰻搔彦介、手拭にて足をゆはへてゐる。其の傍に天國の短刀のなりご投げ出ししてあり。凡て門前河岸の邊、夜の體。やはり歌をかむせ、早く聞く。

伊之介『お前、足を何様したのだ。』

彦介『ナニサ、鰻を搔いて居たが、此様な刺身庖丁の様なものがあつて、足を切りやした。』



三勝『深切らしく言はれる程、身の毛が慄つ程否だよ。私や歸るよ。』

おとめ『其様なことを言ふもんぢやアねえ。好い人に計り逢つて居る位なら、誰でも唄女になるわな。否な客でも勤めるのが、其處が苦界だ。』

三勝『夫れでも蟲が好かねえ。』

おとめ『其様なことを言ふ中、船へ來たよ。』

三勝『私やア癢が痛くなつたよ。』

おとめ『其の癢も、善右衛門さんに押して貰ふと、直に快るわな。』

三勝『否なことだ。』と、船へ無理に乗せる。半七戸を開け見て、

伊之介『夫れは危いことをした喃。』

彦介『然様さ。併し此の庖丁を、古金買に賣つて、酒にでもしやせう。』

伊之介『酒と云へば、旦那も一杯機嫌で、熟く寝て御座る。俺も一杯飲つて來よう。』

彦介『一緒に行きやせう。』と、やはり佃にて、兩入下座へ入る。向ふより娘分お留、ぶら提燈を持ち、後より唄女三勝出で來り、

三勝『お留さん、お前計り承知して、何處へ行くのだえ。』

おとめ『ハテ、何處へ行くのだから知らねえけれど、お客は待ちに待つて居なさる。大方平清へでも行くのだらう。』

三勝『そしてお客は、誰方だえ。』

おとめ『お客はお前の惚れて居なさる、今市善右衛門さんよ。』

三勝『エ、好かねえ喃。お前も私がことを知つて居ながら、頼もしくもねえ。早く然様言つておくれだと、川事でも付けるものを。』

おとめ『其様に言ふもんぢやアねえ。善さんはお前にやア。實を盡くすよ。』

半七『三勝か。』

三勝『半七さんか。』

おとめ『何と好い善右衛門さんであらうね。』

三勝『何にも申しません。』

半七『お留さん、何時もながらお前のお世話で。』

おとめ『義理を言はずと、澤山お楽しみなされまし。』

半七『イヨ、通者め。』

おとめ『其様に煽動てちやア悪いぜえ。』と、側にて下座へ入る。

兩人科しあつて、

半七『善右衛門が熱くなつて来るぢやアねえか。』

三勝『五月蠅くツてならないよ。』

半七『餘り然様でもあるめえ。足が近くなると、可慕なるやつよ。』

三勝『オヤ、強いことだ。夫れは然様と、尋ねる品の手掛でもあつたかえ。』

半七『イヤ、もう是れぞと云ふ手掛もなし。何卒して尋ね出し、以前の身になつた時にやア、

アノ善右衛門に負けはせねど、何を云ふにも日陰者、我が子にさへ晴れて逢はれぬ今の身の上。夫れを察してお留が世話。』

三勝『逢ふもたまさか譬の通り。一時の榮華も千歳の様ぢやわいなア。シタガ、首尾能う尋ねる品が出て、以前の身になんする時には、お園さんと云ふ許嫁のあるお前。』

半七『ハテ、お園のことは捨て、措きや。汝が身を捨て、宜いものか。』

三勝『夫りやお前、眞實のことで御座んすか。』

半七『ハテ、女房に嘘を言ふものか。』

三勝『其の口をお忘れでないよ。』と云ひながら、簾を下す。時の鐘、ばたぐに鳴り、向ふよりお園、屋敷娘の打扮にて駈けて來り、科しあつて、

おその『思へば思ひ廻す程、私程因果なものはない。御家中でも善い殿御と、噂する半七さまと許嫁。云はば女の功名ぞと、喜ぶ甲斐も情ない、今度の御難儀、殿様よりお預りの、天

國の短刀菅家の色紙紛失、寶詮議のため、半七さまは家出。様子を聞けば、三勝さんと云ふ

唄女に馴染んで、私がことは他所吹く風。所詮添はれぬ上からは、淵川へ身を沈めて死にまする。せめて不便と思召し、一偏の御回向を、私や樂みに死にます。斯様言ふ中にも、人目に掛れば身の妨げ。少しも早う。然様ぢやく。』と、小石を拾ひながら、下座へ入る。引違つて鰻搔彦介、長九郎を引ツ張り出で来り、

彦介『モシ、長九郎さん、之を買つておくんない。酒屋に居る中、砥を掛けて錆を取つたら、何様か切れさうな此脇差。そして天の字と、分らぬ字が彫つてありやす。合點なさい。』

長九郎『随分買つて遣らうが、明日まで待たツしやい。今金が無え。』

彦介『嘘を言ひなさい。お前財布へ入れた金を、先刻女に見せびらかして居なすツた。』

長九郎『是りやア端金にやアされない。』

彦介『是非貸しなさい。』と、財布へ手を掛ける。長九郎は短刀を取らうとする。兩人引合うて居る。舟の簾を上げ、三勝半七川水にて手を洗ひ居る。兩人は引合ふ機に財布の紐切れ、下の小舟へ打込む。此の時小舟に寝て居たりし、醉寝の仁三が顔へ當り、喫驚して起き上る。

彦介『南無三、金を。』
長九郎『南無三、金を。』

仁三『ヤア。』と、財布の儘拾ひ、莞爾と笑ふ。此の時どんと水音する。

仁三『身投げが。』

三勝『アレエ。』と、半七の傍に寄る。此の聲に仁三喫驚する拍子に、船揺れる故、どうと船へ尻餅をつく木の頭、

仁三『意外話だ。』と、之を刻にて暮。

○

本舞臺は通しの二階。此處にお房鏡臺に向ひ、煙草を喫み居る。女髪結お仙、お房の髪を結んで居る。お夏身装束をして居る。三勝文を書いて居る。お初三味線を弾いて居る。小萬鉢巻で酒を飲んで居る。お梅肌脱ぎにて掃除をして居る。小間物屋の萬吉、状使の貞立掛り、凡て妓等や二階の體、流行歌へ通り神樂をかぶせてで幕開く。

おなつ『萬吉どん、仙女香と青蘂をくんない。』

おはつ『私にも伊勢吉の齒磨と、兩房をおくれ。』

萬吉『ハイ〜。』と、箱より出して遣る。

おらめ『私にも一つくんな。』

萬吉『眞平御免なさい。餘程溜つて居ます。』

おらめ『宜いぢやアねえか。』

萬吉『イヤ。問屋で無代はくれませぬ。』

おらめ『何だ。好かねえ喃。』

おさだ『三勝さん、お手紙は出来ましたかね。』

三勝『アイ、今封じて居るわな。小萬さん、上書をしておくれ。』

小萬『復半七さんか。』と、上書をする。

おふさ『定さん、是りやア木町丸へ行つて、綱さんに逢つて渡してくんな。』

おなつ『是りやアお店の清十郎さんへ届けて、返事を聞かしておくれ。』

おはつ『私のも、徳兵衛さんに届けておくれ。』

おさだ『ハイ〜。』と、文を取り。小間物屋と一緒に、下へ降りる。お仙髪を結び仕舞ひ、手

を紙で拭きながら、

おせん『お房さん、洗髪は思ふ様に出来ません。復明日でも結び改ませう。』

おふさ『ナニ、意外宜いよ。』

小萬『お房さんは、結び髪が能く似合ふよ。』

皆々『好い恰好に出来た。』

三勝『お仙さん、是れから何處へお行でだ。』

おせん『紀國屋へ参ります。』

小萬『お前行つたら、小春さんに能く言つておくれよ。』

おせん『ハイ〜。』

おふさ『彼の女も紙店の治兵衛さんには、強く惚れて居る喃。』

三勝『一座をすると、紙治さんのこと計り、恍惚けて居るよ。』

小萬『お前の半七さんと云ふものだ。』

三勝『オヤ、強いことだねえ。』

おふさ「ア、今三勝さんが、嬉しがるやつさ。」

おせん「小萬さん、お前餘り髪が悪うなつた。一寸結んで上げよう。」

小萬「ナニ、何様で用事で居るから、是れで宜いよ。」

あふね「情人に仕掛を借りられて、用事を付けられちやア、お部屋難儀だ。」

小萬「たまさかにやア宜いのさ。併し三五郎野郎の稼ぐにも恐れる。」

皆々「オヤ／＼、變に恍惚けるよ。」

小萬「其の代り、波は山口だ。夫れは然様と、拔裏のキンフラへ、豆禿を遣つたが、未だ歸つて來ねえ。」

三勝「私も覺があるが、外へ出ると他所の小女と交際つて歩くから、ツイ遅くなる。」

おふさ「ホンニ、三勝さんがお通と云つて、小女で居たのは、此の間の様に思つたツけ。オヤ、私の年が知れるよ。」

おせん「ドレ、行つて參りませう。」と、やはり流行歌にて、下へ降りる。

引違つて小女、岡持と蓋茶碗を持つて、上つて來る。

小萬「何をして居るな。早く歸らねえのか。」

小女「キンフラに、お客が支へて居て待つて居ました。」

おらめ「私がお甘諸の大きいのは。」

小女「アイ、蓋物の中へ買つて來たよ。」

おらめ「嬉しい喃。」

おふさ「色氣がある喃。」

おらめ「喰ひ氣ぢやわいな。」

皆々「呆れますよ。」と、

此の時下より、廻しの二人にて、

佐助「お梅さんでますよ。」

おらめ「アイ。」

小萬「オヤ、お梅さんが口が掛つた。天氣が變らねえけりや宜いが。」

おらめ「然様さ。天氣が變るのさ。お前方の様に、流行る唄女衆とは違ひますよ。其の代り、

氣儘用事を付けはしないよ。』

小萬『何だな。可異しなことを言ふぜ。部屋番をしゃアしねえよ。ふさくしい。』

おらめ『アイサ、ふさくしいのさ。何様で一勘定に、七十づも賣る唄女衆と、ツの字勘定の私等とは違ふのさ。何程能く商賣をすると云つて、自慢をばしたくねえもんだよ。』

小萬『何様したとえ。』と、起ち掛る。皆々止める。

皆々『まアく、小萬さん、宜いわな。』

おふさ『お梅さんも口が過ぎるわな。萬事小萬さんの世話になつて居ながら。小萬さんも、大人氣ねえ。彼の妓に構ひなさんな。』

小萬『夫れでも餘り多辯るから。』

三勝『まアく、宜いわな。』

おふさ『お部屋へでも知れて見なナ。可笑しくねえわな。私が二階を預つて居て、餘り締がねえ様だわな。お梅さん、早く支度をして行きな。』

おらめ『アイく。』と、支度に掛る。

下より佐助、

佐助『お梅さん、お待ちなさい。差で御座ります。お房さん、お初さん、お夏さん、御一緒に

出ます。』

おふさ『何處だえ。』

佐助『衆本で御座ります。』

おふさ『出番は恐れる喃。』

佐助『三勝さん、衆本から江戸で御座ります。』

三勝『復善さんか。』

小萬『ナニ、半さんさ。』

三勝『嬉しい喃。』

皆々『オヤく、強いことだねえ。』と、皆々宜しく、此の道具廻る。

○

本舞臺、衆本座敷の體、やはり流行歌へ、どろく、をかむせ、道具止ると、小蝶二羽舞つて居る。やはり流行歌にて、娘分お留。後には半七羽織袴、大小差して出で来る。

おとめ『半七さん、お見限りで御座りましたね。』

半七『イヤ、身共尋ねる寶の在所が知れ、早速取り得て殿へ差上げし故、屋敷へ歸參をなし、以前の赤根半七郎。まアく、喜んでたも。』

おとめ『夫れはお目出度う御座りました。』

半七『三勝を呼びに遣つてくれ。』

おとめ『ハイく。』

半七『龜八や、助治も呼んでくれ。』

おとめ『確か此方の宅に出て居りました。夫れに三勝さんは、生憎江戸行で、確か迎島へ行きなさんした。』

半七『夫りや悪い間ぢやな。まアく、誰ぞ呼んでたも。久し振で些と、浮れようか。』

おとめ『肝腎の三勝さんが無うては、餘り浮きもなざるまいが、まアく、一杯お上りなされ

まし。』と、酒肴を持つて来る。幫間龜八助治出で來り。

龜八『是れは半七さま、お珍らしい。』

龜八『餘りお見限りで御座りました。』

助治『お噂計り申して居りました。』

半七『漸う此方衆にも、逢はれる様になつた。』

龜八『お留さん、三勝さんは。』

おとめ『折悪く江戸行さ。』

助治『流行妓は、何様もならねえ。』

龜八『まア、酒でも流行らせねえか。』

半七『夫れが宜い。』と、皆々酒になり、

龜八『お留さん、旦那と御一緒に、迎島へ行つたのも、もう餘程になるねえ。』

おとめ『彼の時分には、大層に騒いだ喃。』

助治『吉原の孝三が酔つて、土手に寝て居たのも可笑しかつた。』



半七「夫れを呼んで見たい。一寸口を掛けて遣つてたも。」

おとめ「夫りや悪い。萬一三勝さんでも聞いて見なさんせ。私が怒まれる。」

半七「ハテ、私が宜いから、呼んでたも。」

龜八「そして宅が違ふから、宜いわな。」

おとめ「其様なら知れると、科人はお前方ぢや。」

助治「其の時は罷出で、屹度埒明け可申候。」

龜八「酒に酔つて、件ことの如しか。」

おとめ「八幡鐘時分の洒落だ。」

半七「早う呼んでたも。」

おとめ「確か宅へ出て居なさると思つた。」と、

龜八「今ぢやア方々で弾くが、唄女商賣うたむすめを拵こしらえた計りだと云つて、弾いて聞かせたツけ。」

助治「彼の位悪い聲もねえ。」

半七「彼の人は、何様した。」

おとめ「確か死んだと云ふことだねえ。」

龜八「可憐かわいさうなことさ。」

助治「もう彼の位な者も出来ねえ。」

龜八「夫りやア然様と、誰ぞ呼ばうぢやねえか。野郎頭ぢやア冴えねえと云ふと、何様か俺が旦那の様だ。」

半七「ホンニ、誰ぞあるまいか。」

助治「妙と云ふのがあります。此の間出るお園さんと云ふのは、餘程好いね。お留さん、何處から出るえ。」

おとめ「彼の妓は、福島屋から出るよ。」

龜八「彼の妓なら、旦那にはうつてツけ。」

下座へ入る。

半七『初寄合に、大分面白いことがあつたではないか。』

助治『此の老爺の、大寒寺前の上掃と云ふのに、皆遣られて仕舞ひました。』

龜八『ナニ、然のみのことでもないけれど、若い者の目を驚かさうと、一番遣りやした。』

半七『夫れは見たいものぢや。』

龜八『まア、此様な話らないことさ。』と、宜しくある。此の中お留唄女のお園出で來り、

おとめ『丁度今お客がお歸りで、明いて宜い所で御座りました。』

龜八『夫れは妙だ。』

おとめ『お園さん、此方へお出でなさりました。』と、是れにてお園黙つて入り、壁の方に寄つて端に坐る。

半七一寸見て、

半七『助治。』と、小聲になり、

半七『素的なものぢや喃。』

助治『芝雀全向で御座ります。』と、

お留、銚子と盞を持ち、

おとめ『半七さん。』と、此方へ持つて來て、

おとめ『お園さん。』と、是れにてお園盞を取り、其處へ置く。

龜八『お園さん、此方へお出でなさりました。』

おその『ハイ。』と、計り恥しき思入。

半七も科しあつて、

半七『もう酒は止さう。』

おとめ『其様なら復後に、お上りなさりました。』と、

半七紙入を出し、お留に渡し耳語く。お留合點み金を出し、

おとめ『是れは半七さんが。』と、兩人に遣る。

龜八『是れは有難う御座ります。』

助治『是れは有難う御座ります。』

屏風に丸太大鳥居、杉の木の繪畫いてある。

半七『強う酔うた。』

おとめ『只今お湯を持つて参ります。』

龜八『然様ならお園さん、宜しう。』

助治『後に来なよ。』

三人『ハイ〜。』と、下座へ入る。

三勝半七 小勝平三 陸月深仲町 上之卷 終

三勝半七 小勝平三 陸月深仲町 中之卷

鶴屋南北作 歌川貞畫

兩人残り科しあつて、お園煙草を付けて出す。半七傍へ寄り、

半七『コウ、お前、何時から出る。』

おその『私は漸う此の間。』

半七『何處ぞに出て居たのかえ。』

おその『イエ、初めてで御座ります。』

半七『然様かえ。』

おその『貴郎、三勝さんがお出でなされぬので、私の様な者が出て、お氣の毒で御座ります。』

半七『ナニ、三勝だと云うて、ツイ一通りのことさ。』

おその『能う存じて居ります。』

半七『ハテ、夫りや随分呼びは呼んで居た。ダガ、お前の様な者があつては、三勝は止してしまふのさ。否であらうが、是れから交際つて貰はねばならぬ。』

おその『お前さんも、宜い口な。まア、言うて見ようなら、深山木と都の花ほど違ひますわなア。』

半七『何であらうと、三勝はもう止めて、其方に限るわい喃。』

おその『白々しい嘘計り。』

半七『イヤ、眞實のことぢや。そして名は、何と云うたな。』

おその『ハイ、園と申します。』

半七『お園。聞いた様な名ぢや。』と、傍へ寄り、顔を見て科し、

半七『何様やら見た様な。』

おその『お覚えが御座りまするか。』

半七『何様でも見知つた。』と、考へて思入。

お園科しあつて、

おその『少しは御存じで御座りませう。』

半七『何様も思ひ出せぬが、此方は私を。』

おその『能う知つて居ります。浮田の御家中赤根半七さまで御座りませうが。』

半七『其の名を知つた此方には。』

おその『許嫁のお園で御座ります。』

半七『エ、』と吃驚する。

おその『お前さまは喃。』と、胸づくしを取る思入。相方になり、

おその『奥表と隔つても、子供の中から親々の、許嫁せし女房を、忘れてかいなア。半七さんと云ふのが、やつぱり野暮とやら、粹な流れの深川に、浮名辰巳の三勝さんには及ばねど、唄女になつたら少しでも、優しいこと言うて下さんせうと、辛い勤の甲斐あつて、嘘にも嬉しいお言葉は、私や死んでも忘れぬわいなア。』

半七『イヤ、もう其の様に言はれては、穴へも入りたいが、三勝が馴染んだも、人の出入の多い場所だから、詮議の爲計り。何の色に染まらうぞ。夫れゆる寶も手に入つて、今では以前の赤根半七郎。其方の行方も尋ねて居た。能うまア無事で居やツた喃。屋敷者で居た時でさへ、満更でないものが、また斯様華美に飾つたし、何様も云へぬ。もうく三勝のことは捨て、其方と見立て替へぢや。』

おその『口先で人を喜ばせて置いて。エ、憎らしい。』と抓る。

半七『アイタタタ。是れは大分趣があるわい。』

おその『お前は今言はしやんしたことは、眞實のことかえ。』

半七『ハテ、眞實でなうて。女房ぢやもの。』

おその『夫れなれば嬉しいけれど、若し三勝さんが此所へ來なさんしたら、何様したものであらうかと、私や案じられるわいなア。』

半七『ハテ、三勝が來たとて、其方は先口の女房ぢや。構ふことはない。』

おその『夫れぢやと云うて、何様やら氣の毒らしい。』

半七『ナンノ、差支ないわい喃。』

おその『何様か嬉しい様で、恥しい様で、戦慄する様な。』

半七『俺も寒い様ぢや。』

おその『ホンニ、寒いわいなア。』と、互に顔を見合せる。

○

流行歌にて、

三勝上手より出でて來り、

三勝『今下で聞いたら、半七さんが來て、お園さんと呼んで居なさんすさうぢやが、彼の妓も彼の妓なり、半七さんも餘り浮氣が過ぎるわいなア。何でも捕へて、思入言はにやならぬ。』
慥に此の部屋の中が、然様であらう。』と、障子を開ける。兩人吃驚して、
おその『ヤ。三勝さん。』

半七『ホイ、仕舞うたり。』と、逃げ出るを、三勝兩人の帯を捕へて、

三勝「餘り呆れて、物も言へぬわいなア。」と、
是れにて兩人、術なき科し、

三勝「半七さん。」

半七「オイ。」

三勝「お園さん。」

おその「アイ。」

三勝「油断も隙もなるものぢやない。半七さん、お前も餘り悪性で御座んす。ツイ一通りの仲かいなア。二人が仲には、お通と云ふ子まであるわいなア。口先計りで、ヤレ他の女は見向きもせぬの何のと言うて置いて、是りや何で御座んす。またお園さんも、漸う此の頃出て、人の容へ足を付けるとは、ホンニ、呆れて物が言はれぬわいなア。」と、涙ぐみ思入。半七遂巡しながら、

半七「イヤ、ナニお園が悪いことは何にもない。久し振で此處へ来た故、其方呼びに遣つたら、居ぬと云ふ故、一人で居ても可笑しうなし。其處でツイお園を呼んだのぢや。彼の



妓に科はないわいなア。」

三勝「お前がお園さんを庇護ふ程、尙ほ腹が立つわいなア。」

おその「三勝さん、お前が腹立てなさんすも尤もぢやが、またお前が半七さんに逢うて居なさんすが、私や腹が立つわいなア。」

三勝「こりや可かしい。お前は此の頃出なさんした新子の妓供。私は三年も以前から馴染んで居て、互の見えも打過ぎて、子仲まである此の三勝。今では人の謗をも構はばこそ、お部屋へまでも知れてゐる。アイ、半七が女房ぢやわいなア。」

おその「夫りやお前の手前極めとやら。私は親

の許した半七さんの、アイ、許嫁の園で御座んすわいなア。』

三勝『エ、其様ならお前が。』

おその『アイ、許嫁の女房で御座んすわいな。』

半七『コレ、其の様に言うて、人が聞くに能くない。まア、靜にしやいな。』

おその『イエ、言うても差支御座んせぬ。今までは兎も角も、是れからは半七さんは、私の夫で御座んす。まア、然様思うて下さんせ。』

三勝『イエ、許嫁であらうが、私が方には子があれば、私の男に違ひはないわいなア。』

おその『イエ、私が夫で御座んす。お前が構ふことは御座んせぬ。』

三勝『エ、面倒な。半七さん、私と一緒に來なさんせ。』

おその『イエ、半七さまは、お屋敷へお連れ申します。』

三勝『イ、エ、私が。』と、兩方へ半七を引合ふ中、後の屏風の繪の丸太鳥居と、杉林計り残り、一面に黒幕を振り落す。半七をすつぽんにて消すと、大きな牛になる。三勝お園吃驚して飛び退く拍子に、兩人鬘分れて引出になり、白の形になり、胸へ鏡を掛け、高足駄金槌を持

ち、屹となる大どろろにて、兩人寄らうとして牛に恐れ、たぢくとする。是れにて兩人を消すと、やはりどろろにて、以前の蝶々舞ふ。後の黒幕を切つて落す。

本舞臺真中に、九尺の宮、左右狐格子、本縁側、此處にやつし娘のお園、寢て居る。下の方に石の大牛、是れに三勝他所行の打扮にて、酒に酔うて寢て居る。凡て牛の御前の社内の道具立、やはりどろろにて、道具納まると、蝶々二人の後へ消える。どろろ打上る。本つり鐘の頭を打つ。是れにて心付き、

兩人『夢であつたかいなア。』

三勝『ホンニ、日頃尋ねなさんす寶がお手に入り、以前の御身となつたら、許嫁ある其の人に、若しやと思ふ迷ひから。』

おその『ツイに見もせぬ遊び屋に、華美な唄女の身となつて、思ふお方と嬉しい逢瀬。』

三勝『妬しと、女子のあるまい浅慮しい。』

おその『悋氣する氣はなけれども、嗚今頃は睦まじう。』

三勝『寢物語の羨しく、心の念が恐ろしい。』

おその『胸の鏡の曇り勝ち。』

三勝『晴れぬは丑の刻参り。』

おその『夢とは云へど。』

三勝『恥しい。』

おその『何様したもので。』

兩人『あらうなア。』と、心々の思入。ちよんと空へ朧の月出づる。

是れにて兩人透かし見て、

三勝『其處にお出では、女中さんかい。』

おその『お前さんも、華美な女中さん。』

三勝『何をして居なさんすのぢや。』

おその『私は此の牛の御前さまへ、御願があつて参りましたもの。シテ、お前さんわえ。』

三勝『私やお客が無理酒に酔うて、ぶらぐ文七から此處へ来て、ツイ、とろく寝たわいなア。』

ア。』

おその『然様で御座んしたか。私も御願を込めながら、此處で思はず寝たわいなア。』

三勝『ハテ、似たこともあるものぢやなア。』と、兩人熱々透かし見て、

おその『似たと申せば、是れ程に。』

三勝『ホンニ、何様やら夢に見た。』と、兩人屹と見る。此の時後にて、大勢の聲にて、

大勢『お園さんやア引イ。』

おその『其様なら、お前が。』と、寄らうとする。此の時ウフルにて、

▲『竹やア引。』と、此の聲に驚き、兩人ひつたりと坐る木の頭。是れにて月隠れる。暗くなり

し思入にて、兩人透かし見るを刻みにて、拍子幕。

○

本舞臺三間の間、真中に入口、是れに御料理平清と書きし簾を掛け、左右建仁寺垣。此處に船頭伊之介、刺身庖丁を振り上げ居る。是れを料理人豆久止めて居る。雁介奴の形、酔うたる打扮にて起ち掛り居る。鰻搔彦介、懐へ抱子を入れ、干蝶と大きな鱸を提げ、止め

て出る。

流行歌へ八幡の大拍子をかむせ、幕開く。

豆久『まあ、伊之公、不承さツしやい。』

伊之介『厭だ。』

彦介『奴さんも、了簡するが宜い。』

雁介『奴、武士の家來を何と致す。』

伊之介『ナニ、此の一本棒奴、喰ひよつて居ると思つて、除けて置けば宜いかと思つて、俺が

乗せて來た客を毒突いて、船頭々々と安くするか。奴、殴き斬つて遣るぞ。』

雁介『奴、武士の家來を斬る。面白い。奴が斬れば、俺は此の竹光で、田樂の様に突ツ刺して

遣るぞ。』

彦介『コウ、折助さん、何様したもんだ。また伊之公も、大人しくねえ生酔だわな。』

伊之介『お前方が止めるに、大人しくねえ様だが、此様な奴は殴きしめねえと、癖になるわな。』

雁介『ナニ、癖になるも凄じい。』と、起ち掛る。兩人止める中、刺身庖丁の柄抜けて、身は飛

んで天水桶へ入る。皆々之を知らず。伊之介は、無法に雁介を殴打す故、豆久と彦介漸うに止めて、雁介を逃す。雁介口小言を言ひながら、逃げて向ふへ入る。

豆久『伊之さん、傷でもつけちやア、悪いわな。』

彦介『夫りやア然様と、庖丁は何様した。』と、是れにて皆々心付き、柄を見付け、

伊之介『ホンニ、俺アお前方が取つたと思つたが、柄があるから何處へか飛んだと見える。』

豆久『何處へ飛んだ知らん。』

彦介『危え喃。』

伊之介『困つたことをしたの。』

豆久『其處等に有らう。捜させようよ。』

彦介『モン、久さん、措いて行きやせう。』

豆久『然様するが宜い。』

伊之介『お前の子か。』

彦介『是りやア里子に取りやしたのさ。』

豆久『伊之さん、一杯遣らうぢやねえか。』

伊之介『然様しやせう。』

彦介『私も一寸待つ人もあれば、お合でも致しやせう。』

豆久『さア、來なせえ。』と、門の中へ入ると、向ふにて大勢、

大勢『盗人々々。』と、言ふ。捨鐘にて向ふから、仁三褌袍の形、草履を手に持ち、駈け出で

來り、舞臺にてホツと息を突き、透かし見て、

仁三『エ、俺がことぢやアねえか。忌々しい。逃げると云つて、泥濘へ入つた。』と、四邊を

見て、

仁三『ア、平清だな、宜しく。天水桶で足を洗つてやらう。』と、足を入れて洗ふとて、件

の刺身庖丁を取り出し見て

仁三『何だ。是りや刺身庖丁だな。二三百にやアなるべえ。なると云へば此の間、番河岸で船

に寝て居た時、投げ込んだ金財布、一寸の中嬉しかつたが、見りやア百足より悪いが、何

ぞにならうと思つて、今に持つて居るが、何様かして使ひてえもんだ。ハテ、宜い行方があ

りさうなものだなア。』と、思入。側になり、此の道具廻る。

○

本舞臺三間の間、二重舞臺、正面障子閉てあり。上の方四つ目垣、下草、振好き松。凡て平清座敷の體。此處に娘お金、道具屋長九郎、酒を飲んで居る。やはり側にて道具止る。

長九郎『お金さん、善右衛門さんは、お見えなされませぬか。』

おきん『ハイ、先刻御家來衆がお出でなされて、今に行く程に、座敷を明けて置けと云うてお

出でなされました。』

長九郎『夫れぢやアもうお出でなさるであらう。』

おきん『また永酒であらう。』と、向ふを見て、

おきん『アレ、善右衛門さんがお出でなされます。』

長九郎『もう酔つて居る様子だの。』と、流行歌になり、向ふより善右衛門、三勝お留雁介、廻

しの佐介長箱を持ち出でて來る。

善右衛門『一花開くれば、天下皆春なれや。イヤア。』と、諺を諺ひ、扇で手を打つ。

三勝『他のお客もあるに、氣の毒らしい。』

おとめ『夫りや三勝さんの氣に違うたぞえ。』

善右衛門『是れは閉口。』

佐介『旦那も三勝さんに逢つては、猫に鼠だ。』

雁介『イヤ、鯉節だ。』

善右衛門『ナニ、カツ。さア、參らう。』と、舞臺へ来る。

おきん『これは善右衛門さま、餘り待ち草臥ましたから、一寸盗みをやりました。』

善右衛門『長九郎、何を盗んだ。油断のならぬ男ぢや。』

長九郎『是れは私が粗相。お待ち兼ね申して、一寸お名前で御酒を頂きまして、有難う御座り

ます。』

善右衛門『然様か。澤山はならぬぞ。』

三勝『またお前、其様な吝なことをお言ひだ。』

善右衛門『復候閉口。イヤ、お金、肴を澤山に出しやれ。』

おきん『ハイ〜。』

善右衛門『長九郎、何か身共に見せるものがあると申したが、何ぢや。』

長九郎『ヘイ貴殿がお尋ねなされる天國が。』と、言はうとするを、

善右衛門『コリヤ〜、何か、身が尋ねて居る甘口な酒か。然様か〜。』と、合點せる。

長九郎『ヘイ〜、然様で御座ります。』と、此の中三勝天國と聞いて、科しあつて、

おとめ『二階から、人丸さまの方を見ようぢやないかえ。』

三勝『然様しよう。何かお邪魔な話がありさうぢや。お留さん、來なさんせ。』

佐介『私も箱を置いて、行つて來よう。』

雁介『下郎も伴部屋へでも參らう。』

三勝『さア、來なさんせ。』と、三勝お留お金は上の方、佐介雁介下の方へ入る。

兩人残り、

善右衛門『四邊に心を付けて、物を言やれさ。』

長九郎『差合の人でも御座りましたか。』

善右衛門『彼の三勝めは、半七めに惚れて居れば、彼奴が聞いては面倒。と言ふ譯は、天國の短刀管家の色紙、身が殿より半七が養父半右衛門が預り。然るに實子の仁三郎、身持悪さに勘當。彼を語らひ奪はせしに、其の夜短刀を取失ひ、行方知れず。色紙は仁三郎めが所持なし、行方知れず。夫れゆゑ半右衛門めは、蟄居なし、養子の半七めは、實詮議のため町家の交際。其の中身が手より差上げれば、此の身は出世。遺恨ある半右衛門めは切腹、半七も科は通れぬ。さすれば枕を高く、三勝は身が女房。何と宜い鹽梅ではないか。』

長九郎『實に福德の三ねんで御座ります。』と、天國の短刀を見せ、

長九郎『然様なら約束通り、百兩で御座りますか。』

善右衛門『承知々々。是れに金子五十兩所持致せど、是れは三勝が手附の金、明日金子は渡し遺すまで、天國はやはり其の方大切に。』

長九郎『イヤ、もう大金の代物。確かりと持つて居ります。假令三勝さんが、半七に此のことを言はふが、なか／＼百兩と云ふ金が出来る氣遣なしさ。』

善右衛門『夫れも然様よ。』

長九郎『前祝に。』

善右衛門『サア、來やれ。』と、兩人上手へ入る。

三勝出で來り、

三勝『半七さんが、口頃尋ねし天國の短刀、彼の品故に日陰のお身。殊に善右衛門が話の様子と云ひ、買ひ求めるには、百兩の金と云うても當はなし。ハテ、何様したものであらうなア。』と、思案して、

三勝『何は兎もあれ、短刀の在所知るれば、此のことを半七さんにお知らせ申し、逢うての上で。オ、然様ぢやく。』と、帯に挟みし鏡袋より、紅筆出し鼻紙へ書き掛る。獨吟歌になり、

歌へ朧夜の闇はあやなし梅が香に、愁じ思ひの増すは草。

三勝『ホンニ、便も知らで此の文を、氣の急ぐ儘に書いては見だが、何様して届けたものであらうな。』

歌へ筆の命毛短くも、せめてと計り文のつて、心細くも歸る雁が金。

と、獨吟。逸早に文を書き仕舞ひ、封じて入る。

彦介「何心なく、抱子を抱き出て來り、三勝を見て、

彦介「三勝さん。」

三勝「エ。」と、吃驚する。

彦介「久しくお目に懸りませぬ。彦介で御座ります。」

三勝「私や誰方かと思つて、吃驚したわいなア。能う來なさんしたなア。お通は、嘸戲言を言

ふで御座んせう。」

彦介「イエ、温厚しいお子さ。此の頃は家内も風邪で寝て居ります故、大きに御無沙汰を致し

ました。」

三勝「夫れはお悪う御座んすな。ちやつと此處へ來や。」と、取つて抱いて居る。

彦介「イエ、此の頃僥倖と、宅へ他所の娘子が、據いことで來で居なさるが、能く馴染んで居

なさるのさ。餘り久しくお逢はせ申さぬから、今日仲浦へお連れ申した所、此方へお出で

なされたから、一寸お逢はせ申します。」

三勝「能う連れて來て下さんした。さりながら

現在我が子に、母ぢやとも言はれぬ身の上。」

彦介「イエ、もう情を商ふ唄女衆に、子供があ

つては地味ます。お目に懸れば是れで宜し。

ドレ。お連れ申ませうか。」と、子を取り抱

く。

三勝「其様ならもう行きなさんすか。」

彦介「また此の頃にお連れ申ませう。」と、行

き掛る。

三勝「ア、モシ〜。」

彦介「ハイ、何ぞ御用で御座りますか。」

三勝「アイ、憚りながら此の手紙を、助次さん



の所の婆々さんに、急な用ゆる半七さんに届けて下さんせと、渡して下さんせ。』

彦介『畏まりました。』と、文を取る。

三勝『鏡袋より金を出し、紙に包んで、

三勝『お前何ぞ口に合ふ物を、買うて行って上げて下さんせ。未だお目には懸らぬが、宜しく申して下さんせ。』と渡す。

彦介取つて、

彦介『お止しなされば宜いに、是れは有難う御座ります。然様なら三勝さん。』

三勝『お頼み申しましたぞえ。』と、

歌になり、彦介手紙を持ち、向ふへ入る。

○

引違へて仁三、出て来り、

仁三『モシく、女中さん、三勝さんをお呼びなすつておくれ。』

三勝『アイく、誰方さんで。』と見て、

三勝『ヤア、仁三さんかえ。折の悪い。』

仁三『エ。』

三勝『能う来なさんしたなア。』

仁三『アイく、私は些とお前に用があつて。』

三勝『話があるなら、此處は私も客先ぢやに依つて。』

仁三『お前客先か。俺ア際先が悪いわ。一體俺を何だと思ふよ。』

三勝『知れたこと。半七さんのお前は兄さん。』

仁三『ソレ見たか。半七が兄なら、手前の爲にも義理のあるお兄さまだ。半七の言ふこと計り聞いて、俺が言ふことは聞かぬえのか。』

三勝『然様ではないが、氣が揉めて居る最中に。』

仁三『夫りやア俺ア知らぬえ。お兄さまが、妹に用を言ふのだ。まア、下に居て聞きやな。手間は取らせぬえよ。』と、下へ置き、すうくと煙草を喫んで居る。

三勝『其様なら早くお言ひな。』

仁三『然様そツけなく言ふもんぢやアねえ。落着いて聞いて貰はにやアならねえ。話と云ふは、他でもねえが喃。』と、三勝が頭物の物を見て、

仁三『素的と光る喃。其のしのぎは、東屋の金八か。幾等で買った。』

三勝『幾等でも宜いわなア。』と、起たうとする。

仁三『これさ、然様ひよこすかすると半七に、三勝は、情人が出来たと言ふぜえ。』

三勝『ナンノ、浮氣らしい。其様なことする位なら、今の苦勞はせぬわなア。』

仁三『無いなら無いで宜いが、何卒また些と計り、貸してくんねえ。』

川勝『復貸しなア。半七さんに繋がるお前ゆゑ、折々の用無心も、今は一兩復二兩と、度々聞いて居るわいなア。何程可慕い男の兄さんぢやと云うて、餘りで御座んせうぞえ。』と、是

れにて仁三急に畏まり、ぐすぐすと泣く真似をして、

仁三『手前に然様言はれて、蟻の穴へでも入りたい。半七が陰になり日向になり、俺を、世話をしてくれる。なか／＼實の妹でも斯様はならねえと、心の中では何様に思つて居るだ

らう。晝寢をするにも、お主が方へ足を向けては寢ねえよ。』と、此方に向き舌を出し、笑つて居る。

三勝『エ、もう其の空拜みは止めておくれ。』

仁三『斯様してくんねえ。お前の前差を貸してくんねえ。俺にすると思へば腹が立つが、半七に遣つたと思ひな。満更の他人でもなし、何様か半七に似て居るだらう。』と、三勝が前差を引ツこ抜く。

三勝『アレ、悪いことを。』と、取りに掛る。

此の時奥より長九郎出て、

長九郎『三勝さん／＼、善右衛門旦那が、お前が居ねえと云つて喧しい。お留さんも困つて居る。來なせえ／＼。』と、手を取り引ツ張る。

仁三『前差を取つて、

仁三『是りやア俺が借りだよ。』

三勝『長九郎さん、お前に些と用があるわいなア。』

長九郎「俺に用も聞かうが、まア、來なさい〜。」

三勝「仁三さん、其の前差計りは、堪忍して下さんせ。」

長九郎「まア、來なさい〜。」と、無理遣りに引ツ張り、奥へ入る。

仁三見送り、

仁三「お見さん〜だけ、損はしねえ。餘程踏めるわえ。岡本と極めよう。極めると云へば、

此の酒と肴を其處等へ持つて行つて、極めようわえ。」と、

流行歌になり、其處にある酒肴を持つて、下手へ入る。

○

向ふより半七、今の文を讀みながら出て來り、

半七「此の文の様子では、天國の在所が知れ、夫れを善右衛門が買はうと云ふ相談。今宵中の
中手に入る様にとあれば、まア〜、三勝に逢うた上のこと。何様かして取戻したいもの
ぢやなア。」と、思案しながら舞臺へ來る。

奥よりお留出て來り、半七を見て、

おとめ「半七さん、能う來なさんしたなア。」

半七「是れはお留さん、三勝は此方の宅へ出て居るではないか。そして容は善右衛門か。」

おとめ「アイ、例の無理酒。實に困るわいなア。お前、其處に居なさんせ。今都合して、呼んで上げようわいなア。」

半七「何卒お頼み申します。」

おとめ「ドレ、呼んで上げようか。」と、奥へ入る。

半七、科しあつて、

半七「人の心も知らいで、騒ぎくさることわい。以前の赤根半七なら、ナニ善右衛門に負ける
ものか。此の三勝は、何をして居ることぢややら。遣る瀬はないわいの。」と、

此の中奥より、三勝出て來り、

三勝「お前の酒にも困るわいなア。」と、半七を見て、

三勝「半七さん、能う來て下さんしたなア。」

半七『餘り能うもあるまい。アノ善右衛門と毎日々々お楽しみなこつて、お羨しいことで、腹が立つてなることではない。』と、つん／＼として居る。

三勝『エ、機嫌らしい。其様な所ぢやあるまいわいなア。先刻文を上げたが届いたかいなア。』

半七『文が来たから、来たのぢやわいな。』

三勝『何を其の様に、腹を立てて居なさんす。』

半七『是れが腹が立たいで。可慕い人を呼んで置いて、是れ見よがしに、善右衛門と面白さうに酒を飲んでゐるに依つて、腹が立つのぢや。』

三勝『未だ其の様なことを言うてかいなア。半七さん、言はいでも知れて居ることなれど、初めて逢うたは衆木で、屋敷衆一座の其の中に、すつかりとして高等な、とても一生任すなら、彼様したお方と思へども、またな唄女の新妓の私、言ひ寄る汐もなかくに、恥しいのが先に立ち、心であらゆる神頼み、念が通つて嬉しい逢瀬。一度が二度と深くなり、二人が仲にお通と云ふ、娘まである女房の心が、お前に知れぬかいなア。其りや餘り惨いと云ふ』

もので御座んす。殊に今では御浪人、なされつけない町家の交際。其の御苦勞をさせとむなさ、厭なお客を文なして、好かぬ座敷も浮れ節、酒に紛らせ三味線の、身は何様ならうと構はねど、可戀し可慕い其の人の、御難儀を救ふ爲と、夫れを力に氣に染まぬ、善右衛門が氣障聞いて、受けて居るもの若し一つは、尋ぬる品の手筋もと、思ひし甲斐も今日此處へ、道具屋の長九郎が、持つて來りし短刀は、天國と聞くと其の儘、お前に知らせ逢うた上にて買ひ戻す、金の工面や何や彼や、相談しようと思つてこそ、態々人も遣つたれど、其でもない怨み聞かうと、文は遣りませぬ。ホンニ、逆捻も程があるわいなア。』と涙ぐみ、種々科しあつて言ふ。半七も塵を撚つて、逡巡しながら、

半七『三勝、謝罪つたく。其方の心を知らぬか何ぞの様に疑うたは、俺が悪かつた。種々のことで氣が揉めて居たゆゑ、ツイ其方に愚痴を言うたのぢや。堪忍してたも。』

三勝『お前さへ心が濟めば、私や何とも思やせぬわいなア。』

半七『シテ、天國の價は、何程と云ふのぢや。』

三勝『さア、百兩と云ふけれど、夫れを善右衛門が買うてお屋敷へ上げて、お前は勿論親御さ

ままで、御難儀をさせますと言うた故、私や一倍氣が急くわいなア。』

半七『善右衛門が手からお上へ上げられては、生きても死んでもぢや。』

三勝『夫れぢやに依つて私も、長九郎に逢うて頼んで置いたわなア。』

半七『何様かして、急に金の工面をせにやならぬ。そして其方のことは何様したのぢや。』

三勝『私のことも、是非身請をすると言ふわいなア。』

半七『夫れも困つたものぢや。』

三勝『夫れよりも困つたことがあるわいな。彼の天國がお前の手に入つて、以前のお身になん

なさんすは嬉しいが、然様なつたらまたお園さんと夫婦になつて、私がことは何とも思ひ

なさんすまいと、夫れが案じられるわいなア。』

半七『其のことなら少しも案じることはない。其方の方には、お通と云ふ子があるから、大丈

夫に思うて居るが宜い。』

○

此の中奥より、廻しの佐介出でて、

佐介『餘り大丈夫でも御座りますまい。』と、

是れにて半七、佐介を見て、

半七『廻しの佐介どの。』

佐介『道理で三勝さんが、浮つくと思つた。三勝さん、半七さんの顔も今夜が見終だよ。』

三勝『夫りや何故で御座んす。』

佐介『何故と云つたら、善右衛門さんが身請すると云つて、手附を五十兩渡すと被仰るから

さ。』

半七『コレ佐介、三勝と俺とが仲、お主も知つて居るであらう。何卒善右衛門が方は變替にし

て、俺が方へ身請させてたも。』

佐介『夫りやア私も知つて居やすが、今ぢやア昔と違つて、お茶屋へも下りがあつていけぬ

え。お前、金がありやすかえ。』

半七『さア、夫れは。』

佐介『金がなけりやア、泣く子と地頭。出来ねえ話だ。』

三勝『夫れぢやと云つて、主も男。』

半七『二三日待つてくれたなら。』

佐介『モン、夫りや出来ねえ話だ。善右衛門さんは今でも渡すと云ふ金。お前、此處に金があるかえ。』

半七『さア、今と云うては。』

佐介『金は無えのかえ。』

半七『さア、夫れは。』

佐介『金は無えのかえ。金も無くつて、先を破談にしてくれかえ。こいつは大爆笑だ。成程、

男は立派だ。お客の揚先で、窃みを賣る唄女衆も唄女衆だ。此様な大膽え人があるから、お上に御苦勞が絶えねえわ。いけまぢくした面だ。』と、半七を毆せる。怫然とする三勝、

三勝『佐介どん、お前、半七さんを。』

佐介『毆したが、何様したね。大金を出して抱へて、お客へ賣り切つてある體を、小迎ひで逢

曳をするから、打つたのだ。夫れが口惜しくば、金を出しな。』

半七『さア、夫れは。』

佐介『金は有るめえ。』

半七『さア、夫れは。』

兩人『さア、さア。』

佐介『金を出して、物を、物を言ひなせえ。』と、

半七三勝、はつと當惑する。此の以前より、奥より仁三出掛り居て、此の時前に出て、佐介を毆り倒し、

仁三『其の金は半七の兄、酔寝の仁三が出してやらうよ。』と、真中へ坐る。兩人見て、

半七『兄ぢや人、其様ならお前が。』

三勝『日頃に似合はぬ金の工面を。』

仁三『後とも云はせず、今此處で貸して遣るのも、實の親、其の難儀をば身に引受け、義理の

弟の半七が、今の身分を引受けて、貧困之中で付届、實に眞實心中の、親はなきより有合の、此の場の男を立ちやれよ。」と、財布の儘五十兩を投げ出す。半七取つて押頂き、
半七「今の今まで、性根の悪い兄ぢや人、人間並でもあらうなら、問ひ談合もしようものと、口惜んで居たが今日と云ふ今日、親にも優る此の御恩。」
三勝「打つて變つたお志。」
兩人「エ、有難う御座ります。」

佐介「アイタタタ。金も無え辯に、酷い日に遭はせたな。」

半七「佐介、兄ぢや人の志の五十兩、きりく、持つて行きや。」

佐介「ナニ、五十兩だ。」と、財布の上から掴んで見て、

佐介「然も小判。こいつは、夢ぢやアねえか。」

仁三「ヤイ、野郎、今聞いて居れば、金は有るめえの、そして未だ何とか言つてこめたな。」と、起ち掛る。

佐介「イエ、私は何とも申しませんが、此の口が何かベラくくと多辯る野郎だ。」

半七「兄ぢや人の蔭で、重荷を卸した様ぢや。念のため書付を。」

仁三「ナンノ、兄弟仲に。」

三勝「シタが、何の仲でも揃とやらぢや。一寸一筆書いて上げなさんせ。」と、

半七「有合ふ硯箱にて、さらく」と書いて、

半七「是れで宜う御座りますか。」

仁三「是れで宜しく。ドレ、飲み掛の酒でもやらかさうか。」と嘲笑ひながら、奥へ入る。

半七「兄弟は持たうものぢや。」と、喜んで居る。

奥より長九郎、短刀を持ち出て來り、

長九郎「三勝さん、何様したものだね。お前が傍に居ねえと、善右衛門さんが喧しくつてならねえ。」

三勝「長九郎さんか、好い所へ。先刻一寸話した天國のことを、何卒私に買はせて下さんせ。」
長九郎「夫りやアもうお前のことだから、何様かしようが、櫛や簪と違つて、唄女子供の持つて役に立たねえものだ。」

三勝『私の方に無ければならぬ品故に。お前、其處に持つて居なさんすか。』
長九郎『此處に持つて居るのさ。』と見せる。

三勝『半七さん、是れで御座んすか。』と、
半七取つて見て、

半七『紛ふ方なき天國の短刀。長九郎どのとやら、是非とも求めまする。』

長九郎『夫りやはや三勝さんが頼み、賣つて上げようが、價が百兩。其の上善右衛門さんが、先口で御座りまする。』

三勝『此の品を主にさへ賣つて上げなさりや、お前が頼んだお勝さんのことも。』

長九郎『三勝さん、夫りや眞のことかえと、早く乗る奴さ。』と、

此の中短刀は、上手へ置く。仁三、密と出で、件の刺身庖丁となかごを入れ替へ、天國のみは、仁三持つて奥へ入る。三人之を知らず。

三勝『其の代り、天國は主の方へ。』

長九郎『夫りやア賣つて上げるのさ、併し價の金は。』

半七『明日の朝まで待つて下さりませ。』

長九郎『金が出来ぬと、善右衛門さんの方へ遣りますぞえ。三勝さん、今のことは頼むにえ。ドレ、祝ひと遣らうか。』と、短刀持つて奥へ入る。

三勝半七
小勝平三
陸月深仲町 中之卷 終

三勝半七
小勝平三

睦月深仲町 下之卷

鶴屋南北作
歌川貞畫

○

半七「エ、忝ないく。其方の陰で、天國の在所が知れた。今一種の色紙の詮議とは云ふもの、大枚百兩。ハテ、何様したものぢや。」と、苦勞の科し。三勝思入して、
三勝「ハテ、一寸延びれば廣い世界。何様とならうわいなア。」
半七「然様ではあれど、何から何まで、其方の世話になる上に。」
三勝「アレ、復其様なことを言ふ暇に、些と此方へ寄んなさんせ。」
半七「寄りや何様する。」と、傍へ寄る。
三勝「寄つたら、斯様するのぢや。」と、手を取る。

奥より善右衛門出て、半七三勝を引付け、

善右衛門「盗人がある。出合へく。」と、

是れにて奥よりお留お金。長九郎雁介も出て来る。

おとめ「善右衛門さん、仰山な。何で御座んす。」

善右衛門「何所か、身が揚詰の三勝、座敷に見えぬ故、是れへ參つて見れば、此の野郎と乳練り合つて居るわ。」

雁介「お旦那の揚詰の唄女へ、不義をひろいだ青二歳奴。」と、半七を見て、

雁介「ヤア、此方は、同家中赤根半七どの。」

善右衛門「殿より預りの天國、菅家の色紙失ひ、今は町人。身の寄所なさに、此の善右衛門が揚詰の唄女、三勝を誘拐し居るな。云はば密夫同然だ。」

おとめ「モシ、善右衛門さん、半七さんぢやとて、以前は三勝さんの客人。此處で逢ひなさんしてから、話もしたさんしたのであらう。其の様に仰山に言はいでものこと御座んす。」
善右衛門「イヤく。奴何うしてくれう。」

半七『イヤ、三勝は、此の半七が身請をする意で、只今手附の金も、佐介に渡してある。』
三勝『是れからは半七と云ふ夫のある身。善右衛門さん、今までの様に、お前自由にはなるまいわいなア。』

長九郎『善右衛門さん、三勝さんを他へ身請されちやア、お前男が立つまい。』
おきん『風が變つて来たなア。』

善右衛門『其の意ではないてく。』と、

此の時向ふより、佐介出て来り、

佐介『モシ、善右衛門さん、其の半七は大騙、偽金を使ひます。』

半七『ナニ、半七を騙とは。』

佐介『先刻渡した五十兩、偽金にも偽金、鍍金の小判だ。奴、能く俺を騙したな。』と、金を打突ける。半七見て、

半七『ヤ、其様なら兄ぢや人が。』

善右衛門『ヤイ、半七、何と今抜かした。三勝を身請すると言つたな。奴や此様な金で、

身請するか。いけツ大膽え野郎だ。』

雁介『屋敷へお連れなさるが宜う御座りませう。』

佐介『夫れが宜い。一層懲戒に引摺つて行かう。』

雁介『行せやアがれ。』

三勝『減相な。半七さんを。』

善右衛門『おぬしは、俺と。』と、

善右衛門三勝、雁介佐介、半七を引立て花道へ行き掛る。摺り鐘入にて、歌になり。向ふより鬼門の喜兵衛、着流し一本差し、侠客の打扮にて出て来り、雁介を投げ、佐介を振ぢ上げ、半七を庇護つて屹と見え、

善右衛門『ヤイ、見りや素町人奴、科極つた半七を引立てさせるを、何で奴やア。』

▲『止めたのだ。』

喜兵衛『ハテ、止める譯がありやこそ、止めもする。些と人にも厭がれる、鬼門喜兵衛が止めたのだ。まア、其處へ行つて譯を付けよう。』

返し舞臺へ押戻して、しやんと止る。

おとめ『好い所へ喜兵衛さんとやら、來なさんしたなア。』

喜兵衛『俺が來るからはお二人共に、ちや船位に乗つたと思つて、落着いてお出でなされませ。』

善右衛門『ヤイ、喜兵衛とやら、奴やア何故二人が肩を持つたのだ。』

喜兵衛『聞きたいなら、聞かせて遣らう。半七さま、貴殿は御存じあるまいが、親御半右衛門

さまには、大恩受けた此の喜兵衛。夫れぢやに依つて何處までも、二人の衆の肩を持つ。

今までと違つて、鬼門喜兵衛が後に居る。何奴も此奴も、然様思つて貰はうかい。』

半七『スリヤ、親人が。』

三勝『アノお前を。』

喜兵衛『ハテ、聊かな御恩返しで御座ります。』

佐介『是りやア面白い。其様なら奴も、僞金使の同類だな。』

喜兵衛『是りや可笑しい。其の金で三勝どのの手附が濟んだら、僞金使でもあらうが、手附に

ならにやア何でもないわい。』

佐介『成程、是れは一番へこんだが、シテ、手附の金があるか。』

喜兵衛『ソレ、百兩、能く檢めて請取りやれ。』と、百兩の包み金を渡す。佐介取つて見て、

佐介『慥に請取りました。身請が濟めば其方の勝手。』

喜兵衛『知れたことだ。是れからは俺が家へ置き申す。これぢやあ萬一言分が。』と、兩人顔見

合せ科し。此の時、奥より半兵衛、

半兵衛『イ、ヤ、其の言分は鐘旭の半兵衛、其處へ行つて言はうかえ。』と、

侠客の歌になり、奥より鐘旭の半兵衛、侠客の打扮一本差にて、出て來る。

喜兵衛『利いた風の。鐘旭の半兵衛。此鬼門喜兵衛が身請した三勝どのを、何で奴が言分が。』

半兵衛『夫りや言はいでも知れたこと。今後から聞いて居れば、半七どのとやらの親御に、恩

になつた恩返し、此方が身請をするとのこと。俺も亦此處に御座る、善右衛門さまの親御

には、お世話になつた鐘旭の半兵衛。なりや、俺が身請して、彼方に上げる程に、まア、然

様思つてくりやれよ。』

喜兵衛「男は立派でも、奴やア横を突くと云ふものぢや。夫れは身請せぬ先のこと。今では後の祭ぢや。」

半兵衛「後でも横でも、是非身請して、善右衛門さまに上げにやアならぬ。」

善右衛門「イヤ、半兵衛とやら、近付ではないが、親父が世話したと云ふから、其の恩返しに言うてくれるは過分ながら、三勝が身請はせずと宜い。」

半兵衛「ソリヤ、お前、何を言ふので御座ります。三勝どので浮身を獲して居て、今になつて宜いも可笑しい。金は私が何百兩でも出して上げます。」

善右衛門「些と此方に手段があれば、構やんなく。」

半兵衛「何様したものだ。お前さまには、御苦勞は掛けませぬ。私が御恩返しに、是非身請をして上げます。」

善右衛門「ハテ、せずとも宜いと言ふに。」

半兵衛「イエ、是非致します。さア喜兵衛、邪が非でも俺が身請をする。」

喜兵衛「イ、ヤ、ならぬ。」

半兵衛「ならぬと言へば、腕盡でも。」

喜兵衛「何でもならぬ。」

半兵衛「一層斯様して。」と掛る。善右衛門、夫れには及ばぬと云ふ、思入にて止める。喜兵衛

半兵衛を突き除ける機に、喜兵衛が刺客の鬘脱げて、ぼつとせの頭になる。皆々見て、

おとめ「喜兵衛さん、アノ頭は。」と、

是れにて頭を探り見て、

喜兵衛「南無三。」と、逃げ出す。半兵衛捕へる。是れにて喜兵衛が刺客の形、悉皆脱げて、下

は木綿やつし浅黄の惣股引の形になる。

半七「喜兵衛が姿は。」

半兵衛「斯様であらうと見抜いて置いた。鬼門喜兵衛の化け損え。有り様に抜かしやアがれ。」

と引ばぐ。善右衛門長九郎、氣を揉み出で、

長九郎「これ、半兵衛さん、夫れも此方の味方だから、其様に慘くしなさんな。」

半兵衛「然様であらう。夫れならば尙ほのこと。さア、有り様に抜かしてしまへ。言はねえと、

奴、斬つてしまふぞ。』

喜兵衛『ハイ、申します。私は有り様は、堺町の芝居の幕引、喜太郎と云ふ者で御座ります。此様なし付けぬ役廻り、元はと云へばアノお侍さまの頼み、表立つて三勝さんの身請すると、お屋敷へ聞いて能くないとのこと。其の上今差當つて金が難しいから、其方が俠客になつて、斯うくしてくれと、頼りました出来合の鬼門喜兵衛、何卒堪忍なされて下さりませ。』

佐介『ヤア、其様なら奴も同脈か。』

喜兵衛『ハイ、夫れは師の小道具の中にある五十兩も、先度長九郎さんに貸し、都合合せて百五十兩、私の宅にも百五十兩、一つにして三百兩は、梅が枝のむけんの金で御座ります。』
半七『其様なら少しの中も、頼みに思つた喜兵衛と云うたが、善右衛門の方の廻し者であつたか。』

三勝『半兵衛さんとやらも、彼方方。』
半七『是りや何様したものであらうな。』



半兵衛『ハテ、お案じなされますな。是れからは此の半兵衛が、お二人のお世話致しまする。』

善右衛門『コレ、半兵衛とやら、身共が親共、恩を受けたと申したが、二人の奴の世話をしては。』

歌へ違ふであらうが。

半兵衛『違ふ筈さ、鐘旭の半兵衛が詳細は。』と、
俠客の形を脱ぐ。廣袖の形になり、

平三『船宿の美濃屋の平三さ。若旦那、半七さま、お久し振で御座りました。』

喜兵衛『イヤ、其様なら奴も。』
雁介『イヤ、其様なら奴も。』
平三『鬼門喜兵衛の化け損ひを見出さうため、』

鬼に勝つのは鐘旭の半兵衛、茶番の衣裳に木場のお館から、借りて来たのがお役に立つて、
侠客の身振は強いものであらう。』

おとめ『何様か見た様だと思つたが。』

おきん『平三さんとは、氣が付かなんだ。』

平三『佐介、三勝さんの身請のことも、此の平三が請合つた。また長九郎さんとやら、其の天

國は、是非とも俺が買ふから、然様思つて下さい。否だと言やア、出刃庖丁の劍の舞だ。』

長九郎『随分賣るのさ。併し價は百兩。』

佐介『三勝さんの身請が百兩。』

喜兵衛『一口メて二百兩。此處に百五十兩あれど、芝居の金。』

平三『明日の晩方俺が宅へ。』

長九郎『佐介、行きますよ。』

おとめ『先刻から何様なることかと案じて居たが、三勝さんの願ひの通り。』

きん『さぞ嬉しう御座んせう。』

三勝『ホンニ、此の様に嬉しいことはないわいなア。』

半七『夢見た様ぢやわいな。』

善右衛門『此方は夢の様ぢや。』と、

入相の鐘になる。

平三『入相だな。半七さんも三勝さんも、一緒に舟で、俺が宅へ。』

善右衛門『夫りやアならねえ。俺が呼んだ三勝だ。』

平三『モシ、貴殿のあげは暮迎ひ。平三が直ぐに後口は付けて来たのさ。』

善右衛門『其様なら其方へ連れて參るか。』

平三『お氣の毒だね。』

善右衛門『エ、忌々しい。長九郎、酒でも飲まう。』

長九郎『然様なされませ。』

平三『さア、行きませう。』

雁介『奴、野郎奴。』と、平三に掛る。

平三「何をやるのだ。」と、はり倒す。是れを木のかしら。善右衛門、ウンと起ち掛る。お留止める。平三、衣裳を肩に掛けるを刻みにて、宜しく拍子幕。

○

本舞臺三間の間、高平舞臺、向ふ茶屋壁暖簾口、例の所に門口、美濃屋と書きし懸行燈、外路次口、内に伊之介鯉節を搔いて居る。三勝摺鉢を押へ、半七摺古木を持ち、味噌を摺つて居る。相方しやうでんをかむせて、幕開く。

伊之介「何ぼ世帯の稽古だと云つて、夫れぢやア味噌は摺れやアしねえ。」

三勝「夫れぢやと云つて、摺鉢が廻つて歩くわいな。」

半七「一層世帯を持つたら、寝て計り居ようわいな。」

伊之介「イヤア、知らで不躰なこつた。併し世帯より、夫婦喧嘩の稽古をするが宜い。」

三勝「ソリヤ、もう主が他の女中さんと、厭らしい事をする、聞くことぢやないわいなア。」

半七「ナンノ、其方が善右衛門に、何處も彼も任せて置いて。」

三勝「お前にはお園さんと云ふ許嫁の好い女中さんがあるに由つて、油断がならぬわいなア。」
伊之介「然様だく。思入遣つ付けてく。」

三勝「私や何ぢやか腹が立つてなぬわいなア。」と、有り合ふものを投げる。

半七「投打をしをるな。其方が投げれば、私も投げる。」と、摺古木を投げる。しやうでんにな

り、兩人無上に投げる。伊之介傍から手傳うて投げる。

お留お勝、世話女房の打扮にて出て、之を止める。

おかつ「是りやお前方、何をしなさんすのぢや。」

半七「夫婦喧嘩の稽古で御座ります。」

お勝「ホホホホ。呆れたものぢや。伊之介も同じ様に、其處等を片付けなさんせ。」

伊之介「アイく。」と、片付ける。

半七「昨日平清で、此方の平三に逢うて、夫れから直に此處へ来て、其方衆夫婦が大い世話。」

三勝「半七さんの縁に連れ、私までがお世話になり、此の御恩は、死んでも忘れませぬわいな

ア。」

お勝『子供衆と云ふものは、一言めには死ぬるの何のと、其様な縁起の悪いことは言はしやんすな。半七さんお世話申すも、夫平三どののは、以前半七さんの親御厚倉次郎太夫さまへ御奉公、江戸詰の中私は仲浦で、小勝と云うた唄女、不圖馴染を重ね、末は何様しよう斯様しようと思ふに任せぬ勤の身、平三さんもお屋敷へ知れ、永のお暇。仕様模様もあればこそ、一層死んだが増しかと、思うたことは度々。朋輩衆の訓戒を力に、辛い辛抱した故に、念が届いて二人一緒に。お前も能う知つてゐなさんす筈、必ず短氣を出しなさんなえ。其の上主が請合はしやんした身請のこと、是非譯を付ける程に、必ず案じなさんすなえ。』

三勝『ホンニ、小いからの馴染と云うて、お前の深切忘れは置きませぬわいな。』

伊之介『モシ、親方が、もう歸んなさる時分だ。酒の支度でもして置きやせう。』

お勝『然様して下さんせ。』

伊之介『ドレ、肴を思ひ付けやせうか。』と、やはりしやうでんにて奥へ入る。奥より彦介、手を抱いて出、後より四ツ手駕籠、是れに笠屋の亭主勝次郎乗つて出、すつと後より仁、前幕の天國を腰に差し、うそく此處へ來、花道にて、

勝次郎『彦介どん、其様なら先刻の話の通り。』

彦介『何れ宜しうお頼み申します。表向は平三へはんりよ致します故。』

三勝『承知しました。裏口から直に二階へ。』

彦介『さやう爲されて下さりませ。』と、駕籠は路次へ入る。仁三は小隠れする。彦介門口から、

彦介『お勝、今朝の手紙の話は、分つたよ。』

お勝『夫れはお世話で御座んした。』

彦介『三勝さん、お通さんを連れて來ました。誰憚らず今夜は川と云ぶ宗だね。』

三勝『彦介さんか。嬉しがらすこと計り。』と、抱き取り着物を見て、

三勝『此の着物は。』

彦介『夫りやア宅に居る娘御が、此のお子へ拵へて上げたのさ。』

三勝『然様かいなア。お前ちやツと禮を言ひなさんせ。』

半七『彦介どのとやら、お通が毎度世話にと、其の娘御へ能う禮言うて下され。』

彦介「ハイ、貴殿が禮を被仰りましたら、嘸喜ばツしやるであらう。ドレ、奥へ行きませう。」

お勝「今に私が行くわいなア。」と、

彦介、奥へ入る。仁三宅へすつと入り、

仁三「半七、此處に居たなア。方々と尋ねた。」

半七「エ、お前は喃。」

仁三「モ宜いわい。昨日貸した五十兩を、返してくりやれ。」

半七「其の金故に半七は、人中で面目を。」

三勝「お前能う騙しなさんしたなア。」

仁三「何を俺が騙したよ。奴等二人が並んで居る所で、貸した金。半七、コレ、汝が筆で書いてある請取が取つてあるわえ。」と、前幕の請取を見せる。

半七「其の金は、皆偽物。」

仁三「夫れを俺が知るものかえ。金取らねえものが、何故請取書いた。」

半七「さア、夫れは。」

仁三「何故其の時、偽物だと言はねえ。」

半七「さア、夫れぢやと云うて。」

仁三「是りや何だな。物言を付けて置いて、五十兩を落にする氣だな。」

半七「然様ではないが。」

仁三「なけりや金を返せ。」

半七「さア、夫れは。」

仁三「何故請取を書いた。」

半七「さア、夫れは。」

仁三「さア。」

半七「さア。」

仁三「さア、さア。」

仁三「此の譯道は、何様なるのだ。」

半七『みすく知れた騙事。』

三勝『證據がなければ夫れぞとも。』

半七『言ふことならぬか。エ、。』と、口惜しき科し。仁三嘲笑つて、

仁三『所詮、金はあるめえ。金の代りに、三勝を連れて行かうかえ。』と、三勝を引ツ立てに掛ける。お勝其の手を拂ひ、

お勝『三勝さんを上げることはなりません。』

仁三『夫りやまた何故。』

お勝『何故と云うたら三勝さんは、仲浦の笠屋の抱へ。私が宅へ客人を送つて来て居なさんす中は、船宿の預り。夫れを自由に他所外へ遣ることは、まア、なりません。』

仁三『其様なら宜いわえ。三勝は連れて行くまいが、半七が此の宅に居りやア、掛合だ。さア、五十兩の金を寄越せ。』

お勝『夫りや半七さまのことなら、金をお前へ渡さうが、此方の方が戻るまで。』

仁三『待つてくれなら待ちもしよう。金が出来ずば、三勝を。』と、寄るを突き廻し、

お勝『アモシ、少しの間、奥の座敷で。』

仁三『盗人の晝寝。』

お勝『エ。』

仁三『ドリヤ、當にして居ようか。』と、

歌になり、奥へ入る。

三勝『何程塵蓋にさんせうと言うて、餘りぢや。』

半七『此方が検めぬが悪かつたが、萬一アノ金。』

お勝『まア、宜う御座んす。また何ぞ來ては面倒な。お前方は、アノ小座敷へ。』

半七『其様なら、お勝どの。』

お勝『三勝さん、ちやツとお連れなさんせ。』と、

歌になり、上の方へ兩人入る。正殿になり、向ふより善右衛門長九郎、佐介出て來り、善右衛門『昨日は詰らぬことであつた。其の代り今日は眞實の小判百兩あるテ。』

長九郎『夫れで此の短刀買つては、何様で御座ります。』

善右衛門『イヤ、半七に肩を持つ者が出来て、是非三勝を請出さねば、武士が立たぬ。』
佐介『然様で御座りますか。船宿だけに、平三に逢つて挨拶を聞かねばなりません。』
長九郎『俺は平三より、お勝に逢つて談じたい。』

佐介『ホンニ、昔は馴染だね。』

長九郎『未だ香が残つて居る。』

善右衛門『さア、行かう。』と、門口へ來り、

佐介、

佐介『御免なさいまし。廻しの佐介で御座ります。誰方もお通りなさいまし。』

善右衛門『許しやれ。』と、内へ入る。

お勝『ツイに見馴れぬお侍さま。長九郎さん、何と思つて。』

長九郎『昨日平三さんに賣る約束の天國を持つて。沙汰を言つて下さい。所詮金高の代物。相談は出来ぬえのを知つて居れど、此方さんの顔も見たさに來たのだ。』

お勝『長九郎さん、じやらくと。したが天國とやらは、是非買ひ戻さねばならぬ品。馴染甲斐に何卒賣つて下さんせ。』

長九郎『夫りやアお前の心次第で、此の天國は無代でも遣るのさ。』

佐介『モン、お勝さん、此の旦那は、今市善右衛門さんと云つて、三勝さんのお客。今朝百兩お持ちなさつて、是非身請をなさると被仰るが、此方の平三さんに今日の約束ゆる、此方までお連れ申しました。愈々身請が出来ますかね。』

お勝『三勝さんの身請は、是非とも此方で致します。亭主のが戻るまで、待つて居て下さんせ。』

善右衛門『此の方は今でも身請をするぞ。金は此の通りぢや。』と見せて、

善右衛門『また天國も品に依ると、身共が正金で求めるぞよ。』

長九郎『お勝さん、今聞く通りだ。お前の心一つで、短刀は。』と、見せびらかす。

善右衛門『平三が戻るまで。』

佐介『奥を借りて。』

長九郎『お勝さん、宜い返事を待つて居るよ。』と、

歌になり、三人奥へ入る。お勝の取科あつて、

お勝「長九郎が言葉の様子。殊に三勝さんの身請のせつば。亭主の人が戻りの遅いも、氣掛ちやわい喃。」と、思案をしながら奥へ入る。

向ふより、平三腕を組み、思案しながら出る。後より次郎大夫、ふけたる打扮、羽織袴大

小にて出て来り、花道にて次郎、
次郎大夫「夫れへ参るは以前の家來、市藏ではないか。」と、
是れより振り返り、平三、

平三「やア、貴殿は御主人。まづは御機嫌宜しく。」

次郎大夫「其方も無事にて、執着。」

平三「見苦しくとも、拙者が住居へ。」

次郎大夫「案内しやれ。」

平三「コウ、お出でなされませ。」と、内へ入る。次郎大夫四邊を見て、

次郎大夫「早速ながら市藏、今は此の家の平三とやら、出して貰はう。」

平三「出せと仰せらるゝは。」

次郎大夫「不所存者の半七を。」

平三「ヤ。」

次郎大夫「此の家に居ること、存じて参つた。」

平三「御存じの上は、包むに詮なし。然りながら、一旦御養子の半七さま、彼方がお連れ遊ば

して。」

次郎大夫「首討ち落す。」

平三「夫りや何故に。」

次郎大夫「何故とは、赤根半右衛門へ養子に遣りしに、殿より預る所の天國、菅家の色紙紛失。

其れを詮議と言ひ立て、遊所へ入り込み、二品の詮議は延引。然るに許嫁のお園こと、半七を慕ひ行方知れず。是れ皆半七が爲す所爲。それ故首討つて渡さねば、養父半右衛門に

武士の義理が相立たぬ。夫れぢやに由つて。」と、起ち掛る。平三止めて、

平三「アイヤ、其の儀で御座らば、御心配遊ばしますな。天國の短刀の有事も知れ、今日中

に取戻す心當。今一種の色紙の行方。併し夫れも近々に、詮議し出させう。また其の上にお園さまも、心當も御座りますれば、是れもどしどし私が命に代へて。』

次郎太夫『市藏、過分なぞや。噂を聞くに、三勝とやら何とやら、圍者妾もある習慣、首尾能う本地へ立歸り、お園と添うた上からは、また何様なりと云ふ様な、甘い親父ぢや御座らぬぞ。ドレ、お暇を申さう。』

平三『然様なら、お歸りで御座りまするか。』

次郎太夫『半七めが事を、宜敷頼みます。詮議が怠れば、首で御座るぞ。』

平三『委細承知仕りました。』

次郎太夫『家内へ能く言うてくりや。』と、

暮六つの鐘遠々として、向ふへ入る。

平三『子を思ふ親心は、また別なものぢやなア。』と、

奥よりお勝、行燈を持ち出て來り、

お勝『亭主の人、今戻らしやんしたのかえ。大う戻りが遅い故、復何處ぞへ入つてかと、案

じて居たわいなア。』

平三『エ、俺ア夫れ所ぢやアねえ。三勝どのの身請の金、まだ其の上に天國を、請戻す其の金高も百兩、途方に暮れて居るわえ。』

お勝『モシ、案じなさんすな。其の金は有るぞえ。』

平三『ナニ、金があるとは。』

お勝『書いて下さんせ。』

平三『ヤ。』

お勝『離縁狀書いて下さんせ。』

平三『スリヤ、離縁狀取り。』

お勝『夫の無い身は我が儘に、不義淫奔と云はれても、お前の顔が立つわいなア。』

平三『オ、出來した。女房、書くにも及ばぬ。ソレ、一札。』と、離縁狀を投り出す。

お勝『其様ならお前も。』

平三『オ、然様言ひ出してくれるを、待つて居た。水臭い男と思はうが、お主の爲には代へ

られぬ。』

お勝『假令離縁狀取るとても。』

平三『心の中は、變らぬ夫婦。』

お勝『嬉しう御座んす。』

平三『離縁狀は反古にせぬ様に、返事を待つて居るぞよ。』と、

歌になり、奥に入る。お勝離縁狀を持ち、わつと泣き出す。此の中上の障子を開け、三勝

窺ひ居る。お勝思ひ切つて行き掛る。

三勝『お勝さん、何處へ行きなさんす。』と、ずつと出る。

お勝『エ、三勝さん、何時の間に。』

三勝『先刻にから。』

お勝『其様なら様子を。』

三勝『聞いたでもなし、聞かぬでもなしぢやが、お勝さん、もう止して下さんせ。』

お勝『もう止せと言はしやんすは。』



三勝『お前、離縁狀取つて、長九郎に従はないでも宜う御座んす。此の三勝が、善右衛門さんの心に従つて、身請せられて行くわいなア。』

お勝『アノお前が善右衛門さんと。オ、能う言うて下さんした。私が心を推量して、平三さんに添はさうとて、お前の身を汚さうとは。コレ、三勝さん、お志は嬉しう御座んすわいなア。』

三勝『今までは辛うあつた善右衛門さん、腹も立てず、身請までして遣らうと云ふ深切。夫れに引替へ、能力のない半七さん、人さんの世話で首尾能う、本地へ歸んなさんしてか

ら、お園さんと云ふ奥さんのある身、其の様に面白うもないお方に引つ掛つて居ようより、善右衛門さんに身を任すが、まア、當世で御座んす。』

お勝「イヤ、お前、本氣で言ひなさんすか。』

三勝「アイ。眞實に愛相が盡きましたわいなア。』

お勝「三勝さん、エ、情ない。お前夫りや戀か欲か。善右衛門に身を任すとは、やつぱり私を庇護うてか。』と、言へど三勝彼方向いて居る故、

お勝「エ、コレ、其方向かずと、然様ぢやと言うて、落着かせて下さんせ。』と、言へど知らぬ顔をして居る。

お勝「お前、眞實かいなア。實に愛相が盡きたのかい喃。』と、種々思入して、

お勝「コレ、お通我が身は喃と、相方と言うたら腹も立たうけれど、私も昔の小勝になつて、訓戒も妹分の三勝に、後の後までも戀知りと、云はせたいのが色里の習慣。姉分の小勝は戀故、斯様した形をして水くんだり、御飯炊く様な世帯でも、好いた男と共暮は、勤の功名、氣に濟まぬ綾や錦の褥より、木綿蒲團の着肌宜く、枕に榮華があるわいなア。流れ忙し

き深川の、賤しい唄女の勤でも、義理と實とのなけりやならぬ。初めての座敷から、お世話になつた半七さんを振り捨て、如何に榮耀がしたいとて、夫りや餘りぢや三勝さん、身持の悪い此の小勝が、嘗めた訓戒も馴染だけ、悪う聞かずと眞實を、明かして聞かせて下さんせ。』

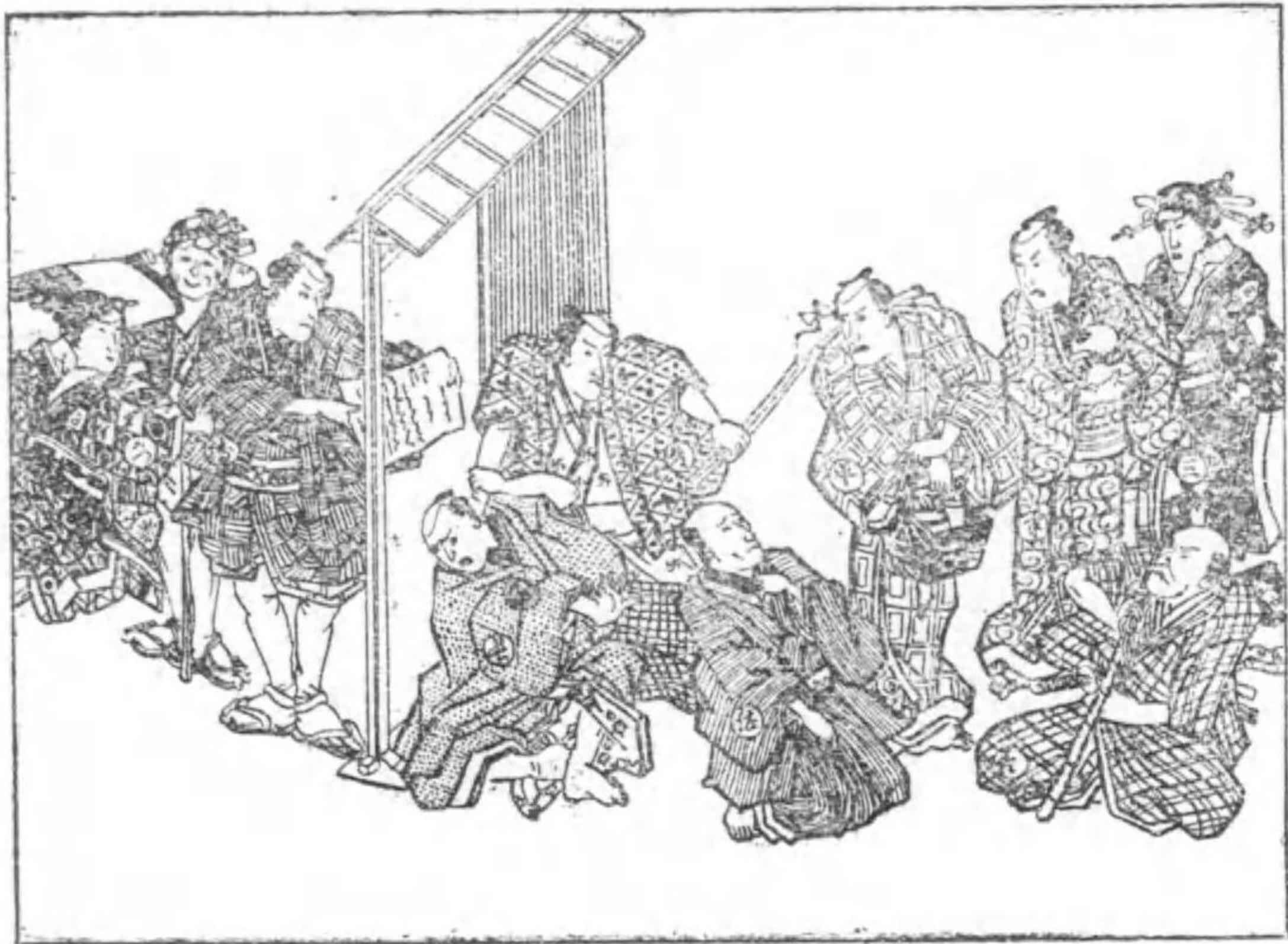
三勝「モウシ、姉さん、堪忍して下さんせ。小女で居た時分から、お前の世話。髪の毛の結び様寝姿までも氣を附けて、初めて座敷へ出る時も、帯まで締めて貰うた御恩、眞の姉さんとも思ふお前の言葉、背くでは御座んせぬが、半七さんのこと計りは、言ひ出しても下さんすな。私や善右衛門さんの深切に、請出されて行くわいなア。』と、

好き時分に善右衛門、窺ひて密と入る。

お勝「餘り呆れて物が言はれぬわいな喃。此方さんと半七さんと、添はさうと思へばこそ、是れ程に夫婦が、苦勞心盡しの離縁狀、役に立つか反古にするか、篤りと思案して、今一度返事を聞かせて下さんせ。』と、離縁狀を打つけ、

お勝「ア、任せぬ浮世ではあるわいなア。』と、

歌になり、お奥へ入る。



善右衛門「縁が切れたら此の天國は、お主へ遣るわ。」
 長九郎「是りや面白い。」
 佐介「悪足の半七と。」
 善右衛門「縁を此の場で。」
 三勝「斷然切つて見せようわいなア。」と、歌にて奥より、半七お通を抱きて出て來り、半七「三勝、此處に居やツたか。お通がせがんでならぬ。一寸乳を飲ませて遣りたい喃。」と言へば、黙つて彼方に向いて居る。
 半七「コレ、三勝、何を其の様に其方向いて、物も言はぬのぢや。そして善右衛門どのの傍へ寄つて、是りや何様したのぢや。」

引違へて善右衛門、長九郎佐介、酒肴を持ち出て、善右衛門「三勝、疑ひ晴れた。佐介、直に身請ぢやぞ。」
 佐介「夫れは有難う御座りまする。何様せ平三の方がは難しい。」
 長九郎「イヨ、似肖者奴。」
 善右衛門「煽動てくれな。」
 三勝「私が實に可愛くば、身請は後へ廻して、長九郎さんの持つて居なさんす、天國を買うて下さんせ。今まで世話になつた半七さんに、縁取る證據に遣るわい喃。」
 長九郎「天國を取つて置いて、後で愛相盡しとは、餘り狂言が古い。是れはやつぱり俺が功名。お勝に賣るのが宜い。」
 善右衛門「イヤ、斯様するが宜い。長九郎、其の天國を俺が買うて、三勝に遣る代りに、見る前で半七と、斷然と縁を切つて見せる。」
 三勝「其様なら此處で、半七さんと。」

三勝「ハテ、何様と云うたら、お前に愛相が盡きた故。」
半七「ナニ。」

三勝「また愛相も盡きさうなものかいな。私に計り苦勞させ、尋ねる品が出る時は、お屋敷へ行ってお園さんと、一緒になると云ふ様な、水臭いお前に、浮々と付いて居てからが、末の詰らぬこと。夫れぢやに依つて善右衛門さんに身を任せ、榮耀榮華をするわいなア。」

半七「コレ、其の筈ではあるまいが喃。コレ、お通は可愛うないかい喃。」

三勝「女子の子は女に付くと云ふけれど、お前の種の其の子は、私や否ぢやに依つて、お前の勝手にしなさんせ。」

半七「其様ならお通がことも構はず。」

三勝「何のいなア、合せものは離れもの。離れにやならぬ其の譯も、お通が背に縫ひ込んだ。半七「ヤ。」と、抱き子の背の綻びより、文を出して、

三勝さま参る、園より

半七「其様なら是れで。」

三勝「此の後物言うても下さんすなえ。」と、

半七「一寸讀んで見て科し。」

善右衛門「是れで俺も清々したわえ。」

三勝「善右衛門さん、約束の物を。」

善右衛門「長九郎、其の短刀を。」

長九郎「愈々天國をかえ。」と、天國を出す。此の時奥より、彦介出て、

彦介「是りやア俺がのだ。」と、引ッ奪る。

長九郎「奴やア鰻搔の彦介、此の天國を何様するのだ。」

彦介「何様するも凄い。此の間川から拾つた此の短刀、斯様云ふ物と知らねえから、賣らうと言つたを、此方は無代取つたから俺がのよ。」

長九郎「痴者奴、其の時俺が財布に入れた金を、お主が引ッ奪つたから、勘定は濟んで居るわ。」

彦介「體の宜いことを言ふぜえ。財布の中へ、百足小判か石を入れて置いたのだ。奪ひ合ふ

機に川へ打ち込んだを、夫り限りに捜しもせず。殊に彼れが眞の金なら、ナニ彼の限りに措くものか。俺が力で此方を尋ねても、逃げて歩くが金でない證據だ。何と一句もあるめえが喃。』

佐介『短刀とやらが違つたら、三勝さんの身請をしなさいまし。』

平三『其の身請は、平三がするよ。』と、奥より出て、

平三『佐介どん、此方も物覚えの悪い男だ。』

佐介『其様なら金を請取りやせう。』

平三『金は無えよ。』

佐介『ソレ、見なせえ。身請を俺がする。其様なら金を。今は無え。何のことだな。面白くも

ねえ。大概に長太郎坊にするが宜い。善右衛門さん、金をお渡しなさいまして、三勝さん

をお連れなさいやし。』

平三『イ、ヤ、今日はならねえ。』

佐介『ならねえなら、只今金だ。』

平三『今は金は無えよ。』

佐介『何のことだな。お前も小口でも利くにやア、似合ねえ分らねえ男だ。』

勝次郎『イ、ヤ、分つて居るよ。』と、此の以前より、路次口より以前の四ツ手駕籠にお勝を

乗せて、笠屋の亭主勝次郎附き出でて、此の時外より門口を開ける。

平三『ヤ、貴殿は笠屋勝次郎さま。』

佐介『何が分つて居ますね。』

勝次郎『三勝が身請は濟んだ。年季證文は平三どのへ。』

平三『シテ、此の金の出所は。』

彦介『逢つて禮を言つて遣つて下さい。』と、門口へ来て駕籠垂を上げる。

平三『ヤア、其様なら女房か。』

お勝『二度の勤もお主のため。』

彦介『俺が女房はお勝が姉、元は赤根の下女奉公。夫れに思はず此の間、財布を尋ぬる川端に身投の娘連れて戻れば、主人の娘御お園さま。』

三勝『知らぬこととて其のお宅、お通を預けてあると云ひ。』

半七『添へて寄越せし此の文に、尼になるべき文言。』

平三『其處を成り能く治むるは、半七さまの歸參の上。』

彦介『其のかたしろの天國は。』と渡す。

半七『エ、忝ない。』

平三『其様なら女房。』

お勝『お前は達者で。』と科し、勝次郎、駕籠の垂を下し、

勝次郎『駕籠遣つてくれ。』と、

歌になり、勝次郎先に、彦介駕籠に付き向ふへ入る。

半七『此方衆夫婦の陰で、天國と云ひ、三勝まで。エ、忝ない。』

善右衛門『コレ、三勝、今おのしが言つたことは。』

三勝『天國が欲しい計りぢやわいなア。』

善右衛門『何のことだ。』

平三『もう此方衆は。俺が宅に用はあるめえ。きりく、歸らツしやい。』と、一々攫み出す。

善右衛門『何だか夢を見た様だ。』

長九郎『此方は狐に魅された様だ。』

佐介『イヤ、俺も語らねえ。何様で笠屋へは歸られず。』

善右衛門『三人寄れば文珠の智慧。』

長九郎『イヤ、一文の智慧も出ない。』

佐介『まア、行きませう。』と、

しやうでんにて、向ふへ入る。

半七『是れから今一種の。』

仁三『菅家の色紙は、酔寢の仁三が持つて居るわ。』と、仁三奥より出る。

半七『其様なら色紙は、此方さんが。』

仁三『尋ね出して持つて居るが、半七、欲しいか。』

半七『其の品故に種々と。』

仁三『苦勞休めに、遣りもしよう。其の代りには、望がある。』

半七『シテ、此方さんの望とは。』

仁三『他でもねえ。此處に居る三勝を、俺が女房に、りやれ。』

平三『スリヤ、三勝どのを。』

仁三『我も以前は親父が小者、半七が見る前で、俺に執持ち、心に従はせろ。否だと言やア今

見る前で、色紙を俺が引破つて。』と、懐中より色紙の箱を出し、中の色紙を破らうとする。

半七『アモシ、滅多なことを。』

仁三『其様なら此處で執持つか。』

兩人『さア、夫れは。』

仁三『色紙を破るか。』

兩人『さア、夫れは。』

仁三『さア。』

兩人『さア。』

三人『さアくくく。』

仁三『きりく返事をしやアがれ。』

三勝『其の返事は、私がする程に。まア、短氣なことをしなさんすな。』

仁三『返事をすると言ふならば、三勝、おぬしは俺の心に従ふか。』

三勝『さア、否と言へば、大切な色紙へ疵のつく時は、半七さんのお身の大事。夫れぢやに

依つて。』

仁三『得心か。』

三勝『アイ。』

仁三『是りや然様なけりや叶ふまい。』

半七『三勝、何にも言はぬ。嬉しいぞや。』

平三『待てば貞女を捨て、貞女を立つる常磐の例し。三勝どのが得心なら、其の色紙をば。』

仁三『くれて遣るから二人共、此の家の中を遠慮さッし。』

半七『其様なら色紙を。』

仁三『きりく、持つて行きやアがれ。』と、箱を渡し表へ突き出す。

此の時伊之介出て、

伊之介『是りやア俺が貰つた。』と、手を掛ける故、平三出て伊之介を捕へる。仁三内より戸を
びつしやりとさす。伊之介を投げる。是れを木のかしら、三勝わつと泣きおとす。平三色
紙の箱を透し見る。半七お通を動りつける。仁三懐中より眞の色紙を出し、肩で笑ふを刻み
にて、拍子幕引付けると、屋臺囃の連鎖にて、引返す。

○

本舞臺一面の棚矢來、地口行燈を點け、初午夜宮の體。此處に善右衛門、色紙の箱を持ち
し半七を引付け、長九郎佐介雁介伊之立掛り、神輿太鼓にて幕開く。

半七『是りや大勢で、道に待ち伏せ半七を。』

善右衛門『戀の叶はぬ意趣晴し。』

四人『俺等が寄つて、打ちのめすのだ。』



善右衛門『夫れより先へ、天國色紙を。』
半七『此の二品故、多くの人にも難儀を
掛け、再び取り得し天國色紙、やは
り奴に渡さうか。』

善右衛門『面倒だ。疊んで仕舞へ。』

四人『合點だ。』と、寄つて半七を打ちの
めす。此の中善右衛門、短刀色紙を
引ツたくり、

善右衛門『是れがある故面倒だ。一層斯
ろしてく。』と、色紙を破り、天國
を石に打付けて折る。半七見て、
半七『ヤヤヤ、大切なる天國色紙を。ホ
ホ、ホイ。』と、當惑の思入。

善右衛門『是れで少しは腹が癒たわえ。』

半七『是りや半七が一生懸命。』と、抜討に善右衛門を斬る。ハツと言つて倒れる。

長九郎『ソリヤ、抜いたぞ。打ち据ゑろく。』と、打つて掛る。向ふより平三一散に駈けて來り、四人を投げ除ける。

半七『平三か、善右衛門が天國色紙を。』

平三『何と被仰る。』と、捨てある短刀色紙を見て、

平三『二種共に、似ても似付かぬ。』

半七『偽物ぢや。』

善右衛門『奴、半七奴。』と、よろほひ寄る。平三附き廻し屹となる。四人取巻き、此の見えにて道具。

本舞臺、前幕の、美濃屋の道具に戻る。此處に仁三、酒に酔ひたる體にて、三勝に靠れて居る。

三勝『其様なら今言ひなさんした通り、天國も色紙とやらも。』

仁三『俺と善右衛門とで盗んだ。夫れだから親父は蟄居。半七は今の狀。其の上渡して遣つた色紙も天國も偽物。眞實の物は、コレ、此處にあるわ。是れを屋敷へ持つて行けば、親父も半七奴も、切腹位なものはある。其の後で赤根の家は、俺が全呑み、おぬしは奥さま、何と嬉しいかく。』と、酒に酔つて悪事を残らず言つて寝る。三勝科しあつて、

三勝『其様なら此の二種が、アノ、眞實の。』と、言へど思慮なく寝てゐる。

三勝『お前、寝さんしたのかえ。』と、言へど答なき故、聞けば聞く程大悪人、兄とは云へど恐ろしい。親夫のため、是りやもう一層と、四邊を見て屹となる。

捨て鐘凄き相方、其處にある酒を無理に飲み、色紙を懐中へ入れ、天國を抜き、仁三の傍へ寄り、ぐつと突く。雷鳴り出す。仁三苦しみ跳ね起き、

仁三『奴、女め。斬りやアがつたなく。』と、むしやぶり付く。是れより二人、危きたてあつて、と仁三我が手に天國を腹へ突き立て、苦しみ陥る向ふより、平三半七を連れ戻り來り、此の體を見て、

半七『ヤ、ヤ、兄ぢや人を。』

平三『三勝どのが。』

三勝『二種を盗んだも仁三さん。殊に眞實の天國色紙を隠し持ち、お屋敷へ差上げ、お前を腹切らすとある故に。』

半七『ナニ、眞實の品と。』と、

三勝色紙を半七に渡す。平三短刀を抜き見て、

平三『紛ふ方なき天國の短刀。』

半七『菅家の色紙。』

兩人『エ、忝ない。』

三勝『悪人ながらも假の兄さん、此の身の言譯。』と、天國にて死なうとする。次郎太夫出て、是れを止めて、

次郎『ヤレ、早まるな。仁三郎は、以前は捨て子。殊に盗賊討ち取つたるは、三勝が功名。お

聞は本妻、三勝は妾。二種揃うた上からは、赤根の家は萬代不易。』

皆々『目出度い〜。』

まづ此の本は是れ限り。何卒御評判の程、願ひ上げ奉りまする。

三勝半七 小勝平三 睦月深仲町 下之卷 大尾



源次郎 お高
霞帯 かすみのおび
縮如月 しめてきさらぎ

全六册

五柳亭徳升作
歌川國安畫

源次郎 高霞帶締如月序

唐の玄宗を傾け、養母楊貴妃を殺害して、天下を掌握せし安祿山は、其の子安慶緒に殺され、父を討つたる天罰忽ち巡り來つて、思史明に討たる。僅な榮え程なくして、終に祿山の跡絶えたり。本朝は源爲義其の子義朝、勅命に依つて父を討つ。終に其の身も美濃尾張、野間の宇津美にて、長田が爲に害せらる。昔を今に其の例し、數ふるに違あらず。周處が如き者は、古今稀なり。惡去り、善に基きて、大將に經昇り、遂に天下に忠孝の譽を取る。世俗に惡に強き者は、必ず善に強しと云へり。されば忠孝貞信の四は、人倫として辨へざるはなけれども、色慾の二ツに心も惑み妖邪となり、其の家を滅すもの、横を知らずとかや。之に著す小冊は、遠き古を取らず、近き因果物語りにして、喜怒哀樂離苦の情を述ぶるになん。

天保四癸己春

五柳亭戲述

源次郎 霞帯締如月上之卷

五柳亭徳升作
歌川國安畫

夫れ淫夫は、家を滅すことを辨へず。妬婦は身に妖横なるを辨へずとかや。今は昔下總國佐倉の在に、久野九太夫と云ふ者、田畑數多持ち、豊に暮らしけるが、世を嗣ぐべき男子とてはなく、今年十七歳になる、お高と云へる娘一人あり。幼き時は病身故、兩親の寵愛限りなく、氣儘に育てけり。或春のことなりしが、氏神へ詣でんとて、家内の者七人にて宿を出でけるが、何處も花の頃は、貴賤群集絶え間なし。殊に當春社の造營ありて、朱の玉垣色を増し、木の間くに現れて、いと華美に見えけるが、幸ひ櫻の大樹の下へ、毛氈など打敷き、ぢきらうを開き、酒酌み交し遊び楽しみ、興に乗じてお高は側仕の女中と、鬼はたし目



隠しなどして追ひ巡りたる處へ、年の頃十八九の角前髪の男、徐々と通りたる所、お高は側仕の女と心得、ひたと男に縋り付く。男「こは人違ひし給ふな。」と、聞いて驚き、目隠しなせし手拭を外して、互に見交す顔と顔、鄙に稀なる優男、只面はゆげに見えければ、夫れと見るより側仕の女共、側仕「是非々々此方へ。」と、無理に手を取り、毛氈の上に伴ひ、有り合ふ盞を巡らしける。時に彼の優男言ふ様、優男「某は酒々井源内が悻、源次郎と申す者にて、幼年の頃より、江戸表へ奉公に出でしかど、多病故暇を取り宿に在りし所、今

日保養の爲に當社へ參詣致せし所、圖らずも御馳走になりし。』とて、厚く禮を述べ起たんとするを、無理に引止めんとすれど、黄昏に及びければ詮方なく、名残惜しくも別れを告げて立出でけり。お高は面はゆげに佇み、見送り居たり。傍から急ぎ立てられて、心ならずも我が宿へ歸り、明暮源次郎のこのみ思ひ憧がれ、傳手を求めて彼の人の方へ、人知れず文の數送りければ、源次郎もお高が切なる心に愛でて、此方よりも返事の玉章を贈りければ、彼の人に逢ひ見る心地して暮らしぬ。

此處に松井源吾と云ふ浪人、手跡指南して暮らしぬ。是れもお高を戀ひ慕ひ、千束の文を贈ると雖も、ツイに一度の返事だになく打過ぎぬれば、只無情とのみ思ひ暮らせし所、或時源吾門弟の方へ招かれ、夜に入つて家に歸らんとて、獨り辿りし所、此方の辻堂にて、人の苦しむ聲聞えければ、不思議に思ひ、月影に透かし見れど、木陰にて定かならねば、提燈を照らし熱々透かし見れば、年の過十八九の若男なれば、源吾差寄り、

源吾『何者なりや。』と、尋ねければ、彼の者漸う顔を上げ、苦しき息を突きながら、若男『某は近き邊の者なるが、今宵用事ありて急ぐ途、俄に持病の癩起り、急脾に差込み次

第に上り、只今絶え入り申さん。何卒某の懐中の紙入を取出して、疊紙の中にゑんしうの黒丸子があるまゝ、取出して給はるべし。』と、聞いて源吾も哀れに思ひ、

源吾『サテ、痛はしき次第なり。我等通り掛りしも一樹の縁、且は御身の僥倖なり。介抱致し遣すべし。』と、彼の男の懐中より、紙入取出し、彼れか是れかと尋ぬる中に、女の手跡數通の文。中にも宛名は、『源様參る、高より』と、書いてあり。心憎しと思ひながら、まづ藥を取出し、口に入れて、手手水を柄杓に汲み取り與へ、暫時介抱なしければ、漸う癩も治りければ、起き上り言ふ様、

若男『サテ、誰方さまにや、斯く御世話に與り、御用の途をお止め申したり。併しながら、袖振り合ふも他生の縁。御陰にて苦痛を免れたり。最早辿られ申すべし。』と、厚く禮を述べければ、源吾言ふ様、

源吾『夫れは大慶至極。近頃卒爾ながら承はりたきは、貴殿の紙入に、數通の文殼あり。察する所其の女と理なき仲にて、今宵夫れまで御通ひの途にて、御難儀と見受けたり。若き者は誰しもある習慣、後悔は仕らん。何も時の興なれば、語り給へ。』と、言はれて恥しげに

顔を赤らめて居たりしが、稍あつて、

源次郎「斯く御介抱に與りし上は、何をか包み申さん。私ことは此の里外の者にて、酒々井源次郎と申し、未だ親掛りの者なるが、當春將門山の花見の折柄、櫻の下にて高と申す女を見初め、互に心を通はせ、文の便は致せども、人目の牆に隔てられ、實の契もなく、空しく月日を送りし所、

今宵は好き首尾なれば、裏道より忍び來るべし。積る實の語ひも致すべし。

との報知の文、いと心は忙しく、參る途にて思はずも、此の病にて難儀致せし所、御介抱に與りしは、盡きせぬ御縁なり。今日後、私を弟と思召し給はるべし。』と聞いて、源吾は心急き立ち、

源吾「其の女は、久野九太夫が娘にては候はずや。』と問はれて、源次郎、

源次郎「如何にも其の者にて候。必ず他言し下さるまじ。』と、只管頼みければ、源吾笑ひながら、

源吾「其の所は少しも案じ給ふな。若い者は相互のことなり。』と、口では言へど心には、我多

年心を通はせし、お高が身の上話。道理こそ數通の玉章贈ると雖も、丸木橋の返事、此の若

衆故と、忽ち悪心差起り、幸ひ四邊に人もなしと、一生一度の計略、此處にありと心腹に

收め、源次郎が傍に差寄り、提燈にて熟々顔を透かし見て言ふ様、

源吾「先刻よりは血色も宜しく、癩も治り、一旦のことながら、復々其の顔色にて、道を急ぎ給ふと、差起らんも覺束なし。某奇妙の術を覺えたり。只此の指先にて一押し、癩を下

げるが大得手ものなり。』とて、

源吾「物序に、療治して進せん。』と聞き、源次郎大いに喜び言ふ様、

源次郎「此の癩が持病にて、折々難儀致すなり。好き折柄なれば、お願ひ申すなり。』

源吾は打點頭き、

源吾「然らば帯を解き、此の處へ俯けに寝給ふべし。』とて、己れも羽織など疊み懷中なし、

源次郎が胸先より徐々と撫で下し、急脾に大指を當て、力任せにぐつと一押しに衝きければ、

何かは以て堪るべき、源次郎は手足をもがき、悶絶して絶え入り、死に失せけるこそ慘酷な

れ。

斯くて源吾は、心靜かに衣類を剥ぎ取り、己れが古き襦袢を、大川の急流れへ、死骸と共に流し、彼が衣裳を着替へ、彼の紙入を懐中なし、今宵の闇は忍ぶに屈竟、天の與へと手拭にて顔を隠し、是れよりお高が宅までは、程近くと喜び、急ぎ行く程に、彼が宅の裏口へ廻り、黒塀の隙より透かし見れば、父と思しく六十餘りの老人と、お高は差向ひにて物語り居る故、暫時佇み待つ中に、彼の老爺次へ起つて行く様子なれば、時分は宜しと庭の戸口を、ほとくと訪れければ、お高は待ち兼ね其の人なりと思ひて、縁側へ立出で、忍び足なして飛石傳ひ、門の戸を開け、手を取り物をも言はず、此方の圍へ忍ばせ、人違ひとはつゆ知らず、闇黒にて此の年月の、憂きを語り言ひ寄らんにも、一間の中、父の目を覺さんも計り難しと、心の急くまゝ只逡巡して居る故、爲濟ましたりと、源吾はお高と割無き仲となりけり。はや其の中に一間の中、父が口頃の啖持にて、咳拂ひに二人は驚き、復明夜と言葉を番ひ、



お高「必ず忘れ給ふな。」と、後に差せし琴柱の簪、源吾に渡せば手早く收め、徐々にして立歸る、心の程こそ恐ろしけれ。斯くてお高は寢もやらず、その夜の數々守れ難く、夜明けてもうつらうつらと、暮るるを待ち居たり。斯くて初夜の頃とも思しき頃、合圖の如く庭傳ひに、源吾は忍び來れば、お高は喜び、今宵は我が居間へ忍ばせんとて、一間へ伴ひ熟々見れば、こは人違なりと驚き、立去らんとするを、源吾ちつと押へて動かさず。源吾「昨夜二世の約束し給ふを忘れしや。是れ見給へ、確な證據は、此處にあり。」と、

懐中より琴柱の簪差出せば、お高は驚き仰天なし、暫時物をも言はず居たりしが、稍あつて顔を打赤め、

お高「昨夜忍び来り給ふは、貴郎にてましますか。心急くまゝ然様とは知らず、恥しい妹背の語ひ、何面目。自らが戀ひ参らせしは、二十歳計りの角前髪にて、彌生の春の花見の折から、浅からぬ縁の語ひ、其のお方と存ぜしに、貴郎にて在せしか。」と、顔に袖當て泣き沈む。源吾はお高が背を掻き撫で、

源吾「成程、其の不審尤もなり。某夜前八丁堤を通りし所、此方の辻堂にて、病に苦しむ人あり。某其の場へ行き掛り、何處の人ぞと介抱して、様子を聞けば、御身と心を通はず由語り、「今宵忍ぶの途にて、斯かる苦しみ。とても存命覺束なし。去ぬる命は惜しまねど、我病死せしと聞かば、嗚やお高は悲しむべし。斯く語り合ひ申せしも、浅からぬ縁なれば、何卒某に成り代り、永くも女の心を慰め給はらば、如何計り有難き。是れを證據に持ち給へ」とて、數通の文を賜はりしなり。斯く言ひ終つて、忽ち空しくなられたり。然れば其の人の頼みを破らぬ計りに、御身を計略り申せしなり。」と、實しやかに語りければ、お高は娘心の

の一筋に、眞實と心得涙を流し、

お高「サテく、痛はしの御事かな。我が身ゆゑ空しくならせ給ふは、あぢきな夢にも知らず。」と、袂を絞り、暫時絶え入り泣き沈む。實に理と見えにけり。

源次郎 霞帯締如月 中之卷

五柳亭徳升作
歌川國安畫

○

源吾は爲濟ましたりと尙ほも偽り、深切に語りければ、流石女の淺慮しさ、何時しか操をも打忘れ、濡れぬ先こそ露をも厭へ、昨夜よりして吹き初めし、忘れもやらぬ戀風が、慄然身に染む間の中、目と目の中に心解け、のつそりならぬ眞實の、二世の固めと契りけり。
斯くて源吾は、毎夜々々通ひけるを、薄々お高が父九大夫、之を知ると雖も、此の頓喘息にて床に就き、起臥も自由ならず、病に閉ぢられ苦しき中にも、一人娘故訓戒なすと雖も、お高は更に聞き入れず。初めには似も寄らず、源吾を戀ひ慕ひ、氣も浮はの空にて暮らしけり。中に父九大夫は病に閉ぢられ、六十一を一期として、身逝りけり。お高は孤兒となり、尙ほ

も源吾を頼りに思ひ、二七日も経たざる中に、我が家へ寢泊りをさせければ、皆々爪弾きして、奉公人も追々暇を取り、宿へ下りぬ。

斯くては果てじとて、遠き親類より、智のことを申し入ると雖も、お高は源吾ならでは、他の男は持たぬと言ひ切りければ、詮方なく親類中より相談なして、源吾を智となして吉日を選び、婚禮取結びをなしぬ。夫婦仲も睦しく、源吾初めの悪心にも似もやらず、下々を憫み、家事の取締等能くなしければ、親類中にも、安堵なし居る中に、源吾も養父の名を繼ぎ、九大夫と名乗り、己れが前非を悔みて施與を専らとし、正直を本としければ、隣村にても生れ變りしなどと評判なしぬ。

時に光陰矢の如く、五箇年の星霜を経たる中に、夫婦が中に男子一人儲けたり。名を小太郎と呼び、寵愛なしたる中に、復女子を生めり。然るに兄の小太郎成人に従ひ、彼の横死せし源次郎に、面貌段々と似て來る故、妻のお高は心に喜び、生れ變りしなどと愛しけると雖も、夫九大夫は心に憂ひ、過ぐる月日に關守なく、小太郎十一歳、娘お喜多は七歳になりけり。或夜のことなりしが、悴小太郎大きに壓はれ、寢間を立出で狂ひ巡る故、夫婦は驚き取

押へければ、小太郎は目を怒らせ、

小太郎「ア、怨めしや、汝覚えあらん。十三箇年以前、即ち今月今宵、八丁堤にて、我を計略り締め殺せしなり。其の時の思ひ、ア苦しや、堪へ難や。女も然の如く、能くも操を破りしなり。永くも二人に憂き目を見すべし。」と、罵りければ、九太夫は我が子ながらも恐ろしく、口に手を當て言はせじとすれば、其の手を喰ひ付き、なか／＼十二の子供の力にあらず。夫婦も手に餘して見えけるが、程なく夜も白みければ、其の儘打臥し、高軒にて正體なく、晝は寢静まり夜に入ると、先の如く狂ひ巡る故、加持祈禱なすと雖も、更に其の驗なく、段々と瘦せ衰へ、毎夜泣き叫び苦しむ故、目も當てられず。實に愛子のこと故、金に飽かして種々様々に慰ると雖も驗なく、三月めに僅か十一歳にして、此の世を去りけるこそ不便。是れ皆親の因果が、我が子に報いるの譬なり。夫婦はあるにもあられず、只涙に暮れて居たりけり。早其の年も暮れ、春のことなりしが、當村の寄合にて、重立ちし者計り、庄屋方へ打寄りける所、九太夫も其の席に列ると雖も、春の賑しきに就き、我が子小太郎のことを思ひ出し、鬱ぎ居る故傍からも、盞を巡らし、浮き立つ様に勸むると雖も、とかく物憂



きにて、座も白けて見えければ、其の日執持に出でし三藏と云ふ者、久しく江戸表に奉公致し、心利きたる者なりしが、此の體を見て言ふ様、

三藏「今日のお寄合は、當村の吉例にて、毎年夜と共の大酒宴。然るに久野の旦那何となく、心浮き立ちたまはぬゆゑ、一座も遠慮して見えけり。斯様な席には、女が無くては進まぬものなり。幸ひ此の頃江戸表より、旅稼の三味線の師匠、お熊と云ふもの當所へ來れり。是れを御酒の相手に出すべく。」とて其の席を起ち、程なく伴來り、

三藏「いざ／＼、此方へ。」と、伴ひ出でたり。

如何にも田舎者とは違ひ、一際目立色白く、みめ形も好き風俗なり。其の上年増だけ如きなき取廻し故、九太夫一目見るより慄然身に染み、暫時見惚れて居たりしを、三藏見て取りお熊に目配せなせば、夫れと解り九太夫が傍に坐り、

お熊「當所不案内の者なれば、何卒御最良になし下さるべし。」と挨拶なし、夫れより差しつ押へつ、盞を巡らしければ、九太夫何時しか日頃の憂きを忘れ、盞を傾けぬ。

時にお熊は三味線を取り、調子を合せ、
へ馴れし昔の手枕に、語り盡くせし睦言葉、耳に止まり懐かしや。忘れぬや
らぬ戀草の、露も思ひも亂れつ、我が身は元の身なれども、戀しき人のな
き故に、月やあらぬと侘ちしも、實に理りと思召せ。心細きの折柄に、寡鳥
の浮れ聲、憂さを問ふかと思はれて、哀れを寄する道邊の、終夜點す螢火の、
消えぬ思ひのあればにや、蟲さへ胸をば焦すらん。

と、唄ひければ、九太夫聞き終つて、
九太夫「心にくき唱歌かな。」と、獨り笑みつゝ、復盞を巡らしけるに、何時しかお熊も酔に

乗じて、九太夫が傍に寄り、いとなまめかしく見えければ、在り合ふ人々も、傍から種々とそやし立てければ、九太夫忽ち心動き、三藏を小陰へ招き、お熊が身の上を聞き糺しければ、三藏は言ふ様、

三藏「彼は元有徳の町人の世話になり居たりしが、其の男身逝りしより詮方なく、旅稼に出でしなり。今親類とてもなく、只一人の弟あり。是れとても江戸に居るなり。頼み少の者なれば、貴君が御世話下さるに於ては、喜ぶべし。」と、執持顔に言ひければ、九太夫益々喜び、

九太夫「然らば、兎に角御身に任せるまゝ、宜きに取計らひ給はるべし。」と聞き、三藏點頭

き、
三藏「まづ、貴君は何喰はぬ顔にて、坐し給へ。宜き時分には我咳拂なせば、暇を告げて座を起ち、歸り足に我が家へ立寄り給へ、首尾して會すべし。」とて私語り、夫れよりお熊を招き、事の由を話しければ、固より女は粹者なれば、大に喜び、
お熊「兎角身の言葉は、背くまじ。宜しく計ひ給はるべし。」と、得心なせば、三藏言ふ様、

三藏「然らば、今より我が家へ行き、待ち給ふべし。首尾を見合せ、九太夫どのを忍ばすべし。」
と、私語き別れぬ。

斯くて好き折柄、座を見て咳拂なし、三藏目で知らせければ、九太夫夫れと解り、好き時分に別れを告げ、座を起ち、宿へ歸る體にもてなし、三藏が宅へ立寄りければ、女は先刻より待ち兼ね、火など掻き均し、面はゆげに見えければ、九太夫尙々思ひに堪へ兼ね、女の傍に坐し、言ふ様、

九太夫「今日圖らずもお目に懸りしが、サテく美しき容貌かな。一目見るより戀風にて、それまで飲みし酒も醒めたり。殊に唱歌の美音と云ひ、思ひに堪へ兼ね、三藏を以て言ひ寄りし處、早速の承知忝なし。」

と、酔ひに乗じて言ひ寄れば、お熊謂ふやう、

お熊「賤しき此の身をお黝り下さるかは知らねども、その優しさにほだされて、先程この身の

概略は、三藏殿より申し上げし通り、頼み少き纖弱き女、何卒お世話下さるべし。」と、顔に袖當て、なほも思ひはますら男の、仇にはせじと夢見草、仇なちぎりを結びけり。

これよりして、夜毎日毎お熊が處へ通ひ、家には少しも居ず、飲酒のみにて日を送りぬ。その上お熊は、大の驕奢者にて、日夜近所の男を引き込み、飲むやら唄ふやらして、揚句の果は喧嘩沙汰なり。皆その入費は、九太夫一人なり。殊にお熊が弟に半藏といふ者、心好からぬものにて、五兩十兩の無心度々にして、貸さぬ時は衣類等を持ち出す。これ又度々にして、何時とても九太夫が皆尻を拭ひしなり。されどお熊が色香に迷ひ、金銀は愚か妻子も捨てる量見となり、内を外となして、家事の取締もなき故、妻のお高これを歎き、折々諫めると雖も、更に聞き入れず、強ひて謂ふ時は悋氣なりとて打ち擲き、酷くすること數限りなし。その上夜に入ると、庭の面にて、さも哀れなる聲をして、泣く聲しきりに聞え、また雨のつれづれに、お高は添へ乳しながら、獨り身の淋しき、過ぎにしことども思ひ出し、涙に暮れる時、一間の中にてくづくと、笑聲聞えぬ。是れに依つて奉公人も居付かず、段々と暇を取り、漸う年久しく使ふ老爺に、お高と娘計りなり。斯くすること三箇年の中に、段々

田畑も質入れなして、不自由勝なりと。

此處に家附の親類に、久兵衛と云ふ者、餘りに見兼ねて、或時九太夫を我が家へ招き、一問へ請じて言ふ様、

九兵衛「御身久野の家へ入夫となりしより、家事の取締も宜く、養父に優りて理非も分る故、村中の用ひも宜く、人々も尊敬する故、親類等も安堵して喜ぶ中に、實子の小太郎亡くなられてより、其處許の身性宜しからざる風聞を、陰ながら承はると雖も、若い中はある習慣と打捨て置きしが、此の頃の放蕩目に餘る故、及ばすながら御訓戒申さん。御身身上に代へても世話致さる、お熊と申す女は、元吉原町にて遊女を致し居りし所、客に請出され圍女となりし中、鬼半次と云へる悪者と不義して追出され、詮方なしに旅稼に出では、三箇年以前なり。今に彼の悪者の手の切れざる證據は、鬼半次が弟半藏と云ふ者、彼實の弟なりとて、折々常村へ來り、お熊が宅へ無心に行く様子なり。我此の事を委しく知ると云ふことは、此の程江戸より、上總屋五郎兵衛と云ふ道具屋の買出來り、一夜泊りて委しく語られしなり。其の上女も大酒にて、心宜からぬものと承はれば、此の上彼等馴合にて、如

何なる悪事を工まんも計り難し。依つて御訓戒申すなり。其此處處を辨へぬ其處許にてはなかりしが、此の道計りは、恰愼なもの程愚になる習慣なり、今足下本心に立歸り給へば、五箇年の中には、元の身代に取返すべし。今日後心を改めて、彼の女のことを、思ひ止まり給へ。」と、深切に事を別けて訓戒なしければ、固より理非の分りし九太夫なれば、頭を下げ、暫時物をも言はず居たりしが、稍あつて言ふ様、

九太夫「親身も及ばぬ御訓戒に就き、今より心を改め家業精出し、ふつ、女のことと思ひ止るべし。」と、涙を流し物語りければ、久兵衛大いに喜び、

久兵衛「數ならぬ某風情の訓戒に、就き給はる段忝なし。」と、夫れより四方山の話をし、其の夜は宿へ歸り、五六日は宅に計り居る所、お熊の所より毎日の文にて、是非々々お目に懸りたしとて、幾度となく使の來る故、九太夫堪へ兼ね熟々思ふ様、三箇年の間お熊に入れ揚げし金銀は、餘程のことなり。能くも是れまで我を魅せしなりと、思ひのたけを彼に言ひ聞かせ、其の上に斷然思ひ止らんと覺悟を極め、其の夜は妻のお高にも事の由を物語り、暮れるや否や、お熊が所へ到りける。是れぞ赤繩の悪縁なる。世の人々迄お熊と異名せし程